

Cluverius の *Introductionis in universam geographiam, tam veterem quam novam*

—— 第3巻第9章～第6巻第10章の翻訳 ——

立岡 裕 士

(キーワード: Cluverius, 地理学史, ヨーロッパ, 17C)

例言

- ①本稿は Cluverius の *Introductionis in universam geographiam, tam veterem, quam novam* の翻訳の一部である。
立岡 (2022) に続く、第3巻第9章～第6巻第10章を訳したものである。立岡 (2022) に先行する立岡 (2021a), および本稿に続く部分を訳した立岡 (2021b) とをあわせて、Cluverius の全訳となった。
- ②翻訳に利用したのは Internet Archive (<https://archive.org/>) で提供されている、philippicluverii00clve_4.pdf である。適宜 philippicluverii00clve_2.pdf も参照した。この両者を含め、本書の諸版についてはその概略を稿末に補説として記載した。
- ③Cluverius はたとえば Martin (2005) でも言及されるなど、現在でも全く忘却された地理学者ではない。しかし本書は、管見の限りでは Kish (1978) が第1巻第1章および第6巻第12章を (おそらく仏語版から) 訳出しているにすぎない。訳者は本書を、ヨーロッパに地理学が導入された最初期の作品の一つとして取り上げた (この点は別稿を準備中である)。
- ④ () は原書中で僅かに使用されている。訳者は訳文の都合上、原書にない場合でも使用した。
- ⑤ [] は訳注である。原語を示したり簡単な説明を加えたほか、Cluverius の記事で先行文献が明示的に言及されている場合に当該文献の関係位置を示すのに用いた。これは以下の文献である (() 内は訳者が参照した版) :
 - ・ Apuleius: *De mundo* (Tusculum)
 - ・ Caesar: *Commentarii de Bello Gallico* (Loeb および国原吉之助訳 (1994) 『ガリア戦記』講談社)
 - ・ Cassius Dio: *Romaike Historia* (Loeb)
 - ・ Diodorus: *Bibliothēke* (Loeb および飯尾都人訳 (1999) 『ディオドロス「神代地誌」』龍溪書舎, 9～469)
 - ・ Florus: *Epitome* (Loeb)
 - ・ Jordanes: *Getica* (the Latin Library (<https://www.thelatinlibrary.com/index.html>) 所収の <https://www.thelatinlibrary.com/iordanes1.html> (IORDANIS DE ORIGINE ACTIBUSQUE GETARUM))
 - ・ Lucanos: *Pharsalia* (Loeb および大西英文訳 (2012) 『内乱上』岩波書店)
 - ・ Mela: *Chorographie* (Bude および飯尾都人訳 (1999) 『ディオドロス「神代地誌」』龍溪書舎, 471～570)
 - ・ Ovidius: *Metamorphoses* (Loeb)
 - ・ Plinius: *Naturalis historia* (Loeb および中野定雄 (1986) 『プリニウスの博物誌 I』雄山閣)
 - ・ Silius: *Punika* (Loeb)
 - ・ Strabon: *Geographika* (Vandenhoeck および飯尾都人訳 (1994) 『ギリシア・ローマ世界地誌』龍溪書舎)
 - ・ Tacitus: *Germania* (Loeb および泉井久之助訳 (1979) 『ゲルマニア』岩波書店)
 - ・ Tacitus: *Agricola* (Loeb および国原吉之助訳 (1996) 『ゲルマニア アグリコラ』筑摩書房)
 - ・ Tacitus: *Annales* (Loeb および国原吉之助訳 (1965) 『タキトゥス』筑摩書房)
 - ・ Tacitus: *Germania* (Loeb および国原吉之助訳 (1996) 『ゲルマニア アグリコラ』筑摩書房)
 - ・ Zosimus: *New History* (Ridley, R. T. (1982): *Zosimus*. Australian Assoc. for Byzantine Studies, Dpt. of Greek, Univ. of Sydney)
 - ・ アリストテレス「気象論」(泉治典訳 (1969) 『アリストテレス全集 5』岩波書店, 1～227)
 - ・ ウェレイユス (西田卓生・高橋宏幸訳 (2012) 『ローマ世界の歴史』京都大学学術出版会)
 - ・ オウィディウス「黒海からの手紙」(木村健治訳 (1998) 『悲しみの歌／黒海からの手紙』京都大学学術出版会)

- ・キケロ「トゥスクルム荘対談集」(木村健治・岩谷智訳(2002)『キケロー選集12』岩波書店)
- ・トログス・ユスティヌス(合阪學訳(1998)『地中海世界史』京都大学学術出版会)
- ・プトレマイオス(中務哲郎訳(1986)『プトレマイオス地理学』東海大学出版会)
- ・プラトン(岸見一郎訳(2015)『ティマイオス／クリティアス』白沢社)
- ・ヘロドトス(松平千秋訳(1971)『歴史 上』岩波書店)
- ・ポロ(高田英樹訳(2013)『マルコ・ポーロ／ルスティケッロ・ダ・ピーサ 世界の記』名古屋大学出版会)
- ・ヨセフス(秦剛平訳(1999)『ユダヤ古代誌1』筑摩書房)

⑥ *Cluverius* が他者の文献を利用する場合、以下の四つの形式がとられている：

- (1) 文献(著者)名を明示するとともに、原文をそのまま引用し、該当箇所をイタリックとしている場合。
- (2) 文献(著者)名を明示し、引用部分をイタリックとしているが、原文そのままではなく、単語は同一ながら自身の文章にあわせて文法的に改変(主格を対格とするなど)する場合。いわば間接引用文である。
- (3) 文献(著者)名を挙げ、若干の単語は原文のものを利用するが、基本的には単なる言及である場合。
- (4) 文献(著者)名を挙げることなく、典拠文献の文章をそのまま地の文として利用する場合((2)のような文法的改変を加える場合も含む)。

本訳稿では、(1)(2)はイタリック部分を「」で示すことで引用であることを示した。(1)は邦訳書がある場合は利用した。(2)(4)については訳文の都合上、邦訳書を利用していない。(4)については、下線を引いてその箇所を示し、また典拠の該当箇所を示した(言うまでもなく(4)であることを訳者が認識できた限りである)。(1)(2)の場合でも *Cluverius* は引用の出所を細かく指示することはほとんどない。本訳稿では(3)(4)の場合も含めて訳注としてそれらを補った。指示方法は、訳者が利用した版でのページ番号ではなく、参照した各文献の固有(通用)の巻・章・節などを小数点で繋いで表示した。

- ⑦ 固有名詞(地名・人名)は原書(すなわちラテン語化表記)のままとし、原則としてカナ表記の煩を避けてローマ字のままとした。
- ⑧ 本書に記載された歴史事象について疑念のある箇所は少なくない。しかし事実的な内容については本訳稿の主たる関心ではないため検討していない。
- ⑨ 距離の測度については本書第1巻第9章で説明されている。本訳稿では *passum* (≒1.5m) を「歩」と訳し、*millia passum* を「千歩」、*milliaria* を「M」と表示する。ただし *Germanica milliaria* は「GM」、*Germanica milliaria communia* は「GMC」と略記する(本訳稿では原文における *communia* の有無にしたがって表記し分けたが、本書では GM と GMC とは同義に使われていると思われる)。なお、本書第1巻第9章で距離の測度が国によって相違するゆえに 1 *milliaria* の長さが不同であることを論じ、かつ *Germanica milliaria(communia)* という表記を用いる箇所があるにもかかわらず、そうした形容詞なしで *milliaria* とだけ表記している場合も多い。

第3巻

第9章 Rhenus 此岸, Gallia にのみ位置する Germania 帝国の諸州について

Leodicensis 州 (Gallia 語では *Liege*, 高地 Germania 語では *Luttich*, 低地 Germania 語では *Luyck*)

Leodicensis 州はあらゆる面で Belgici に囲まれているにもかかわらず、神聖帝国の方を向き、Colonia 大司教に従属している。首邑は Leodicum である。偉大で壮大な街で、壮麗な建物で整備されている。快適さと魅力のために祭司のさまざまな楽園と呼ばれる。*Huy* は、丘のある美しい街である。*Bullion* はかつて公が支配していたが、いまは Leodicensis 司教に従属する。その名前がつけられた、すこぶる堅固な城がある。

Iuliacensis 公領 Gulich

Iuliacensis 公領に名前を与えている首邑は、古くかつ要害堅固な Iuliacum の街である。Iuliacensis の領内に、

Aquae Grani すなわち俗に Aquisgranum (高地 Germania 語では *Ach*, 低地 Germania 語では *Aken*, Gallia 語では *Aix*) と呼ばれる街が位置する。すこぶる健康的な温泉の故に有名である。Germania の初代皇帝 Carolus Magnus の宮殿と墓所とで知られる。かつて皇帝たちはこの聖地に懸けられた鉄の花環の下で占うことが習慣となっていた。

Coloniensis 大司教領

Coloniensis 管区[dioecesis]はかつて Rhenu の両岸に古い Ubii の座を占めていた。まさに Colonia Agrippinensis の街は、すなわち俗に *Colonia Agrippina* と呼ばれるように、Ubii の首邑で、Claudius 帝の妻 Agrippina の創始に導かれた植民により、名と添え名とを身に帯びた。街は今や Germanica の街のなかで最大である。Rhenus 近くの市場は極めて有名である。さらに、帝国の自由都市である。Bonna は古代の要害堅固な都市で、選帝侯たる Colonia 大司教の座である。

Lotharingia (Lottheringen)

Lotharingia 公領は Carolus Magnus の孫 Lotharius から名前を受けている。その首邑はかつて帝国自由都市の Divodurum Mediomatricorum (俗に *Metz*) であった。そして今は Gallia 王がこれを把持する。Virodunum (*Verdun*)・Tullum (*Toul*)・Nansium (俗に *Nansii*) とともにいまは公の座の一つで州の首邑であり、顕著な要害堅固な街である。

Avstrasia (Westreych)

Austrasia は Treverensis・Moguntinus 両管区、さらに Bipontinum (俗に *Zweybrücken*) 公領・*Sarbrücken*・*Leyningen*・*Bitsch* 伯領を包含する。

Treverensis 大司教領は Augusta Treverorum (俗に *Trier*。Gallia 語では *Treves*) が首邑である。その古風さを誇示している街である。Confluentes (*Coblentz*) は、Rhenus・Mosella の合流点近くに置かれている。決して些少なものではない。Vitellicum (*Wittlich*) は Treverensis 大司教・選帝侯の座である。

Moguntinus 大司教領は、首邑は Moguntiacum すなわち Moguntia (*Mentz*) で、Germania の優れた都市に数えられている。大司教・選帝侯座は Rhenu の彼方 Germanicus にのみある。Asciburgii (*Ascheburg*) である。さらに、Austrasia には帝国自由都市がある：Wormatia (俗に *Vorms: Oppenheim*)。そして Spira は全帝国の conventus iudicis のゆえに有名である。Camera Imperialis (俗に *Franckendhal* と呼ばれる) は Belgii によって洗練された極めて美しい街である。

Alsacia (Elsass)

Austriaca の支配する領域である Alsacia は、高低二つの Landgraviatus に分けられている。高 Landgraviatus には、Colmaria・Selestadium・Raufacum の街があり、いずれも無名ではない。低 Landgraviatus には、Taberna(俗に *Zabern*)・Hagenoa がある。同地方の Argentoratum (俗に *Strassburg*) はすこぶる有名な Germania の都市の高塔の一つであり、それは Cathedrale Ecclesia の近くにあつて、驚嘆すべく豪華に築かれている。さらに、整備行き届いた兵器廠のゆえに極めて卓越している。

Montbeliard

Montbeliard (Germania 語では *Mümpelgard*) は Alsacia・Burgundia 両伯領に接し、VVittembergensis 公に従属する。Montbeliard の街自体が、全く安全に要害堅固であるため有名である。

第10章 Suevia・Franconia・Palatinatus Rheni

Brisigavia (*Brisgaw*)

Rhenus 彼岸の最初は Brisigavia 地方である。かつて Elsatia の一部であった。この州の首邑は Friburgium で、壮麗で快適な街である。それに次ぐのは Brisiacum (*Breisach*) である。

Svevia (*Schwaben*)

Suevia は、Danubium 最上流部に住んでいた、かの粗野で些末な部族の名残りの一つである。この公領第一の街は Augusta Vindelicorum (*Augsburg*) で、繁華な市場、特に壮麗で豪華な街、安全に要害堅固な、帝国自由市である。Vlma はすこぶる要害堅固ですこぶる富裕な帝国市である。建築の壮麗さのゆえに容易に近隣に立ち勝る。その他の場所も優れている。*Nordlingen・Memmingen・Lindaw・Füessen・Rottvui* は帝国の *conventus juridici* である。

VVirtembergensis 公領

VVirtembergensis 公領は VVirtemberg 城にちなんで名がつけられた。かつて Suevia の一部であった。最近公領となったため、この州は他とは別のものと見られる。ここで著名な街は、*Canstat* (定期市で有名)・*Stuttgart* (公座) である。Rotenburgium のなかでは Tubinga が他を圧している。

Franconia すなわち東 Francia (*Franckenland*)

公がおり、彼と司教とは、州の首邑である Herbipolis (俗に *VVurtzburg*) にちなんで Herbipolitanus という添え名で呼ばれる。この街はとりわけ素晴らしい。そして Francofurtum ad Moenum は帝国自由都市であり、Germania はもとより全 Europa で最も有名な定期市で知られる。Bamberga は司教の威光によって有名であり、Germania の中心を占めていると見られる。Franconienis の領内には *Ansbach* 城がある。称号について喜んでいる侯領である。

Rhenus の Palatinatus (*die Pfaltz*)

かつての Franconia の一部がいまは Rhenus の Palatinatus である。州の首邑は Heidelberga であり、同じ街が Palatinus 選帝侯座である。Rhenus と Nicri との合流点近くの Manhemium はすこぶる要害堅固な街で、州の防壁である。同じ地方、Elsatia・Palatinatus 間に Badensis 侯領がある。全 Germania で最も有名な温泉にちなんで名づけられた。侯座は Durlacum で、城のある街である。

第11章 上 Palatinatus・Bavaria・Salisburgiensis 大司教領・Tirolis 伯領

Nortgavia (*Nortgaw*) と Bavaria の Palatinatus すなわち上 Palatinatus (*die Ober Pfaltz*)

Norimberga (*Nürnberg*) は Franconia・Suevia・Bawaria の辺境に位置する。3 者のいずれもそうであることを望んでいない。街は壮麗・華麗・有力で、全 Germania で最も誇り高い。Nortgavia の首邑はいまは Amberg と考えられる。*Neuburch・Sultzbach* は選帝侯座である。この場所の近くに Landtgraviatus Luchtenbergicus がある。その座 *Pfreimbt* と Egra (*Eger*) とは帝国自由都市である。同様に、*Ellenbogen* 伯領は Boiohaemia 近くに位置する。

Bavaria (Baieren)

Bavaria 公領は上下に分かれ、前者は西に、後者は東に位置する。上 Bavaria には有名な街 Monacum (*München*) がある。Germania の全都市のなかで最も著名である。それに次ぐのが Ingolstadium であり、Frisinga がそれに続く。下 Bavaria では Augusta Tiberii で、この名前は、かつて文法家たちの虚説によって誤ってこの街につけられたものである。他の街は Ratisbona (俗に *Rogenburg*) と言われる。帝国議会は、古俗の名残りによりここで開催されるのを常とした。それと、著しく長い橋とによって有名である。その他に銘記するに値するのは Patavium (俗に *Passav*)・Landshut・Straubing である。

Salisburgiensis 大司教領

Bavaria の一部が Salisburgiensis 大司教領である。その首邑にして大司教座であるのは Salisburgium (*Saltzburg*) で、全く上品な街である。

Tirolis 伯領

Tirolis (俗に *Tyrol*) は、Europa の最も高い伯領として、その地では Alpes, Germania では Norici, Italia では Rhaetia の一部を保持して、名前とするほどの、山頂である。有名な街は、Aenipon (俗に *Insbruck*) でかつては伯の、今は Austria 大公の、この地方における座である。Tridentum (Italia 語では *Trento*, Germania 語では *Trient*) は世界会議で有名である。Bolzanum は無名の市場ではない。さらに Brixia (俗に Brixen) はこの地方では新しい司教領である。

第12章 Croatia・Vinidorum Marchia・Carniola・Carinthia・Stiria・Austria

Croatia・Marchia Vinidorum・Carniola・Carinthia・Stiria・上 Austria は今日、Austriaca 家に服属するので、かつて Pannonia の一部であったにもかかわらず、今日では Germania に数えられる。

Croatia・Vinidorum 辺境伯領

Croatia (Germania 語で *Krabaten*) は王国の称号に相応しい。Vinidorum 辺境伯領 (Germania 語で *VVindisch Marck*) 自体には銘記するに値するものは何もない。さらに、いずれも住民は Slavonici 種族である。ただし Vinidorum 辺境伯領ではまだ Germani である。

Carniola (Krain)

この公領の首邑は Lubiicum (*Laubach*) の街である。Lubiana とも言われる。*Krainburg* はその場所がすこぶる要害堅固である。Celeia (*Cilly*) は伯領の称号で飾られている。さらに、住民の一部は Germani で、一部は Slavi である。

Carinthia (Kernten)

この公領は Stiria 公領に隣する。より優れた街としては *Villach*・*Claghenfurt* (かつての公座)・*Volckmarck*・*S. Veit*・*Iudenburg* がある。

Stiria (Steirmarck)

Stiria は上下に分けられている。全 Stiria の首邑および Austria 大公座は後者にある Graetia (*Grais*) である。はなはだ壮麗である。さらに、有名な街には *Rackelspurg*・*Pettavv*・*Marburg* がある。*Kermend*・*Canisia* の二つ

は Turci の侵略に対してとりわけ堅固な城であった。しかし今はつとにキリスト教徒によって解放されている。上 Stiria で重要な街は Muripons (*Pruck an der Mure*) である。

Avstria (Oosterreich)

Europa の全ての大公領のなかで比類ないのが Austria である。上下に分かれている。下は Danubium 川・Boiohaemia 川・Teja 川の間に位置する。主な街として *Krembs* がある。上は Danubium・Stiria 間に位置する。首邑は Vindoniana, すなわち俗に Vienna (*Wien*) と呼ばれている。壮麗にして華麗な街で, Turci の攻撃に対してこの地方において最も安全な防壁である。Lincium (*Lintz*) は Danubius に近い新しい市場である。

第13章 Boiohaemia・Moravia・Silesia・Lusatia

Boiohaemia 王国 (Germania 語で *Böheimb*) は, 山岳と森とによって, あたかも要害堅固な谷によるかのごとく, 四方を取り巻かれ, もともと Germania 族のあるものが住んで, 彼らの一撃によって Gallica の一族 Boji が住んだ。彼らに由来する名前もこの地方に残っている。Boji を Germanica 種族の Marcomanni が追い出した。彼らを, AD550年頃 Slavonica 種族が追い, 現在でも保持している。Bojohaemi は *die Böhmen* を単独で占拠し, Germania 語でそう呼ばれる。*Czechi* は自分たちについて自身の祖国の言葉で呼ばれている。侵略の初めに, 人民は公に支配されていた。1536年頃, Vratislaus が初代の Bojohaemia 王に選ばれた。その後, 一つの家系において他の諸王が継起した。王統が事実上絶えるに及んで, Austriaca 家の王国に引き寄せられた。この地方はまさに, 人間生活に用いるのに必要な全ての物資が極めて豊かである。銀・銅の鉱山が豊富である。幾つかの場所では金鉱脈すらある。街のなかで最も有名なのは Praga である。王国の首邑, 王の座, 全 Bojohaemiae の焦点である。多くの堂々たる建物のゆえに, 異国人が溢れるゆえに, まことに壮麗きわまりない街である。第二位は Pilsen がたもつ。その他のより有名な街は *Kralovihradetz* (Germania 語では *Königgratz*)・*Kutnahora* (Germania 語では *Kuttenberg*)・*Nympurck* (Germania 語では *Limburg*)・*Tabor*・*Budieiovvice* (Germania 語では *Budveiss*)・*Lanii* (Germania 語では *Laun*)・*Satetz* (Germania 語では *Satz*)・*Litomierzitze* (Germania 語では *Leitmeritz*)・*Chomutovv* (Germania 語では *Commetavv*)・Carolina 温泉 (*Karlsbad*) の小町はすこぶる健康的な温泉のゆえに極めて喧伝されている。

Moravia (Mähren)

Boiohaemiae 地方の下は Moravia・Silesia・Lusatia に数えられる。Moravia 候領はその名を Danubium に注ぐ川 (Plinius¹⁾は Morus と, Tacitus [Annalium 2.63] は Marus と, 呼ぶ) によっている。Slavonici と Germani とが混じった種族が住む。最も有名な街は Olmitz (Slavonici 語で *Olomuce*) でこの地方の首邑であり, 洗練され豊かである。*Brin*・*Znaim* はすこぶる華麗な街のなかで他に劣るものではない。*Iglaw*・*Kremsier* は侮るべからざる街である。

Silesia (Germania 語で *Schlesinghen*。Schlesien と)

Silesia の広大で豊かな地方は, 公領の名のもとに16の首長領に編成されている。それらの名称は *Breslavv*・*Glogavv*・*Sagan*・*Schvveinitz*・*Lignitz*・*Briege*・*Neisse*・*Crossen*・*Teschen*・*Oppelen*・*Ratibor*・*Munsterberg*・*Troppe*・*Iaur*・*Olse*・*Lagerndorff*。初め, Silesia 全域は Polonia の王に従属していた。後, 1300年頃, Bohaemia 王に忠誠を尽くし, いまでもその命に懸けている。第一の街は Vlatislavia (Bojohaemi 語で *Wratzlavv*, Germania 語で *Breslavv*) で, この地方で最も有力な市場で, まこと壮麗な街, 当然にも Germania で最も美しい3市 (他は Monacum・Lipsia) の一つに数えられる。これに次ぐ第二の街は Glogovia (大と添え名がつけられ, *GroossGlogavv*) がある。これに, *Sagan*・*Schvveinitz*・*Neisse*・*Lignitz*・*Briege*・*Olavv*・*Oppelen*・*Troppavv*・*Teschen* が続く。さらにこの地方には, Bojohaemia・Silesia 間に, それ自体の司法の Glacensis (*Glatz*) 伯領がある。伯の家系が絶えたので, いまは Bojohaemia 王がその称号を享受する。

Lustia (Laussnitz)

Silesia の、夏の入り日方に隣接するのは Lusatia で、Hexapolitanus 平野では *die Sechsstätte* (六個一組の町の数によってこのように呼ばれる) が有名である。それらの名前は *Bautzen*・*Gorlitz*・*Sittaw*・*Kamitz*・*Luben*・*Guben*。これらのうち前3者は十分に洗練されている。

第14章 Brandeburgiensis 辺境伯領 [marchia]・Pomerania・Meckeloburgium・Holsatia

Brandeburgiensis 辺境伯領

この地方は広大で、広漠たる森・湖・沼沢地のゆえに通行不能で、Brandeburgium の町にちなんで名づけられた。二つの主要部分に分けられている。旧辺境伯領と新辺境伯領とである。旧領の首邑は *Brandenburg* で、新領では *Francofurtum ad Oderam* であり、有名な都市で、市場ゆえに名高い。*Berlinum* は州の中央に位置する。Brandeburgiensis 選帝侯の座である。すこぶる快適な街である。*Costrinum* (俗に *Köslrin*) は驚くべき防御施設のゆえに名高い町である。もう一つの城は *Spandavv* で、*Berlinum* に近い。その他、*Crossen* 公領は昔は Silesia に数えられていたが、今は Brandeburgiensis 辺境伯領に属する。

Pomerania (Pomern)

Pomerania 公領は無人で肥沃ながら、Codanus 海岸に沿った長い地区によって延びる。公の威光によって支配されている部分は七つに分けられている。それらの公領の名称は *Wenden*・*Stein*・*Gütschkow*・*Wolgast*・*Vsedom*・*Rügen*・*Bart*。このうち *Rügen*・*Vsedom* は島嶼である。Pomerania の首邑は *Stetinum* で、狭小な空間の街ではない。また市場は繁華である。これに次ぐのが *Stralesond*・*Wolgast*・*Gripeswold*・*VVollin* である。この地方でかつて最も繁華な市場であったのは *Stargard* である。*Colberg*・*Camin*・*Coslin*・*Stolpe* は優れた町である。

Meckelburgiensis 公領

Meckelburgiensis 公領を、Latin の庶民は誤って *Megalopolitanum* と呼んでいる。有名な街は *Lubeca* (*Lübeck*)・*Rostochium* (*Rostock*)・*Vismaria* (*Wissmar*)。Lubeca はかつて、海のゆえにすこぶる富裕で有力な帝国市であった。いまでも *Suedici*・*Moscovitici* との交易によってすこぶる繁華な市場である。街は大きく、華麗にして壮麗である。

Holsatia (Holstein)

この地方は、厳密に言う Holsatia と、Ditmarsia, Slesovicensis 公領に分かれる。Ditmarsi (*die Ditmersen*) は最近自由になった種族で、いまは Dani 王の支配下で村ごとに居住する。Holsatia 全体で最も有名な街は *Hamburgium* である。*Albis* 川付近のすこぶる富裕な市場である。世界のさまざまな部分からの船がここに輻湊する。*Kiel* も同様である。*Ekelnforde*・*Hesem* は輝かしく繁華な町・港である。内陸には *Flensburg*・*Rensburg*・*Sleswyck* がある。これらとほぼ隣接して、公の座である *Gottorp* 城がある。

第15章 Luneburgiensis 公領・Bremensis 大司教領・東 Frisia・VVestfalia・Clivia・Montanus 公領

Luneburgiensis 公領

この公領はその首邑 *Luneburgum* (*Luneburg*) にちなんで名づけられた。この街はすこぶる端正で、特に塩泉で有名である。*Cella* (*Cell*) は公の座である。*Danneberga* は伯領の称号で飾られている。

Bremensis 大司教領

Bremensis 大司教領の首邑 Brema (*Bremen*) は傑出し壮麗な市である。市場は無名ではない。Visurgi 川によって船舶の接近に便利である。Stade は Anglum の Albis 川近くの町で、Germania 全域で布切れを取引する。最近では繁華な市場である。Vorde すなわち Bremerforde は街路のある城であり、Bremensis 大司教座である。

東 Frisia

東 Frisia (*Oost-Frieslandt*) は、その首邑 Emda (*Emden*) にちなんで別名 Embdanus 伯領と呼ばれる。Emda は確かに広大な街ではない。港については繁華である。Auricum (*Aurick*) は伯の座である。

VVestfalia (*Westfalen*)

VVestfalia は十分に広大な地方で、人間にとってよりも「獣の？」群れにとって養うに都合がよい。荒涼たる森と忌まわしく数多い沼沢地とを以て、古人がかの Germania を報告している [Germania 5] のが見られる。司教領・伯領が交錯することで際立っている。司教領は Monasteriensis・Paderbornensis・Verdensis。Monasterium (*Münster*) は全 VVestfalia の首邑である。優れた壮麗な市で、すこぶる快適な土地に位置する。先年、熱狂的な再洗礼派の王国として著名であった。VVestfalia のなかで Monasterium に続くのは Susatum (*Soest*) である。他の何よりもその大きさのゆえに有名である。さらに、Tremonia (*Dortmund*)・Minden・Osenbrugge・Paderborn は、住民の多い街である。著名な伯領は Marck・Oldenburg・Delmenhorst・Bentheim・Arnsberg・Lingen・Teickelenburg・Waldeck, など。Lingen はすこぶる要害堅固な町である。

Clivia (*Cleve*)

Clivia は Rhenus の兩岸に延びている。首邑である Clivia にちなんで伯領全体の名前が付けられた。Iuliacensis 伯領に隣接する。Clivia を包む山地 [Colles] すなわち Clivi [山地] から街の名が付けられたと庶民は信じている。全てのなかで最も有名なのは Vesalia (*VVesel*) で、次は Emeriacum (*Emmerick*) である。Santen は古代 Roma の遺物によって太古の起源と明彩陸離たることを示している。Monrs は伯領の称号によって注目される町であり、極めて要害堅固であることで有名である。

Montensis 公領

Clivensis 公領に隣接する Montensis 公領は俗に Berg である。その首邑 Düsseldorf は城のある町であり、公の裁判官・Clivia・Berga の座である。

第16章 Haßia・VVetteravia・Buchovia Thuringia

Hassia (*Hessen*)

Hassia 方伯領 [landtgraviatus] は、そのなかに名高い Zigenhaim・Nida の伯領を有する。州の首邑は Castellum Cattorumd, すなわち今は俗に Cassella (*Cassel*) と呼ばれており、華麗な城のあるまことに優雅な市である。方伯座である。次は Marpurgium で、文学研究によって極めて有名である。Giessen は全州で最も要害堅固な町である。

VVetteravia (*Wetteravv*)

Hassia と Rhenus 川との間に Wetteravia がある。すこぶる優れた Nassovicus 伯領が極めて有名になっている地方である。この国の、Belgica 同盟を防護したというかの武勲と栄光とをもつ Mavritius 公 [Princeps] はそこか

ら始まる。

Buchovia (Buchovv)

Hassia・Franconia・Thuringia の中間に Buchovia 地方が位置する。その首邑 *Fulda* は繁華な町で、Germania のみならず Europa で最も秀でた大修道院で際立つ。

Thuringia (Düringen)

Thuringia 方伯領は全ての中で最も優れている。Sala・Visurgi 両川の間に延びる。Saxonica 家に従属する。この地方の首邑は Erfordia (*Erfurt*) である。巨大な街で、あたかも全州の結節である。かつて学園で有名であった。Vimaria (*Weimar*) は公 [Princeps] 座である。街はすこぶる快適である。Gotha には倒壊された *Grimmensteyn* 城がある。Augusti Elector による城に対する包囲攻撃によって倒されたことで有名である。Musa の *Iena* は邸宅である。Isenacum (*Eisenach*) は公座である。

さらにこの州には Coburgiensis 公領がある。その首邑 *Coburgium* は、優れた城のある街で、公座である。同じく Swartzeburgiensis 伯領は、その首邑 *Arnstad* が侮るべからざる町である。

第17章 Misnia・Saxonia・Brunsvicensis 公領

Minsia (Meissen)

Minsia 候領 [marchionatus] は Saxonia 公の居所であり、土地はすこぶる快適で、売却する銀にはなはだ富む。街々のゆえに華麗な地方である。街のなかでは、Misnia がかつて最初に Albis 川近くに位置した。そこから州の名前が [つけられた]。いま全ての中で最も有名なのは Lipsia (*Leipzig*) である。かくも大きく真の建物の輝き、住民の風俗、農地に囲まれた快適さをもしあなたが見るのでなければ、Germania 全体においてこれほどまでに素晴らしいものに会えることはできないと信ずることになる。ここで年に何回も立つ市のゆえに、*Francofurtum ad Moenum* について、すこぶる有名である。Noviburgium (*Naumburg*) はより大きいが華麗さではやや劣る。これもまた市のために有名である。Dresda (*Dresden*) にはすこぶる立派な城がある。選帝侯座である。この Albis にかかる橋、騎兵・兵器廠の *Stabulum*、は喧伝されている。かの兵器廠を住民は *die kunstammer* と呼ぶ。すこぶる多くの銘記するに値するものが見られる。*Freiberg・Annaberg・Mariaberg* は銀山で富んだ町である。*Weissensels・Zvicka・Zeitz・Chemnitz・Torga・Iochmsthal* は侮るべからざる町である。これらのうち最後のものは Bojohaemia 王国の封土である。さらに Miscicum の地には Snebergensis 公領 [pincipatus] がある。*Sneberg* 城の街にちنانで名づけられた。*Hennebergensis* 伯領がそれに隣接する。*Aldenburgium* 公の座である。*Voytlandia* はいまなお Misnica の統治下にある。その首邑は *Hoff* の町で、十分に素晴らしい。

Saxonia (Sachsen)

Saxonia 公領は Albis 川兩岸にある。さまざまな統治権者に分断されている。街のなかで最も有名で大きいものは *Magdeburgium (Meyburg)* で、Bruchgraviatus 帝国 S. にして大司教領の称号によりはなはだ際立つ。

Wittenberga は、端正でしかも要害堅固な町であり、かつて Saxonia 公座であった。Martinus Lutherus の神学上の告白によってはなはだ有名である。Hall (俗に *Hall in Sachsen*) は優美な街で、料理によって極めて有名である。Saxonia では、その支配下の Anhaltinus 公領 [pincipatus] は *Anhalt* 城にちنانでこのように名づけられた。これには *Ascanien・Barbi* 両伯領と *Bernburg* 男爵領とが服属する。*Dessavv* は公 [pinceps] の座である。端正な街である。*Servesta (Zerbst)* は確かにこれらよりも大きい洗練されていない。同じ Saxonia で最も有名なのは *Mansfeldicus* 伯領で、*Mansfeld* の町にちنانで命名された。そのなかに他に四つの伯領を含む。

Brnsvicensis 公領 (*Brunsvvick*)

首邑は、公領の名前のもととなった *Brunsvicum* である。帝国の自由権を享受している。街は豊かでまさしく要害堅固である。Brnsvicensis 公に対する重囲をすこぶる頑強に防いだことで著名である。それに次ぐ位置を保持しているのは *Halberstadium*, さらに *Hyldeheim*・*Hannover*・*Goslar*・*Helmstad* で、無視すべからざる町々である。*Wolfenbittel* は要害堅固な城のため、公座である。

第18章 Germania の大司教領および学園について

Germania には七つの大司教領がある：Moguntinus・Coloniensis・Treverensis・Magdeburgiensis・Salisburgiensis・Bremensis・Pragensis。かくも広大な領域においては司教領の数は固定されていない。主要なものには Herbipolitanus・Bambergensis・Argentoratensis・Spirensis・Leodicensis・Monasteriensis・Paderbornensis・Hildesheimensis・Mindensis・Osnabrugiensis・Verdensis・Halberstadiensis・Saxonia の Hallensis・Vradislaviensis など。

著名な学園は Basilea・Brigavia の Friburgius・Argentoratus・Heidelberg・Tubinga・Ingolstadius・Altorfensis・Praga・Francofurrus ad Oderam・Gripsvaldia・Rostochius・Helmstadius・Wittenberga・Lipsia・Iena・Erfordia・Marpurius・Giessa・Colonia。

第19章 Dania 王国

Dania の名前は、Dani すなわち Codanus 人（彼らはかつて Teutoni と呼ばれた）にちなむ。Codanus 湾すなわち Suevicum 海によってさらに多くの部分に分けられる。湾のこちら側の Germania の続きに位置する部分には、我々が呼ぶ前から、Romani によって Cimbrica 半島と呼ばれていた。もともと Cimbri が居住していた。ついで Iutae [が住み], そこから今日に至るまでこの地方の名前 *Iutlandt* [が用いられる]。一つの町 *Flensborg* を除いて、有名なものはない。湾を越えて位置するもう一つの部分を、古人は、Scandinavia すなわち Scandia という名で島であり Suedia・Norvagia と地続きである、と考えていた。今日では十分に確定している。三つの部分に分けられている：*Holland*・*Scanen*・*Bleicking*。前に延びる海岸にある街、というよりも小町、は *Elleboge*・*Lands-kroon*・*Elzenborg* (Danicum 海峡 (俗に *der Sondt* と呼ばれる) に近接する)。内陸には *Londen* がある。大司教座であることで名誉となっている。島々に分散した、王国の第三の部分は中間の場所を占める。この Codanonia では、住民 Codani (彼らは、他の呼称では Teutoni である。古人がそのように呼んだ) 自身によって、生産がかくも多大であることで他に卓越するがゆえに、いまでは Sielandia [と呼ばれる]。ここでは、王国全体の首邑である Hafnia (俗に、住民には *Copehhafen*, *Copinghafen* とも。Germania 語では *Copenhagen*・*Kopenhagen*) が繁華な市場であり、王の座である。Elsenore は、前述の海峡に向かう船舶が着岸することで繁華な地点である。というのも、ここで、通過する船舶が王に対して使用料を支払うからである。それに隣するのは、大洋すなわち湾から起こる力に対抗して築きあげられた、華麗にして城堅固な城 *Cromenburg* である。内陸には *Rotschil* がある。かつては富裕な街であった。いまは諸王の墓所のために有名な町である。*Fredrichsborg* は、すこぶる快適な土地に築かれた城である。王の隠棲地として繰り返し利用されている。

この湾にはさらに、*Bornholm* 島と、それよりさらに大きな *Gothia* (俗に *Gottlandt*) 島がある。白い石が建物の建築に利用される。どちらも Dania の王権に服する。

第20章 Norvagia・Finno 辺境伯領・Islandia・Gronlandia・Frieslandia

Norvagia

Norvagia (俗に住民によって *Norrige*, 縮約して *Norge* とも。Germania 語では *Noortwegen*, *Norwegen* とも。Plinius²⁾ による Timaeus では Nerigon。彼は誤って、北方の全ての島のなかで最大の島だと考えていた) は名前を位置から受けている。というのは、Germania 語の *Nort* は Latini 語でいう北 [septemtrio] のことだからである。その側面は、東は Sevone 山によって、南は Codanus 湾の海峡と大洋とによって、西は同じ大洋によって閉

ざされ、北はこの **Finno** 辺境伯領によって封じられている。地そのものが広大ではあるがはなはだ荒れており岩がちで不毛ないしは巨大な森のために荒廃してる。最古の **Sitones** が住んでいたと言われる。その後まもなく **Norvagium** の有力者がともかく **Dani** において、そして **Frisium** においても、支配者となった。そしていまは **Dania** の王権に服している。その街は **Nidrosia** (俗に *Drunthem*。王国の首邑であり、かつて北方の聖地の瓦礫のうちで最も誇り高いと見られていたときは王の座であった)・**Bergi** (俗に **Bergen**。この地方で最も繁華な市場である。前述の **Timaeus** は島として報告している)。さらに *Anslo* ないし *Opslo* は無名ではない市場である。

Finnorvm 辺境伯領

Norvagia の北に **Finno** 辺境伯領が続く。十分に広大な地方であり、二つの違った権力によって二つの部分に引き裂かれている。南部は **Dania** の、北部は **Suedia** の、王権に服している。

Islandia

Norvagia の海岸から西に向かって150GM 航行すれば **Hyperboreo** 洋のなかでかつて **Britannica** 最遠の島 **Thule** (いまは俗に *Island*) に逢着する。運命づけられている、はなはだしい寒さと恒久的な氷とのために、このように呼ばれる。その大きさと、**Melita** 犬、絶えず火を吐く **Hecla** 山、によって極めて有名である。他の点では、**Dania** 王に服している。

Gronia

Islandia の夏の西の方、ほど近くに **Gronia** (俗に *Groenlandt*) が横たわる。巨大な地の広がりゆえに、島であるのか、**America** の地(こちらの方が **Europa** よりもはるかに近い)と連続する地であるのか、不明確である。海岸における支配権は、発見以来今日まで、**Dania** 王が自らのために主張している。捕鯨によってこの地方は極めてよく知られる。

Frieslandia

同じ **Islandia** の南方に *Friesland* 島が位置する。寒さと、事実上永遠に続く冬とのために、この名前がある。島が服属する **Anglia** 王にとって、漁撈の他には何らの役にもたたない。

第21章 Suedia・Botania・Scrickfinnia・Lappia・Finnia

Svedia

さらに **Suedia** が世界中の王国のなかで最も古い家系として確固たる連続性をもって、**Norvagia**・**Dania** 王国に地続きに結びつけられている。そこには常に **Suiones** ないしは **Sueones** が住んでいた。東は **Finnum** 湾・**Codanus** 海に、南は **Dania** の境界に、閉ざされ、西は **Sevonis** の巨大な山脈によって **Norvagia** から引き離され、北は **Botania** である。王国の南部は古代の名前で **Guthia** (俗に *Gutlandt*) と呼ばれる。その他の部分よりもはなはだ繁華で快活である。王国全体の首邑にして王の座であるのは *Stockholm* で、海の渦に位置する街で、杭の上に建て加えられている。名前はそこから由来した。天然の労作によってすこぶる要害堅固である。また市場はすこぶる繁華である。*Vpsalia* がこれに次ぎ、学園と大司教領とで際立つ。**Dania** との境界にある **Calmar** は十分に大きな街で、繁華な港湾である。同様に *Nicopen* は、要害堅固な町で、有名な市場である。

Botania

Botnicus 湾が **Botania** を東西二つの部分に分ける。湾の最奥部に位置する *Tornia* の市場を除けば、そこには銘記するに値するものは何もない。

Scrickfinnia

Botania の北に Scrickfinni ないし Scritfinni が住む。Botnii とともに Suedia 王権に服する。

Lappia

ここから東に向かって古代 Germania の端までが Lappia (俗に *Lappenland*) である。その住民は, Germanii 語で *Lappen*, Russi 語で *Loppi*, であり二つの種族に区分される。西部の者は Suedia の王権に服する。東部の者は Russici の言葉で *Dickiloppi* すなわち未開 Lappones で, 大 Muscovia 公に臣従する。

Finnia

Lappia・Botnia の南方, Botnicus・Finnicu 両湾の間に Finnia がある。Plinius³⁾によれば Fenningia (彼は島だと考えていた) で, いまは俗に *Finland*, と呼ばれる。Suedici の支配圏の小さからぬ部分である。耕地・牧草地が肥沃なため快適である。街のなかで特に有名なものは Abo (司教座)・Viburgium (Finnicus 湾の最奥部に隠れた, すぐれた市場である)。

第22章 Italia, およびそのさまざまな名称, について

旧・新の Germania の諸部分についての記述から, いまや, 北から南に歩を返しこの Alpes の山脈を越えて Italia を吟味する, すこぶる適切な機会に際会する。それを忌避するだろうか。Italia は威信の点で第一等であった。後の箇所では私はそれを語った。選別された神の摂理により, 地はかつて, 地の全てのものの子であるとともに親でもあったこと。Italia は, 散乱された支配権を一つにし, 習慣を馴致したこと。民衆のかくも対立する野蛮な言語を, 言葉の交換において対話のために結び付けたこと。人間に人道を与えたこと。要するに, 全ての種族のなかの一つが, 全世界において祖国となったこと [Plinius, 3.5.39]。まことに, この地の安全さを, 天の気候を, 日当たりのよい丘を, 暗い森を, 穀物・ブドウ・オリーブの豊穡さを, 家畜の多産さを, かくも安全な山道を, あれほどに気前のよい種類の森の, あれほどの湖の, あれほどの川・泉の, 豊かさを [Plinius, 3.5.41], かくも頻繁になされる入植を, かくも永続する新しい街の魅力を, かくも有名な古い町の偉勲を, そして人々の天稟を, 風俗・習慣を, 言葉でまた武力で成し遂げられた事績を [Plinius, 3.5.42], もしあなたが吟味するならば, 全世界において, これに匹敵する, ましてや凌駕する, と評価されうるものを挙げることはできまい。

[Italia という名前が] 与えられるもとなった名前について, 古人はさまざまに言い伝えている。一説では, 牛に由来する。牛のなかの, 大きさ・美しさの点で豊かなものが Italia と呼ばれると評価される。かくて Latin 語では牛であるものを Graeci は自らの言葉で Ἰταλὸς と呼んだのである, と。

別の古人は, Sículos の王 Italo に由来すると。彼は Sabini・Laium の地所に初めて居住したので, この地の部分が Italia と呼ばれるようになった, 後にその名が Alpes と Siculum の間の全地に移った, と言う。hesperia [西方の地] というのは vespertinus [宵] に座する Hesperus [宵の明星] にちなんで Graeci によって呼ばれたものである (彼らにとってこの星は西に位置していた)。Saturnia・Ausonia・Oenotria・Latiumha は, 太古の Graeci 語に由来するのではあるが, その後 Latin の詩人によって全 Italia に適用され, 厳密に言えばその一部の名称となった, とされる。

さらに, 自然は Roma の支配圏を予期して, 上下の海とすこぶる高い Alpes 山脈と, すなわち極めて堅固な防壁と広大な堀と, によって全土を全周取り巻いたのである。

それ故, 北には Alpes, 東には Arsia Histria 川および上の海 (これは Hadriaticus 湾とも呼ばれる), 南は Inferum (すなわち Tuscum) 海, 西は Alpes および Varum 川, が境となる。

その全長は, Alpinus における果て Augusta Praetoria (いまは俗に Aosta) から, Roma・Capua の街を通り Rhegium の街および Leucopetra 岬 (俗に *Capo dell Arme*) まで行って, 900千歩, すなわち 225GM である。幅は一定しない。Alpes の下では 560千歩すなわち 140GM である。中央を経る Ancona・Tiberina 河口間は 136千歩すなわち 34GM である。古人はこれを柏の葉をもってたとえた [Plinius, 3.5.43]。現在では人々は人間の脚にたとえる。

第23章 古代 Italia の区分について

かつて Italia は、それぞれの時節の時々違った仕方で区分された。種族の移転にしたがって、境界の変更がなされた。我々はその区分をまず追求していく。それは最初の Roma の支配の下でのものである。その後、大洋・Rhenus・Alpes・内海・Pyraeus 山地の間に居住する Gallia 人のうち、巨大な集団、さまざまな種族が Alpes を超えて、Italia の、Alpes・Apenninum の間 Aesis 川沿いの Ancona 付近まで延びる部分に居住した。この Gallia は Roma 人によって Italica と呼ばれた。さらに、此方 Gallia とも、Alpes 此方 Gallia とも。また Padus 周辺 Gallia とも、Gallia Togata とも (Roma 風の外衣にちなむ。Roma 人の服装と習慣とを採用したからである)。Alpes を越えた彼方の Gallia は Comata と呼ばれる (そこの住民が蓄えている長髪、すなわち毛髪にちなむ) からである。さらに Alpes 彼方 Gallia の一部は、Braccae (腿を覆うもの) にちなんで Braccata である。これは Narbonensis 属州と同じである。しかし同じ Gallia Togata 属州のもとに、他の人民も含まれていた。下の海には Ligures、上の海には Veneti・Carni・Histri、Alpes には Taurini・Salassi・Leponiti・Euganei、さらに、Vindelici・Norici という Alpes を越えた人々とともに後に自分自身の力で属州を手に入れた一部族すなわち Rhaeti である。Gallia Togata の背後に、初めには Apennino の麓に Etrusci すなわち Tusci が続いた。それを越えて、Apenninus の両側面に向けて Vmbri、その南に、Sabini・Latini・Aequi・Volsci・Hernici がいた。Vmbri のすぐ近く上の海に向かって Picentes がいた。続いて、Marrucini・Vestini・Frentani・Peligni・Marsi がいた。それを越えて内陸に、Samnites・Hirpini。Samnites の南に下の海に向かって Campani、さらに Picentini。Frentani・Hirpini は Apuli につながる。そこから Calabri・Sallentini は Italia の角の左側に定着した。Apuli の南に、両側の海に向かって Lucani がいた。その南に、角の右および Italia の突端の先端には Brutii がいた。

第24章 Ligures・Taurini・Cottii・Ideonni 王国・Salassi・Leponitii・Euganei・Rhaeti・Veneti・Carni・Histri

Liguria は Varus・Macra 両川および Ligusticum 海・Padus 川 (Placentia まで) の間に広がる。Ligures 族の首邑として Genua (俗に *Genova*) がある。その他の有名な町は海岸地方には Hicaea・Herculis Monoeci 港 (Graeci の Massiliensis によって建てられた)、Ligustica には Albium Intemelium・Albium Ingaunum (これらは、俗に縮約されて Albintemelium・Albingaunum と呼ばれた。いまは *Vintimilia*・*Albenga* である)、Vada Sabatia (いまは *Savona*)、内陸には Pollentia・Alba Pompeia・Asta・Aquae Statiellae・Dertona・Iria (いまは俗に *Polenza*・*Alba Aste*・*Acqui* ないし *Aich*・*Tortona*・*Voghera* と呼ばれる)。

Taurini は、Padus 左岸・Alpes 山麓・Orgum 川の間で Ligures につながる。種族の首邑は、かつては Augusta Taurinorum といい、いまは俗に *Turino* である。

その隣に Cottii・Ideonni の小王国が Alpes のなかにあった。Cottiani 王国の首邑は Segusio ないしは Segusium、いまの *Susa*、であった。

ここからさらに、Duria 川が中央を刻む谷のなかの Salassi につながる。その首邑は Augusta Praetoria (いまは俗に *Aosta*) であり、ついで Eporedia (いま *Invrea*) [がある]。

さらに Salassi には Leponitii が、Verbanum 湖 (いまは俗に *Lago Maggiore*。湖はこの川を受け入れている) 周辺で、隣人であった。首邑は Oseela (いま俗に、Tosa 川の *Domo d'Oscela*)。

Leponitii は Alpes 山中、Larium ないしは Comensis 湖と Athesis 川との間で、Euganei に続く。その町は Anaunia (ないしは Anonium)・Sarraca・Vannia で、これらはいま俗に、*Castell Nan* (ないしは *Non*)・*Sarca*・Ollium 川の *Civida*、である。ついで Clavenna、同じく Tellina 谷の Telium。Euganei のうちですこぶる著名な人民は Clavennensis 谷・Tellina 谷の Sarunetes、Vennonnes (Athesis 川の東側)、Camuni (いまは *Val Camonica*)、Ollium 川の Triumplini (ないしは Trumplini。いまは Mela 川の *Val Troppia*)。Euganei の北には Rhaeti がいた。彼らは Gallia 人によって Circumpadana 地方から追い出されたため、Rhaetus に率いられて Tusci から分派したのである [Plinius 3.20.133]。Rhenus 源流から、Danubius 川に注ぐ Dravus 川源流までを領土としていた。その首邑は Tridentum (いまは俗に *Trento*) である。その他の比較的有名な町は Curia (いまは俗に *Chûr*。Italia 語では *Coira*)・Feltria・Belunum (いまは *Feltre*・*Belluno*)。そして Verona は、Euganei と Rhaeti とがともに建設したもので、永遠に最も繁華な街である。

Rhaeti の東に唯一隣するのは Veneti であった。彼らについて古代 Graecia の伝説では、Euxinus 海ほとりの Paphlagonum の種族の出で、Troia の崩壊のために Antenor に率いられてここに至ったものとする。別の古人は、

Illyricum 人を Euganei の出とする。彼らは Alpes に隠棲していたのち、Padus 川と Timavus 源流との間、Hadriaticum 海に近い地方を占めたのである。Veneti の首邑は Patavium (いま Padoua) で、Troja の Antenor によって建造された、もしくは拡張された。次いで有名な町は Atria ないし Adria (いま *Adri*) で、Tusci によって創られ、海すなわち Adriaticus 湾にちなんで名づけられた。さらに、Ateste (いま *Este*)、Vicentia (いまは *Vicenza*)、Altinum。このほか、名前と Silis 川近くの崩壊の僅かな痕跡を除いて、いまは何も残っていない。そこから続いて Tarvisium・Opitergium (いまは *Treviso・Oderzo*)、そして Concordia (その名前は維持されている)。

ここから Euganei もしくは Veneti の海岸を、Formio (いまは *Risano*) 川、*Capo d'Istria* 付近、までの残りの部分をその後 Carni 人が保持した。ここで、かつて Italia で第一等に有力で巨大でもあった街 Aquileia (いま *Aquiléa*) は全く荒れ果てている。次いで有名な町は Forum Iulii (いま俗に *Civitas di Friuli*)、Tilavemptum 川と Alpes との間で廃墟となった Iulium Carnicum (いま *Zuglio*)、Videnum (俗に Germania 語ではいま *Weiden*, Italia 語では *Vdene*)。

Venzonum Noreia 近くには Taurisci の街があった。彼らは後に Alpes 彼方の Norici と言われた。Tergesteitem (いま俗に *Trieste*) は、有名な、Histri 第一の町であった。Romani の植民地となった後、Carni 属州に配せられた。しかしこの地方でとりわけ著名なのは Graeci と Latini とがともに記録した Timavus 川で、Aquileia と Tergeste との間において、一つの河口から七つの突出部が海中に千歩 (それ以上ではないとしても) も延びている。

要するに Carni の先は Histria で、人民は Histri である。この地方は、Formio・Arsia 両川の間で、あたかも半島のように海に突出する。この種族の首邑は Pola で、かつて Colchi により Iasone・Medea に倣って建設された。次いで繁華な町は Parentium・Aegida (いまは *Parento・Cabo d'Istria*)、同じく Arsia 川の Nesactium (いま *Castel Nuovo*)。

第25章 Alpis 此方 Gallia について

Padus 彼岸の Gallia 種族は Libici・Laevi・Insubres・Orobii・Cenomani。Libici の首邑は Vercellae (いま *Vercelli*) であった。Laevi の [首邑] は Ticinium (いま *Pavia*) であり、Novaria (いま *Novara*) であった。Insubres は Italia の Gallia 人全てのなかで最も勢力があった。その首邑は Mediolanum (いま俗に Italia 語で *Milano*, Germania 語で *Meyland*)。ここで有名な町は、Laus Pompeia (いま *Lodi*)・Forum Diuguntorum (いま *Crema*)・Moguntiacum ないし Modicia (いま *Monza*)。Orobii の [有名な町] は Comum・Bergomum・Forum Licinii (いま俗に *Como・Bergamo・Berlasina*) である。Insubres・Orobii の彼方、Venetia までは Cenomani が住んでいた。その首邑は Brixia (いま *Brescia* もしくは *Bressa*) である。さらに、繁華な街は、かつて Tusci に建設された Cremona・Mantua である。Padus 此岸の Gallia 人は Ananes・Boii・Senones であった。Ananes は、Roma の植民地 Placentia (いま俗に *Piacenza*) の近辺で Liguria と繋っていた。その先に Boii が続いた。彼らは Insubres とならんで、Italia の Gallia 種族のなかで最大かつ最有力であった。その首邑は Bononia (いまは俗に *Bologna*) で、以前は Felsina と呼ばれた。Hetrusci の首邑だったからである。次いで著名な町は Parma・Brixellum・Regium Lepidi・Mutina・Forum Cornelii・Faventia・Forum Livii (これらは今、俗に *Parma・Brissello・Reggio・Modena・Imola・Faenza・Forli*)。Italia における Gallia 人の最後は Senones で、Ravenna・Aesis (いま *Iesi*) 両川の間で Ancona 近く、Vmbri の領域の一部に居住していた。この種族は首邑として Sena Gallica ないしは Senogallia (俗に *Sinigaglia*) を建てた。この地方のその他の町については、Vmbri の箇所 [次章] で述べる。

第26章 Etruria・Vmbria

Gallia Togata は、南で Apenninus 山の麓、Etruria につながっていた。その住民が Etrusci もしくは Tusci であり、Graeci からは Tyrrheni と呼ばれた。しかし彼らの最初の居所は、先 [23章] に述べたように、Apenninus の彼方の Padus 両岸付近であり、ついで Gallia 人に追い出されて、Apenninus・下の海・Tiberis 川・Macra 川の間に建設された12の街に (それと同数の彼ら自身の指導者により) 定住した。それらの街の名前は Veii・Volsinii・Clusium・Perusia・Crotona・Aretium・Falerii・Volaterrae・Vetulonii・Rusellae・Tarquinii・Caere である。今日このうち、次のような俗名のあるものは残っている：*Bolsena・Chiusi・Perugia・Cortona・Arezzo・Civita Castellana・Volterra・Cerveteri*。それ以外のうち、Veii は Roma 市から12標石 [lapis] 離れて、今日の *Scrofano*

の町の近くに存在していた。Vetuloniis は *Plombinum*・*Massa* 間の海岸近くの町であった。いま俗に *Bagni di Roselle* すなわち *Aquae Rosellarum* と呼ばれる。Tarquinii の痕跡は Cornetum の町の北にひろがる。

さらに、Etruria における繁華な町だったのは海岸地帯では Luna (Macra 川彼岸ではあるが Etrusci の町であり、港のためにすぐれていた。いま *l'Erci*)・Pisae (いま *Pisa*)・Portus Liburnus もしくは Hercules Liburnus (いま *Livorno*)・Populonia (その痕跡は *Plombinum* 付近に残る)・Telamon (いま *Telamone*)・Cosa (いま *Ansidonia*)・Graviscae (かつて Cornetum の南にあった)・Centum Cellae (いま *Civita Vecchia*)・Alsium (いま *Palo*)。

内陸部では Nepete・Sutrium・Falerii Falischorum・Fanum Voltumnae・Hortanum (これらはいま俗に *Nepe*・*Sutri*・*Civita Castellana*・*Viterbo*・*Hort* である)。さらに、Herbanum (これは後に古びた街となった。いま *Orvieto*)。

Suana・Sturnia・Senae・Florentia・Pistoria・Luca は古代の名前をとどめている。

Vmbria

Tusci は Tiberis の方で Umbri につながっていた。しかし Umbri はもとは、両海岸地帯に居住していた。ついで川、後に Etruria 内部に分け入ったのである。かつての Vmbro, いまの *Vmbro* である。彼らを、下の海からは Etrusci が、上の海からは Galli の Senones が、追い出した。そしてこれらが Romani によって抹殺されたため、Vmbria の領域は Roma 帝国において、南は Tiberis に注ぐ Nar (俗に *Nera*) 川、西は Tiberis および Apenninum 彼方の Bedesis (いま *Ronco*。Ravenna 付近で Hadriaticum 海に向かう)、北はその Hadriaticum 海、東は Aesis 川および Nar 源流に向けて引かれた線、となった。

Hadriaticum 湾岸の街は Ravenna・Ariminum・Pisaurum・Fanum Fortunae・Sena Gallica (上述)。いまの俗名は *Ravenna*・*Rimino*・*Pesaro*・*Fano*・*Sinigaglia* である。内陸部には、Caesena・Sassina・Vrbium・Sentinum・Aesis・Camerinum (いま俗に *Cesena*・*Sarsina*・*Vrbino*・*Sentino*・*Iesi*・*Camerio*)。Apenninum 斯方では Iguvium・Mevania・Spoletium・Tefernum・Nuceria Camellaria・Asisium・Hispellum・Fulginium・Tuder・Interannium・Narnia・Ameria, Nar 此岸の Ocriculi (*Augubio*・*Bevagna*・*Spoleti*・*Citta di Castello*・*Nocera*・*Assisi*・*Ispello*・*Fuligno*・*Todi*・*Terani* もしくは *Terni*・*Narni*・*Amelia*・*Otricoli*)。

第27章 Sabini・Latii について

Vmbri の南、両側の海にいたるまで、太古の時には Siculi が住んでいた。彼らの王 Italus にちなんで、この地方は初め Italia と呼ばれた。次いでそれは、Aborigines によって、さらに追われた Siculi によっても、Saturnia と呼ばれた。まもなく同様に Latium とともに [呼ばれた]。そこから Aborigines によって Latini という新しい名前がつけられた。しかし、古代の Latii の一部 (Nar・Anio の間) はその後 Sabini が受け継いだ。そのうちのこの住民は *Tuerone* と呼ばれる。Sabini の首邑は Reate (いま *Rieti*) であった。その前は Cures (いま *Il Vescovio di Sabina*) で、巨大な街の遺物とともに修道院がある。ここから Roma 人の言葉は Quirites となった。繁華な町の名残は Nursia (いま *Norcia*)・Cutiliae (その廃墟は *Civita Ducale* の周辺にある)・Amiternum (その痕跡は *Aquila* 周辺にある)。さらに Eretum・Nomentum (Anio 周辺で、いま俗に *Monte Eretondo*・*Lamentario*)。

したがって、Sabini の南に Tusci に接して Latini がいた。単に Italia のみならず全世界のなかで最も著名な種族である。彼らの地は Latium と呼ばれる。初め、Anio・Tiberis から Circaeum 岬 (いま俗に *Circelli*) の方まで、北は領土の点で封じられていた。その後、Aequi・Hernici・Volsci・Ausones といった近接する人民が Latini の名のもとに数えられるようになった。新たな Latii の境界は Liris (いま俗に *Garigliano*) 川によっていた。

全 Latii の首邑は長い間 Roma であった。この街は、Aborigines (以前は Oenotrii と呼ばれていた) が Graecia を出て Italia に到着した時に、彼らによって建設された。Aeneas の後継者たちによって増強されたと言われる。まことに都市の女王にして、全世界の首邑かつ主人である。他の町も、古さと名高さとで傑出している。Tibur (いま *Tivoli*)・Praeneste (いま *Pilastrina*)・Gabii (かつて Praeneste と Roma との行程の中間にあった)・Tusculum (いま *Frascati*)・Aricia (いま *L'Aricia*)・Lanuvium (いま *Citta Lavinia*)・Alba longa (かつて Alba 山・Alba 湖の間にあった)・Lavinium (Alba の母市。海岸近く、いまの *Patrica*)・Laurentum (いま *Paterno*)・Ostia (Tiberis の諸河口 [ostia] から名がついた)。Anio・Tiberis の合流点周辺では Aemnae・Collatia・Fidenae (僅

かで不確かな痕跡に示されている)。Rutuliの一部はLatiniiに属した。その首邑はArdeaである。

AequiにはCarseoliないしはCarsula(いま*Arsuli*)・Valeria(Variaとも。いま*Vico Varo*)・Sublaqueum(いま*Suliaca*)・Algidum(Algido山・Algido森にある。いま*Selva d'Algieri*)。

HerniciにはAnagnia・Alatrium・Veruli・Ferentinum(いま*Anagni*・*Alatri*・*Veroli*・*Ferentino*と呼ばれる)。

Herniciの南、海に面してはVolsciがいた。その町は、海岸にはAntium・Circaeii・Tarracina(かつてのAnxur)、内陸では、すこぶる繁華なPomptinus領(Pomptinae Paludesとも。かつて首邑によってVolsciのSuessa Pometiaと呼ばれた)、Velitrae・Cora・Norba・Privernum・Setia・Signia・Sulmo・Frusino・Fabrateria・Aquinum・Casinum・Atina・Arpinum・Arx・Sora(いま俗に*Belitri*・*Cora*・*Norma*・*Piperno*・*Sezza*・*Segni*・*Sermonetta*・*Fraselona*・*Falvatera*・*Aquino*・*Monte Casino*・*Atina*・*Arpino*・*Arce*・*Sora*という)・Fregellae(いま*Ponte Corvo*)・Interamna(いま*l'Isola*という)。

AusoniumはCaieta・Fundi・Formiae(いま俗に*Gaeta*・*Fondi*・*Mola*という)であった。

第28章 Picentes・Vestini・Marrucini・Peligni・Marsi・Frentani・Samnites・Hirpini

Apenninumの彼方、Sabini・Vmbriに続いて、PicentesがAesis・Aternum両川の間(そこは、いまは*Pescara*と呼ばれる)にいた。彼らの地方はPicenumと呼ばれる。Sabiniから派生した種族である。海岸地帯の町はAncona(Graeciの植民地で、Syracusaniによって建設された)、新Castrum(いま*Flaviano*)、Truentum川のCastellum Truentinum。内陸ではAuximum(いま*Osmo*)、Septempeda(いま*S. Severino*)、Tollentinum・Firmum Picenum・Asculum Picenum・Interamnium・Atria(いま*Tollentino*・*Fermo*・*Ascoli*・*Teramo*・*Atri*)。Picentesに接するのはVestiniである。その町はAngulus・Pinna(いま俗に*Civita di Sant Angelo*・*Civita di Penna*)、AviaないしはAvella(いま*Aquila*)。

海岸地帯でVestiniに続くのはMaruciniである。その町はTeate(いま*Tieti*・*Chieti*)。

Marucini・Vestiniの双方にPeligniが接する。彼らの首邑は、かつてCorfinium(いまは破壊されている)、次いでSulmo(いま*Sulmona*) [であった]。

内陸でPeligni・VestiniにつながるのMarsiで、そのAlba FuentisはFucinum湖近くにあった。今日でも古代の名前を廃墟に留めている。俗に*Albe*・*Albi*という。さらにMarrubium(いま*Morrea*)。

さらに海岸地帯でMarrucini・Peligniの先にはFrentaniが住む。その町はOrtona・Anxanum・Histonium(いま*Ortona*・*Lanzano*・*Guasto d'Amone*)。

Frentaniの南にはSamnitesがいた。Sabelliともいい、Sabiniから派生した。そしてSamnitesからHirpiniが出た。Samnitesの地方がSamniumである。その町はBovianum・Aesernia・Saepinum・Allisae・Telesia(いま俗に*Boiano*・*Isernia*・*Sepino*・*Alisi*・*Telese*)。Hirpiniの町はBeneventum・Equus Tuticus・Abellinum・Compsa(いま*Benivento*・*Ariano*・*Avellino*・*Conza*)。

第29章 Campania・Picentini・Apulia・Calabriaについて

下の海の方面でSamnites・Hirpiniに続くのはCampania(いま俗に*Terra di Lavoro*)であった。

そこで少なくともLiberiの一部がCeresとともに戦った。海岸地帯の町はLiternum(Scipio Africanusが自発的に流刑となったことで有名である。いま俗に*la Torre di Patria*)・Baiae(Roma人民の快楽あるいは墮落)・Misenum(いま*Monte Miseno*。かつて下の海方面のRoma艦隊の駐屯地であった)・Puteoli(*Pozzuolo*。この海における、全Italiaで最も有名な港湾)・Neapolis(以前はParthenopeと言われた。いま*Napoli*。Vergiliusが青年時代にCiceroの文学を研究したことで有名である)・Herculanium(俗に*Torre di Greco*)・Pompeii(俗に*Scafati*。Vesuvius山の噴火によって知られる町である)・Surrentum(いま*Sorrento*)。内陸部にはCapua(Campaniaの名称の由来である。Tusciによって建設された。かつてRomaと対抗し、まさにそのために破滅した。いまその廃墟は、Nova Capuaから2000余歩のところに見られる)・Suessa Aurunca(いま*Sessa*)・Venafrum(いま*Venafri*)・Vulturnum川のCasilinum(いま*Nova Capua*)・Teanum Sidicinum(いま*Tiano*)・Calatia(いま*Caiazzo*)・Cales(*Calvi*)・Atella(いま*Aversa*)・Acerrae(いま*Acerra*)・Nola(名前を維持している)・Nuceria(いま*Nocera*)。

SurrentumすなわちMinerva岬からSila川にかけて、Campaniに接するのはPicentiniであった。かつて

Picentini の一部は Romani によって上の海からここに移らされた。彼らの首邑は Salernum (俗に *Salerno*) [であった]。

Apulia・Calabria

Frentani・Samnites・Hirpini に接していたのは Apuli であり、彼らの領土は、すこぶる長くひろがって、Frento (いま俗に *Fortore*) 川から Hadriaticum 海海峡まで延びる。三つの部分に分かれていた。Frento から Ausidus (いま俗に *Lofanto*) 川までが Daunia と呼ばれ、ついで Brundisium・Tarentum にかけてが Peucetia であり (この部分に Poediculi が居住していた)、ここから残りの部分は半島の形のもと Messapii が把持した。しかし Massapia は後に Calabria, その住民は Calabri, と呼ばれた。Calabria のさらに半分、Tarentinus 湾に接する部分は、Salentini の領土である。そして厳密に言う Apulia は Frentani・Calabria 間に位置する。Apulia における有名な町は Teanum Apulum (いま僅かばかりの城壁の痕跡が見られる。俗に *Civitate*)・Gerion (いま *Tragonara*)・Sipuntum (いま *Siponto*)・Luceria (いま *Lucera*)・Aequulanum (いま *Troja*)・Arpi (その廃墟は *Foggia* の町の近くにある)・Asculum Apulum (いま *Ascoli*)・Venusia (養子 Horatius ゆえに著名である。いま *Venosa*)・Acherontia (いま *Acirenza*)・Canusium (いま *Canosa*)、そして Roma の敗北によって際立つ小村 Cannae (いま *Canne*)・Salapia (*Salpe*)・Rubi (*Ruvo*)・Butunti (いま *Bitonto*)・Barium (*Bari*)・Egnatia (*Torre d'Anazzo*)。

Calabria では、Brundisium (かつて Graecia に渡ったことで有名である。いま *Brindisi*)・Hydruntum (*Otranto*)・Castrum Minervae (*Castro*)・Callipolis (*Gallipoli*)、そして全てのなかで最も有名な Tarentum (*Taranto*)。半島内部では Neritum (*Nardo*)・Aletium (*Lezze*)。これの近くにかつて Rudiae があった。市民 Ennius で著名な町である。

第30章 Lucani・Brutii・Magna Graecia について

Apuli・Hirpini・Picentini の南、海までに Lucani がいた。Samnites から生まれ、Lucius に率いられていた。Laus・Sybaris 両川までを領有した。そのうち、Tarentum 湾にある部分をいま俗に *Cochile* と言い、下の海に面する部分を *Laino* と言う。この海岸地帯にある町は Paestum (Graeci には Posidonia と呼ばれた。いま廃墟となって *Pesto*)・Velia (いま *Pisciotta*)。かつて繁華な港湾であった)・Buxentum (いま *Policastro*)、Tarenutinus 湾近くに：Metapontum (いま *Torre di Mare*)・Heraclea (もとは *Siris* と呼ばれた。いま廃墟の痕跡として *Policore*)・Sybaris (のちに Thurii、さらに結局 Capiae と呼ばれた街である。いまは Sybaris・Crathim 両川の間には存在しない)。内陸には Potentia (いま *Potenza*)・Grumentum (いま *Clarimonte*)。

Lucani の先、Siculum 海峡までの Italia の最末端隅を Brutii が把持した。彼らは Lucani から派生した。海岸地帯の街は西に向かって：Cerilli (いま *Cirella*)・Clampetia (いま *Amantea*)・Temsan ないしは Tempsa (その位置はまさに海の哨所である。その俗名は *Torre Loppa*)・Terina (いま *Nocera*)・Lametia (いま *Santa Eufemia*)・Scyllaeum (Scylla 岩礁の首筋にある。いま *Sciglio*)、海峡の先に：Rhegium (いま *Reggio*)・Locri (もう一つの海にちなんで Epizephyrii と添え名された。いま *Ierace*)・Caulonia (いま *Castelvetri*)・Scylacium (いま *Squillaci*)・Croto (いま *Crotone*)・Petelia (いま *Belicastro*)・Rusculanum (いま *Rossano*)。内陸に首邑 Brutiorum Consentia (いま *Consenza*)、ついで北に向かって遠からぬところに Acheron 川とともに Pandosia (Epirotes の王 Alexander は、宣託が不吉なこの二つの名前を Epirus で避けようとしたにもかかわらず、曖昧な予言ために、彼は同じ[名前の]場所に進軍しそして死んだ)、かつて有力な Hipponium 市 (Romani には Vibo Valentia と呼ばれた。いま *Monte Leone*)。ここまで、かつて Italia 全体に住んでいた人民について詳述し、またその傑出した街々を列挙した。さらに、Graeci はほぼ全ての海岸を、Graecia から発出した彼らの植民地によって占居したので、この地は、Sicilia とともに、Magna Graecia と呼ばれ、Siculum・Tarentum の海峡間に定位していた限りで、長年に亘ってその名を維持した。その後、もっぱら Italia の海岸部のみがその名前で表現されるようになったことは、Cicero・Plinius・Ptolemaeus⁴⁾ その他によって証される。

第31章 Italia の川について

Italia の川のうちで第一等のものは Padus (俗に *Po*) であり、知名度の点でいかなる川にも引けをとらない。

Graeci によって Eridanus と呼ばれた。また古伝が作られたように、^マ ^マ Phaeton の罰によって知られている。Alpes 山脈中で最も高い Vesulus 山の内奥から流れ出て、30以上の川、無数の湖を七つの河口（それは七つの海と呼ばれる）によって、Adriaticum 海に流れ下す[Plinius 3.16.117～119]。比較的著名な川は Alpes から東に、Duria（いま Dora）・Sessites（*Seßia*）・Ticinium（*Tesino*。Verbanum 湖（いま *Lago Maggiore*）が変わる）・Addua（いま *Adda*。Larium 湖（いま *Lago di Como*）を通過する）・Ollius（いま *Oglio*。Sebinum（いま *Lago d'Iseo*）が変わる）・Mincius（いま *Menzo*。Benacum 湖（いま *Lago di Garda*）を通り抜ける）。さらに、同じ Padus は右岸に Apenninus 山脈から〔の流れを〕受ける：Tanarum（いま *Tanaro*）・Trebia（この名前を保っている。Roma の敗北で知られる）・Rhenus Bononiensis（いま *Reno*）。

Alpes からはさらにまた Athesis（Italia 語ではいま *Adese*，他方 Germania 語では *Etsch*）が流れ出る。つづくその他の全ての川は Apenninus から流れる。そのうち Arnus（俗に *Arno*）は Florentia・Pisa を通過する。Tiberis は、都市 Roma と Roma の建設者 Romulus とがこれを世界中で最も高貴なものとし、その右岸から Clanim（俗に *Chiana*）が、左岸から Naris（俗に *Nera*）・Anio（いま *Teverone*）が、下の海に流れ込む。

Latium・Campania の間に Liris（いま *Garigliano*）が、Campania そのものには Volturnus（*Volturno*）が、Picentinus・Lucanus 間には Silarus（*Silaro*）が〔流れる〕。Magna Graecia では Sybaris（いま *Cochile*）・Crathis（*Crati*）が、Apulia では Aufidus（いま *Lofanto*。Annibale に対する Roma の不幸な戦闘によって周知される）が。Praecutios・Picenu 間には Aternus（いま *Pescara*），Gallis Senonibis では Metaurus（いま *Metro*。Annibal の兄弟 Hasdrubal の敗北・戦死で際立つ）が。

第32章 Italia の山について

Alpes は Italia を Gallia・Vindelicia・Noricum・Pannonia から切り離す。その始まりは Sabatia 瀬で，Flanaticus 湾（俗に *Golfo di Carnaro*）および Colapis（俗に *di Kulpe*）川源流に終わる。さまざまな部分・名称に区分されている。Sabatia 瀬から Varus 川源流までは，Ligusticum 海に瀕し，海によって名づけられている。ここから Segusium（俗に *Susa*）までは Cottiae，そして小 S. Bernardum までは Grajae，さらに S. Gothardum までは Penninae（これに Rhaeticae が接続する），Plavus 源流（この部分は Tridentinae と名づけられている）までは上 Tridentum，これに Doblacum までつづくのが Noricae で，Tilavemptum（俗に *Tajamento*）川上流部である。ついで Savus 源流までの Carnos 上流部が Carnicae，さらに最奥の Colapis 源流までが Pannonicae（これは Iuliae とも言われる）。しかし Dalmatica と呼ばれることを欲している，Dalmatia 上流部に Alpes の名前を延長する者がいる。Thracia・Pnotum までは別である。しかし Colapis 源流で終わる前にほとんどの者が受け入れる。

さらに Italia 内部では Apenninus 山が最も高く，Sabatia 瀬で Alpes につながり，途切れず続く三日月状の進路で Siculum 海峡・Leucopetra 岬まで延びて，Italia を両断するかのごとくである。Suessa 近くでは，Massicus 山が Liris 川の左岸で縁取られる。ここから Bajae・Puteoli の間に Gaurus がある。Capua の北に Tifata 山（俗に *monte di Capua*）がある。Neapolis の先，Nolae 近くの Vesuvius（いま *monote di Somma*）は，噴火と Plinius の横死とで有名である。Apulia には Garganus（いま *monte di S. Angelo*）があり，上の海に巨大な岬を突出している。

第33章 さまざまな Italia の住民について

Siculum 海峡から Alpes まで延びる Italia の地を，人間として誰が初めに保有していたかは，かくも永い間，ほとんど確定していない。また，地の洪水の後 Babylonica 市から進発し分散した種族の一つの人民がこの地方を全て占居し，全体に対して一つの名前をあてがったのか，それとも繰り返し別の，耕作者の点で無人の地に導入された種族が自分たちの座にさまざまな言葉で〔名前を〕付与したのか，ということも定かではない。まことにそこでは，種族として明らかに異なったさまざまな人民が証人によって物語られている。そのなかでも最も古いものは Ausones（Brutii・Lucani の領域をかつて保持していた）であり，続いて Samnium・Campania の Opici ないしは Osci，Sabini・Latium の Siculi，両方の海近く（下の海の方では Tiberis・Vmbri 両川の間の Tuscia の一部にも）の Vmbri，である。ついで Alpes までの Tusci，これに続いて，Gallia の Ligures が Rhodanum まで広がる。Tusci の先は Veneti で，それを，一方では近くの Illyricum が，他方では Henti（Paphlagonicae から生じた種族）が，引き継ぐ。上述の Galli は Alpes・Apenninum の間の Tusci を追い払った。Tusci は Vmbri を上

の海から追い出した。Graeca 種族は Oenotrius に率いられて Arcadia を出立し（そこから Oenotrii とされる）、最初に上述の Ausones をその座から追い、より遠方、Italia の北、Vulturnum・Liris 川付近に向かって進むことを強いた。その地の部分に満足せず、まもなく Siculi までその座から駆逐し、その時にはもはや変えられた名前 Aborigenes と呼ばれた。しかしその時占居した土地が Latium と呼ばれていたため、再び名前が変えられて、そこから自身を Latini と呼んだ。Sabini は Opici の子孫であった。彼ら自身から Picentes・Vestini・Marsi・Peligni・Frentani・Marrucini・Samnites を生み出した。これらのうち Samnites が、後に Hirpini・Campani・Lucani・Brutii を吸収した。まもなく Graeci の諸族はそれぞれの時期に Italia に侵入し、その至るところに街を建設した。先に述べたように[第30章]、上下の海の全ての海岸を自分たちの植民地によって満たした。ここから、Italia は Sicilia とともに、Strabo・Trogus から明らかなように⁵⁾、Magna Graecia と呼ばれた。そしてそれぞれの人民がそれぞれの場所から Garaeci を駆逐した時、Lucani は占居した部分を自分たちの名前によって Lucania と名づけた（Graeci に抑圧されていたからである）。これを発端として、Brutii が Brutia と[するなど]、次第に Graeci 風の名前が Italia 風なもので変えられることが始まった。当時 Magna Graecia であったその部分に限れば、いまは上 Calabria と呼ばれる。

その後 Roma の支配力が大きくなり、結局全 Italia がその武力によって征服された。Honorius 帝の騒乱の時まで Roma 市の権力のもとにあつて、著しく明瞭な地方・人民に応じて区分された。ここから、Gothi・Vandali・Heruli の Germanica 諸族が、遂には Hunni も、繰り返し、Alpes 山脈を越えて全土に侵入し、さまざまな王国・帝国のなかに分かれた。最後には彼らは Iustinianus 帝の将軍によって追い払われ、Italia に総督 [Exarchatus magistratus] が配置された。その座は Ravenna であつて、Roma は荒廃に伏せつた。これ以来、最遠方の Longobardi は Ravenna を奪われ、Togata Gallia に王国を建てた。それは、いまなおこの種族の名前から崩れて、Longobardia のように、Lombardia と呼ばれている。結局、Roma の風で彼らに対抗するべく教皇によって Italia に呼ばれた Francia 王 Pipinus が彼らを征服した。

第34章 最近の Italia の区分について

Roma 帝国の威光と座とが Germania に移されて後、Italia はさまざまな者にそれぞれに劫掠された。そしてさまざまな称号と支配権とに引き裂かれた。それ故、最新の地方区分は、Histria 候領、Fori Iulius 公領、Lombardia (Italia の決して小さからぬ部分である)、その南に Tarvisiana 辺境伯領、Mantuanus 公領、Mediolanensis 公領、Tirolis 伯領の半分、まさに Alpes 山中の Grisones、それに隣接する Helvetii 属領[stipendarius]、Pedemontium、Montis-Ferrati 公領、Parmensis 公領、Romania ないしは Romaniola、Anconitana 辺境伯領(いま Lombardia 外)、Genuensis 領、Tuscia (そこに D. Petrus の遺領がある)、Tiberis 右岸にはりついて Spoletanus 公領、Romanus 領、そして Neopplitanum 王国(そのなかに、Aprutium 地方、Apulia 地方、Lanorinus 領、Basilicata、二つの Calabria、Baritanus 領、Hydruntinus 領)、となる。

同じ Italia は、それぞれの支配権にしたがえば、次のように区分すべきである：

- I Hispania 王の支配権がある。そのもとに：Neapolitanum 王国、Mediolanensis 公領、Tuscia 海岸にあるいくつかの町、Italia に近接する島々 (Sicilia・Sardinia)。
- II Roma 教皇 [Pontificus] の [支配権]。そのもとには Romanus 領・D. Petrus 遺領・Spoletanus 公領・Anconitana 辺境伯領・Romaniola、および Neapolitanus 領内の Beneventum 市。
- III Venetia 共和国 [Respublica] の [支配権]。そのもとには Histria・Forum Iulii・Tarvisiana 辺境伯領、さらに Bergomum までの一部 Lombardia。
- IV Tuscia 大公 [Magnus Dux] の [支配権]。Tuscia
- V Genuensis 共和国の [支配権]。そのもとには Apenninum・Ligusticum 海間の Liguria、Tuscia・Liguria 近傍の小部分、Corsica 島。
- VI Padus 此方の Lombardia における Parmensis 公の [支配権]。
- VII Sabaudia 公の [支配権]。そのもとには Pedemontium。
- VIII Helvetii の [支配権]。Verbanum・Larium 湖の上部。
- IX Alpes における Rhaeti すなわち Grisi の [支配権]。
- X Tirolensis 伯領における (そこでは Tridentum)、および Forum Iulii・Histria の Alpes の一部における Austria 大公 [Archidux] の [支配権]。

- XI Mantua 公領および Ferratus 山における Mantua 公の [支配権]。
- XII Mutina 公の [支配権]。
- XIII Vrbinas の [支配権]。
- XIV Luca 市における Luca 市政府 [civitas] の [支配権]。
- XV Mirandulanum 伯の [支配権]。

第35章 Histria・Forum Iulium・Tarvisiana 辺境伯領・Grisones・Helvetii 属領

Italia の最新の区分について報告したので、個々の部分について吟味することに問題なかろう。

第一は、Arsia 川によっては Histria (Germania 語で *Isterreich*) と呼ばれる。いま比較的有名な町は Pola, Parentium, および Histria の首邑 (俗に *Capo d'Istria*)。

Forum Iulium (俗に *Friuli*。 *Patria di Friuli* とも)

Forum Iulium の首邑は Vedinum (いま *Vdene*) で、その他の有名な町は Civita di Friuli, Tergestum, Gradiscia, 最近 Veneti によって建設された *Palma* (この方面における Forum Iulium の、そして Italia の、すぐれた城である)。さらに Forum Iulium には *Austriaca* が統治する Palatinatus Gorioiensis がある。その首邑 Goricia は十分に著名な町である。

Tarvisiana 辺境伯領

この辺境伯領は、Tarvisium (俗に *Treviso*。華麗な街である) にちなんで名づけられた。Tarvisiana 辺境伯領のみならずまさに全 Italia の都市のうちで第一等であるのは Venitiae であり、杭の上に建てられているため、実に安全である。市場は全地上で最も繁華であり、共和国はすこぶる有力で、壮麗な建築のゆえに輝かしく、D. Marcus 寺と兵器廠とのゆえにきわめて注目を集める。

Patavium は人口夥多というよりも宏壮な街で、全 Europa のなかで最も繁華な学園をはなはだ誇る。その他の点では要害堅固である。

Verona は、宏大・華麗・壮麗・人口夥多、そして円形闘技場の遺跡、で知られる。Vicentia は、騎兵隊の男たちがすこぶる好む居宅である。

Rhaeti (俗に *Grisones*)

Grisones は、俗 Latin 語の名称は Rhaetos, Germania 語では *die Graupunter* と呼ばれる。Rhenus・Oenus・Athesis・Addua 諸川の源流に近い。小さな町しかない：首邑 Curia (Germania 語で *Chur*, Italia 語で *Coira*)・*Meyenfeld*・*Ilandtz*。Rhaeti の南には Tellina 谷および Clavennensis 伯領 (その首邑は Clavenna (Germania 語で *Cläven*, Italia 語で *Chiavenna*)) がある。Tellina 谷には Sundrium・Tiranum・Pesclavium・Morbenium がある。

Helvetii 属領

Grisones に隣接するのは Helvetii 属領である。その町は決して没趣味なものではない：Lucanum・Locarnum・Bellisona。

Pedemontium

Pedemontium の支配者は Sabaudia 公である。領地の首邑かつ Sabaudia 公の座は Augusta Taurinorum (俗に *Turino*) である。その他の有名な町は Vercellae・Eporedia・Augusta・Praetoria・Asta・Alba・Salutium・Nicaea で、壮大ではないとしても住民にとっては力強い。近くの Nicaeensium 港 (*Villa Franca*) は三段櫓船の艦隊司令の居住地である。

第36章 Lombardia・Genuensis 領

Padus 彼方 Lombaradia

厳密な意味で Lombardia と呼ばれている地方は、Italia のうちで、街の華麗さの点で、また農地の耕作の点で、最も喜ばしい。Padus 川によって Padus 斯方と Padus 彼方とに分けられる。Padus 彼方はさらに、Mediolanensis 公領・Mantua 公領・Venti 領に分けられる。

Mediolanensis 公領

首邑は Mediolanum で、公領の名称と威光とはそこに由来する。その大きさにおいて、要害堅固なことにおいて、住民の夥多なることにおいて、すこぶる有名である。戦争機材の工場は全 Europa で最も繁華である。Mediolanum に次ぐのが Cremonia である。宏大な建築物を誇る。続いて：Comum・Papia・Novaria。Padus 斯方の Lombardia では、Alexandria・Dertona が同じ支配下にある。

Mantua 公領

Mantua（その名前を公領に授けている）は、湿地ないしは沼のなかに位置する、すこぶる快適な街である。すこぶる著名な Gonzaga 家の座にして居所である。

Lombardia の Veneta 領

Lombardia には Veneta 領の Brixia・Bergomum・Crema・Peschiera がある。すこぶる繁華な街である。これらのうち最後の2者はすこぶる強力な城壁を有する。

Padus 斯方 Lombardia

Padus 斯方 Lombardia には三つの公領がある：Parmensis, Mutinensis, そして Monts Ferratensis・Ferrariensis 領。

Parmensis 公領

Parmensis 公領の首邑は Parma である。傑出した街で、貴顕の Farenisia 家の居所である。それに次ぐのが Placentia で、威厳を除いては、いかなる点でも Parma に劣らない。

Mutinensis 公領

その首邑は Mutina である。もう一つの有名な町は Regium Lepidum である。

Ager Genuensis（俗に *Riviera di Genova*）

この地方の首邑は Genua である。全 Italia の建築物のなかで、華麗さと壮麗さとの点で、最も壮大である。と言うのも、新しい（俗に *strada nuova*）と言われる村では、王もしくは最も強力な者に相応しくないとあなたが認めるような家はないからである。このように、街の中では至るところで、郊外でははなはだ多く、あたかも Italia の天賦のように全ての快樂の様式において、より多くのものがすこぶる整っているのにあなたは遭遇することになる。さらに、Genuenses は Hispania 王の保護下にある。Genua に次ぐのは *Savona* で、まことに優美で端正である。ついで：*Vintimiglia*・*Albenga*・*Serezzana*（すぐれた城壁と駐屯する守備軍とで、Tusci に類いない）。

第37章 Tuscia・Romaniola・Anconitana 辺境伯領・Romanus 領・Spoletanus 公領

Tuscia（俗に *Toscana*）

Tuscia は、大公の称号によって、Italica 諸地方のあいだで、尊貴〔な地位〕に高められている。首邑には、公座の Florentia（俗に *Fiorenza* ないしは *Firenze*）がある。この街は、Antverpia 一市を除けば、全 Europa で最も美しい。寺院の壮大さのゆえにはなはだ衆目を集める。Medica 家が大公位〔principatus〕を占める前は、市民は自由で富裕であった。

独立国〔sui juris civitas〕Luca は富裕で、かつ要害堅固なことはすこぶる有名で、帝国の自由を喜んでいる。大理石からさほど遠からず、大量の塊を切り出す。Italia 全土で最も著名である。

Pisa はかつて、自由でしかも海・陸に勢力のある市民団であった。いまはほとんど住民によって見捨てられている。Etruria 大公が自由にできる。Liburnus（俗に *Livorno* ないしは *Ligorno*。 *Liorno* ともいう）では港に、古代の輝きにさらに、最近大公によって完璧に豪華な状態に復興されたという名誉が加わった。この港は、Italia のすこぶる有名な港に伍して全くひけをとらない。大公の隠居所として、また三段櫓船の停泊地として名高い。

Plombinum・Telamon・Orbetellum・Herculis 港は Hispania 王の支配に服している町々である。Hispania の強力な駐屯軍によって守られている。

Senae（俗に *Siena*）は Tuscia のほぼ中央に位置する町である。Italia の君主〔principes〕間で価値あるものに数えられている。かつては、自由でかつすこぶる広大な領土のゆえに強力な国家であった。いまは Etruria 公の命をきく立場にある。

その他の Tuscia の町は Aretium・Cortona・Volaterrae・Pirae・Pistoria。これらのうち最後のものは、Italia のすこぶる快適な町一つに数えられている。さらに Pratum・Poggium はこの上なく快楽的な場所の一つである。

Massa は昔 Herculis の神域であった。いまは Genuensis の Cibo 家の新たな城が、大公領〔principatus〕の称号で数えられている。町は陽気で快適である。

D. Petrus 遺領

Etruria の一部は、Roma 教会の高貴な女性 Machtilde によって贈られた、D. Petrus の遺領である。ここから、俗に *Lo stato della Chiesa* が必要とされるという。そこで最も有名な街は Perusia・Orvietum・Aquapendens・Horti・Viterbum。すこぶる古くから続いている臨海の町は、かつて Centumcellae、いまは *Civita Vecchia*（すなわち *Vetus civitas*〔古い市民〕）と呼ばれる。すぐれた港と、Pontificia の三段櫓船の停泊とによって著名である。Sabatinus 湖に近い Bracianum は、高貴な Vrsini 家の公領である。

Romaniola（俗に *Romagna*）

Romaniola の境域は、Folia 川、Apeninum 山、Panarum 川、および Padus 川の北に向かう河谷の最奥、の間にある。すこぶる有名かつ繁華な街々のなかでも Bononia は、建物の華麗さ・壮大さの点で第一等に評価されるべきである。Ravenna・Ferraria がそれに続く。後者には最近まで自身の公がいた。いまは Roma 教会に服している。さらに、Ariminum・Cesena・Faventia・Imola は、すぐれた、決して無名ではない、町である。

Anconitana 辺境伯領・Vrbinas 公領

Anconitana 地方の街のなかで最も快適なのは Firmium である。そして繁華な港ですこぶる名高いのが Ancona である。その他の場所で知らるべき価値のあるのは Aesis（俗に *Iesi*）・Macerata である。以下、Vrbinum 公領の街は Fanum・Senogallia・S. Leo・Froum Sempronii。

Romanus 領（俗に *Compagna di Roma*）

Roma 領の筆頭は Roma である。かつて全世界の首邑であり、いまなお教皇座に向かい、全てのなかで最も高

名かつ繁華である。これについては、僅かばかりのことを語るよりは沈黙している方がよい。

Romani 領のその他の町は概して十分に著名であるが、Romana の街々は同類の華麗さのために陰らされている。ここで Tibur(いま *Tivoli*)は Atestinus 枢機卿の庭園が、多様な快適さ、およびさまざまな種類の快楽を Italia 全体にわたって提供する。しかし町自体は、Tarracina・Praeneste がはるかに先に行く。

Spoletanus 公領

Spolentanus 公領には Spolentum・Augubium・Fulginium・Interamnia・Narnia がある。

第38章 Neapolitanum 王国について

ここから Italia の残部は、Fundum の町・Lirus 川源流・Apenninum 山・Truentum 川、そして至るところ下の海、によって囲まれ、Neapolitanum 王国と呼ばれる（その首邑 Neapolis の街にちなむ）。その長さは、Truentus 河口から Bruntium 岬（俗に *Capo Spartivento*）まで90GM である。幅は Neapolis からほど遠からぬ Athenaeo（すなわち Minervae）岬（俗に *Massa*）から Gargani 山（俗に *Monte di S. Angelo*）まで30GM である。

おいて、この地方は次のようにして王国の形に至らされた。

AD1000年頃、Saraceni がこの地を Sicilia 島をとともに占拠した時、Normanni の一人 Tancredus が、12人の息子が生まれたために貧窮に迫られて Italia を自由に消費することを目指して、自身の業績を Saraceni に対して示した。そこで良い勲功によって、Saraceni は Italia・Sicilia から追い出され、彼と息子たちとにそれぞれの地において分け前が割り当てられた。後に、その息子たちの一人である Robertus は、初代の Apulia・Calabria 公を宣せられる。ついその子 Rogerius は、Neapolis・Sicilia の両地を一つの王権のもとにつないだ、初代の王に選ばれる。王国自体は、両 Sicilia の名で呼ばれる。実際、今 Italia で Neapolitanum と呼ばれる王国は pharos（すなわち海峡）斯方 Sicilia と呼ばれ、それに対して Sicilia 島は pharos 彼方〔と呼ばれる〕。最近二つの王国に分割することを、二人の王が均しく受け入れた。そのうちの、Italia にある一方は Apulia ないし Neapolis 王と、島にある他方は Sicilia 王と、呼ばれる。その結果、いずれの王国とも支配者のさまざまな変化を被った。というのも、Neapolis 王国では、初期の王は Normanni Galli であった。後に Suevi Germani, ついで再び Galli Angolemenses, つぎに Arragonenses Hispanidam, そして第三の Galli, さらに Arragonenses, 遂には Neapolis 王である Castiliani 王が全 Hispania の支配を広げることで、Arragonensis の地位を継承した。

第39章 Neapolitanus 王国の街について

Neapolitanus 王国の街々は、均しく洗練されているわけではなく、Italia より優れた状態にあるわけでもない。たしかに Neapolis は王国の首邑であり、代官（Hispania 王が副王の称号で派遣している）の座である。これにまさって有名な街はなく、建物の壮大さ、宮殿の尊大さ、市民の潤沢さ、において及ぶものはない。まことに、多くの者が居住すること、宏大な見識を持つこと、において他の全てを圧倒する。その他の比較的有名な街は Laborinus 領では Capua・Surrentum・Salernum・Melphis（俗に *Amalfi*。そこで最初に羅針盤すなわち航海に用いられる磁石が発明された）、Calabria では Consentia（副王の座）・Leonis 山・Regium, Hydruntinus 領では Hydruntum（いま *Otranto*）・Gallipolis・Aletium（俗に *Lezze*。裁判会議〔conventus Juridicus〕で有名な町である）・Tarentum, Baritanum 領 へは Barium・Monopolis・Tranium, Apulium へは Apulia・Beneventum・Anxanum・Theate・Pinna・Sulmo・Asculum Picenum。

さらに、かくも変転し、この王国を巡るさまざまな人民の間での戦いがかくも頻繁で、繰り返し Saraceni・Turcae の侵略の標的であったために、敵の襲撃に対する繰り返しかつ頻繁な防衛がいたるところで煽られる、ということが生じた。それらの中で、いま最も堅固なのは Calabria では Consentiae・Cantazari・Manteae・Crotona・Trenti, Hydruntino 領 へは Gallipoli・Hydrunti・Brundisii, Apulia へは Monopoli・Barii・Tranii・Barlettiae・Manfredoniae, Aprutium では Aquilae, である。Caieta 城は、固有の堅固さと立地の状態とのゆえに、王国全体の門と呼ばれる。

第40章 Italia の司教領、学園、すこぶる有名な都市の装飾について

大司教領は Italia 全体で30あり、そのうち21が Neapolitanum 王国にある：Neapolitanus・Capuanus・Salernitanus・Melphitanus・Surrentinus・Beneventanus・Theatinus・Acheruntinus・Sipontinus・Manfredoniensis・Canusinus・Traniensis・Baritanus・Tarentinus・Maderensis・Brundisus・Hydruntinus・Rossanensis・Consentinus・Sanctoseverinensis・Reginus。その他の Italia には9：Senensis・Florentinus・Pisanus・Ravennensis・Genuensis・Taurinensis・Mediolanensis・Venetus・

Gradisciensis。

司教領は、概して狭小ながら、しかし数限りない。というのも、ある町が市民の統治に委ねられる時、その司教領もともに寄付されたからである。まことに、司教領をもたない市民には何も与えられえず、逆に、司教領を有する市民は拒否されることはありえなかったかのごとくである。

さらに、Aquileiae であった Patriarchatus は Venetia に変えられている。

学園

著名な学園は Patavii・Bononiae・Pisis・Senis・Perusiae。知名度がやや低いのは Augustae Taurinorum・Ferrariae・Romae・Firmi・Neapoli・Slerni・Maceratae（Anconitana 辺境伯領内）。

すこぶる有名な街の添え名

Italia の街は、きわめて壮麗・光彩陸離、きわめて陽気・壮大であること、全世界においてこれらと比べうるものを見つけ出すことはまず容易ではないほどである。格別に知名度の高いものは9である。それらの、Italia において人口によって伝えられるほどの添え名をここに補足しよう。

Roma は、神聖（俗に *Roma la santa*）と言われる。教皇の座のためである。Neapolis は高貴（俗に *Napoli la gentile*）である。元首・随従・騎士階級の男が多数のためである。Venetiae は強力（俗に *Venetia la ricca*）。その莫大な力と業績とのゆえである。Genua は尊大（俗に *Genova la superba*）。尊大な建築物の壮大さのゆえである。Mediolanum は宏大（俗に *Milano la grande*）。街の広大さ、莫大な数の市民、のゆえである。Florentia は美（俗に *Fiorenza la bella*）。建築物の華麗さ、街路の清潔さ・広さ・直線性、のゆえである。Bononia は豊穡（俗に *Bologna la grassa*）。農地の、異常なまでの肥沃さのゆえである。Ravenna は古式（俗に *Ravenna l'antica*）。全市の建築物の古さゆえである。Patavium は学識（俗に *Padova la dotta*）。文学研究が盛んなゆえである。

第41章 Sicilia について

Sicilia は、内海の島々全体と大きさの点で均しく、光彩陸離たる点でまさっている。古人を信ずるならば、かつて Italia と陸続きにつながっていた。後に、Sicilia の水道が海に流れ込まれたため引きちぎられた。気候が温和で土壌が肥沃なために、Roma の貯蔵庫と呼ばれるほどに豊かであった [ストラボン 6.2.7]。Sicilia という名称は、Sicili（かつて Italia の Latium の住民）にちなむ。以前は Sicanus 王にちなんで Sicania と呼ばれた。彼は Troia 戦争の前、Iberum すなわち Hispanum の手勢とともにこの島に運ばれ、自身の名前によって、島は Sicania、人民は Sicani、と名づけた。Trinacria (Triquetra と同) とは、三角の形状にちなんで Graeci と Latini とが呼んだものである。というのも、三つの岬が互いに別の方向に突出することで、Δέλτα という Graecia の文字を形づくるからである。Pachynum と呼ばれる岬（俗にいま *Capo Passaro*）は Graecia を望む。Lilybaeum 岬（いま *Capo Boeo*）は Africa を [望み]、Pelorus 岬（いま *il Faro*）は Italia の方に延びる海峡があらう。それは狭く危険で、次々と続く急流ゆえに剣呑にして凶暴、そして Scylla・Charybdis の恐るべき名前によって名高い。Scylla は北に面する岩礁であり、Charybdis 海は南に面して渦で満ちている [Plinius 3.8.86~87]。いずれも着岸に有害である。

さらに、島の最大の長さは Pelorus 岬・Liblybaeus 岬間で、50GM である。幅は、Pachynum から Cephalaedim の町まで35GM である。

この街々はかつて有名であった。沿岸地帯には Massana (Roma 市民の街で、彼らは Mamertini と呼ばれた)・

Zancle (以前は *Falx* と呼ばれた。いまは *Meßina*)・Tauromenium (いま *Taormina*)・Catona ないしは *Catina* (いま *Catania*)・Syracusae (島全体の全ての街のなかで最も有名である。いま *Saragusa*)・Camarina (いま *Torre di Camarana*)・Agrigentum (Graecia 語では Acragas。いま *Gergenti*)・Selinuntum (Graecia 語では Selinus。いま *Torre di Pulici* ないしは *Terra de li Pulci*)・Lilybaeum (かつては文学研究で栄えた。いま *Marsalla*)・Drepanum (いま *Trapani*)・Panormum ないしは Panormus (いま *Palermo*)・Soluntum (Graecia 語では Solus。いま *Solante*)・Himera (いま *Termini*)・Cephaladis (いま *Cifalu*)・Tyndaris ないしは Tyndarium (いま *Santa Maria di Tindari*)・Mylae (いま *Milazzo*)。

内陸では Centuripe (いま *Centorve*)・Agyrium (いま *S.Filippo d'Agirone*)・Assorus (いま *Azaro*)・Enna (いま *Castro Ianna*)・Leontini (名前を保つ)・Neetum (*Noto*)・Motyca (*Modica*)。

Sicilia の川・山

すこぶる有名な川としては Onobala (Taurominius と同。いま *Cantara*)・Symaethus (いま *la Iaretta*)・Cyamosorum (Centuripum から)・Chrysam (Assorum から)・Terias (いま *Fiume di S. Leonardo*)・Anapus (いま *Alfeo*)。Cyane の泉 (いま *la Pisma*) とともに Syracusa の近くにある)・Elorus (いま *Abiso*)・Gela (いま *Fiume di Terra nuova*)・Hypsa・Belici・二つの Himerae (一方はいま *Salsa* で Libycum 海に、他方はいま *Termini* で Tyrrhenum 海に、注ぐ。両者は同じ泉から発し、島を二つの部分に分けそこなっている、と古人は言い伝える)。

山のなかで最も有名なのは Aetna (いま *Monte Gibello*) である。驚くべき、夜の火によって [知られる]。その噴火口は20スタディアに及ぶ。ついで、Eryx (俗にいま *Monte di Trapani*) である。

第42章 Sicilia の新 [旧] 住民の記述について

Sicilia には最初の住民として Cyclopae・Lestrigonae すなわち野蛮で残忍な種族である巨人族がいた (島の中いたところで発見される巨大な遺骨が歴史や物語に信憑性を与えているように)。ついで Hispania から Iberi が、Sicanus に率いられて島に住んだと言われる。その後、Italia の Sicilia から Siculi が [来た]。ついで Phoenices が島の Tyrus・Sydone 海岸を占居した。彼らは Graeci によって駆逐された。結局これらの者とともに Graecia 語が移入された。

支配権は初めは王・僭主のもとにあった。のちに島の大部分が Carthaginensis の勢力下に落ちた。Romani は彼らを征服して我が物とし、属州という形に改める初めとなった。Iustinianus 帝の時代に Vandali が Africa からこれを占領した。これに対して Iustinianus の将軍 Belisarius が一撃を加え、後に Saraceni が侵略した。最後に Tancredus Normannus が彼らを駆逐し、その孫の Rogerius が、先に述べたように、初代の Apulia・Sicilia 王に任じられた。その後、王権は二つの首邑に分かれ、Suevi Germanini が Sicilia の王権を手に入れた。彼らを攻撃して Galli が [支配権を] 回復した。しかし彼らは晩禱 (と呼ばれる) に住民に殺されたので、Sicula は Arragonia 王に、そして遂には Castilia 王に、帰した。

全体はいま三つの地方 (vallis [谷] と呼ばれる) に分けられている。その一つ Vallis Demona は Pelorus 岬に向く。もう一つの Vallis Neeti は Pachynum に、三つ目の Vallis Mazarae は Lilybaeum に [向く]。

現在有名な街

最も有名な街は Panormus で、王国の首邑であり、Hispania 王が派遣した副王 [prorex] の座である。街は力があり広大である。人口の多さ、建築物の尊大さ、市民の潤沢さ、のゆえに際立つ。次は Messana で、まさに広大・潤沢・華麗である。その他の注目すべき街は Catana・Syracusae・Tauromenium・Agrigentum・Neetum・Sciaccia・Mazara・Marsalla・Drepanum・Termini・Enna。Drepanum 人は航海の知識によって他の Siculi に勝る。

大司教領は三つ：Panormitanus・Messanensis・Montiregalensis。公的な学園は Catana のものである。

第43章 Sardinia・Corsica について

内海において大きさの点で次位にあるのは Sardinia である。肥沃な島で、気候よりも土壌において優れている。有害なものがほとんどないほどに多産である [Mela 2.7.123]。名称は、Hercules の息子 Sardus から承けたと Graeci によって物語られている。Sandaliotis・Ichnusa 以前に、まさに草履の形にちなんで呼ばれていたにもかかわらず。その長さは、Calari から、Sardinia・Corsica 間の海峡まで45GM をおおう。幅は、Gorditanum 岬（*Capo di Monte Falcone*。Capo di Argentera と同）から Olbia 近くの Columbarium 岬まで26GM である。

かつてすこぶる有名であった街は Caralis（いま *Cagliari*。Italia 語・Sardinia 語で *Cagliari*）・Sulci（かつて Carthaginiensis の植民地。いま *Palma di Sole*）・Olbia（古代の名前を保っている）。

この地の農民を、Hercules の子 Sardus は Libya から連れ出したのだと言われ、Mercurius の子 Norax は Hispania の街 Tartessos から。同様に、Iolaus から Iolaenses の人民が、ついで Ilienses・Locrenses・Corsi が同じ島にやってきた。後に Carthaginienses が占居した。そして彼らが Punica 戦争で放逐され、Romani は自分たちの支配権に付加した。Roma に従属することは、Roma の支配が衰えたのに乗じて Saraceni が侵略するまで続いた。彼らが駆逐されると、Genuenses・Pisani はしばらくの間、その支配権を争った。Pontifex Romanus が武力で奪われた双方を Arragonia の領土に割り当てるまでである。この称号により結局 Hispania に帰属した。

いますこぶる有名な街は Calaris（島の首邑）、著名な港としては Praeterea Oristana・Sassaris である。

Corsica

より小さい Corsica は Sardinia から北に半 GM 離れている。過酷で多くの者にとって近づくのが難しい位置にあるため、永劫ほとんど耕されていない。初め Terapne、まもなく Graeci によって、Hercules の子を望んだ Cynus 王にちなんで Cynus と呼ばれた。さらに Liguria 出身の女性 Corsa Bubulca（彼女は Ligurum 公により武力でこの島に進んだ）にちなんで Corsica となった。また植民地は公にちなんで Corsi と呼ばれる。島の長さは Sacro 岬（いま *Punta di Marono* ないしは *Capo Corso*）から Granaicum 岬（*Capo di Manza*）まで30GM である。幅は、今日の *Capo di Foro* 岬から Aleria まで20GM である。

かつて有名であった街は Aleria・Mariana（これらの名前はいま荒廃に沈淪している）。

島の最初の支配権は Tusci が占めていた。その後、Carthaginienses が、まもなく Romani が、ついで Sarraceni が、[占めた]。彼らが圧倒されてから Genuenses と Pisani とは、主権がいずれに留まるか、互いに争った。結局 Genuenses に帰した。ここにはいま有名な街はない。とは言え、傑出した場所は *Adiazio*・*Bebbio*・*Calvi*・*Bonifacio*。Calvi は最も繁華な島の港である。

第4巻

第1章 Pannonia について

Italia から Iulia Alpes を越えれば Pannonia が見える。かつては、土は肥沃で、人は力強く、兵力・財力が極めて強力な地方であった。名前の由来は定かでない。東の境界は Cethium 山である。これはいますこぶる大きな山脈で Savus・Dravus の源流から Danubius までさまざまな名前によって編み上げられている。初めは *Pleysz*、やがて *Hengstberg*、まもなく *Dembberg*、ついで *Herzberg*・*Schnegberg*・*Kalenberg*、と呼ばれる。北は Danubius 川。西は同じ Danubius 川と Aureus 山（いま Hungari 語で *Macheck*）。南は、Aureus 山から合流する Timacus（いま *Lim*）・Drinus（いま *Drina*）を経て Vna 川の源流にまで引いた線、ついで *Caravancas* 山、および Savus 源流までの Pannonica・Carnica の Alpes。今日の、Carniola・Croatia・Vindorum 辺境伯領・Carinthia・Stiria, Austria の大部分、Hungaria の半分、Sclavonia・Bosnia, Servia の一部、を包含する。

上下に区分されている。上（第一総督管区 [consularis] と同）は西に向かい、いまそこには Carniola・Croatia・Vindorum 辺境伯領・Carinthia・Stiria, Austria の大部分 [が含まれる]。下（第二総督管区 [consularis] と同）は東に広がり、Bosnia・Sclavonia, Danubius・Dravus・Arrabo 3 川に囲まれている限りの Hungaria, を包含する。そして Pannonia のこの両部分はともに Dravus 川・Savus 川間にひろがっており、Valeria（ないしは Pannonia）Interamnia (Riparensis と同）と呼ばれる。

このようなわけで今日 Hungaria は古代の Pannonia のかろうじて第三の部分を保存する。Iazyges・Daci の Danubius 彼岸の残部とともに保持する。

街のうちすこぶる有名なものは Segesta (Siscia と同。いま *Siseck*。Croatia にある)・Petovio ないしは Patavium (*Pettavv*。Stiria にある)・Amona (*Vnterlaubach*。Roma の植民地)・Nauportum (*Oberlaubach*。Carniola にある)・Vindoniana (Vindobona と同。いま Vienna。Austria にある)・Scarabantia (いま *Scrabing*)・Sirmium (いま *Simach*。Hungaria にある)・Taurunum (俗に *Belgrad*。Germania 語では *Griechsvveissenburg*)。

第2章 Pannonia の住民について および Hungaria 王国について

旧時の話の記録の伝えるところでは、初め Pannonia には Celtica 族の Pannonii が住んでいた。Graeci は彼らを Paeones と呼んだ。I. Caesar が初めてこの地に進軍し、その後他のものが同様にした。そして最後に Tiberius が完全に制圧した。Romani の支配は桎梏をもたらした、それが衰えた後 Gothi が侵入した。彼らは Hunni に逐われ、Hunni は Longobardi に、そして今度は逆に彼らが Hunni に。結局は900年頃 Arnolphus 帝のもと、Scythia から派生したある種族が、Hunni を制圧し、今日 Hungaria と呼ばれる王国全体を手に入れた。Hunni の名前はその他のものと混ぜられながらそこに定着し、いまなお Hunagari はそれを正式に名乗っている。Hungari の境界は、北は Carpates 山 (これによって Polonia・Russia と分離される)、東は Transsilvania (Valachia と同)、南は Dravus 川、西は Stiria・Austria・Moravia、である。

その形は四角形で、その四つの側面は世界の四方を望む。最大に長いところで Patissus (俗に *die Teisse*) の源流から Murae (*die Muer*) 合流点まで60GM 延びている。幅もほぼ等しい。

Danubius 彼岸で Polonia・Transsilvania と隣接する上 [Hungaria] と、Danubius 此岸にある下 [Hungaria] とに分かれる。伯領は全体で50。今日、哀れにも王国のはなはだ大きな部分を Turca の非道な支配が荒廃させている。

その町は、それらが Moravia・Polonia にさらに近くにあるのでない限り、大抵破壊されているか、全く貧相な状態にある (俗に *die Bergstatte*)。しかしながら比較的有名なのは上 Hungaria では Temesvvar・Genadium (俗に *Chonad*)・Segedinum・Varadinum (俗に *Wardeyen*)・Solnock・Agria (Erla 城とともに)、二つのすこぶる堅固な城 *Zatmar*・*Tockey*。山岳地帯では *die Bergstätte*・Cassovia (*Kassavv*。上 Hungaria の首邑である)・*Eperis*・*Leutsch*・*Neusol*・*Altson*・*Kremmitz*・*Nitria*・*Tyrna* (全てのなかで最も快適であり、Buda 焼失後の王国の首邑である)・Posonium (俗に *Preßburg*。Germanici の様式に従った街で十分に洗練されている)。

下には、Arrabo (俗に *Rabe*)・*Tavvarzin* (住民による。ここから Latin 語では *Iavarinum*)・Comara (俗に *Komarno*)・Strigonium (俗に *Graan*)・王領 [regalis] Alba (俗に *Stuelvveissenburg*)・Vesperinum (*Vesperin*)・Quinque Ecclesiae (*Funfkirchen*)・Buda (かつて王および王国全体の首邑。Germania 語で *Ofen*)・Pestum (Buda の対岸に位置する)。有名な城は *Dotis*・*Pappa*・*Palotta*。大司教領は2：Strigoniensis・Colossensis (*Kolotza* の町にある)。

第3章 Sclavonia・Bosnia について

Pannonia・Illyricum の境界が錯綜しているために、Sclavonia という俗語による名称は、Dravus 川から Adriaticum 海まで延びている地のどこにも通用する。厳密には Sclavonia は、Dravus・Savus 両川の間にひろがる、西は Stiria 東は Danubius に囲まれた、地方を指す。その長さは *Kopránitz* の町から Dravus の合流点まで50 GM である。幅は Dravus から Savus まで12である。

Danubius 彼岸にひろがる Savus 下流部近くには Rasci の人民 (Germania 語で *die Ratzen*) が住む。この地方全体をかつては Pannonii が、ついで Gothi が占めた。最も新しい Sclavi (すなわちかの Sclavonii) は現在までここに留まっている。ここに王国を建てた彼らは、のちに Hungari によって貢納民 [vectigales] とされた。いま大部分は Turci の支配に服する。

著名な町は *Posega*・*Gradiskia*・*Zagabria*、そして *Kopránitz* (Turci の侵略に対する最も強力な城である)。

Bosnia 王国

Bosnia 王国は、Vna 川・Savus 川・Drinus 川・Bebii 山地の間に位置する。名称は Bosna 川から承けている。その長さは Vna・Drinus 両川のあいだで40GMになる。幅は、Bosna 源流と合流点の間で、15GMである。

この王国もかつては Pannonia の一部であった。その後 Gothi が占居したが、彼らを逐って Sclavoni が住んだ。ついで Hungari によって大公領〔principatus〕の名のもと貢納民〔stipendiaria〕とされた。Turca によって併呑された時、彼は王の称号で司令官〔Praefectus〕を任命し、王冠も調達されて、大公領は王国の形に戻された。復興されたそれを、Turca が取り戻し、Hungari は久しく保持することはなかった。

王国の首邑は Iaytza。いま大司教管区〔metropolis〕は Warbosanin である。

第4章 Illyricum について

Arsia 川 (Italia の境界) から東に向かって Illyricum (Graecia 語で Illyris) がある。Pannonii に近いところがセキ薄・コウ塙であることを別にすれば、日当たりが良く快適な地方で、土壌は肥沃でブドウ生産に適する。西は Arsia 川および Arsia 源流から Colapis の東まで引いた線で画され、北は Vna 源流までの恒久的な山脈（これによって Illyrii は Pannonii から切り離される）、さらに Timaci (いま *Lim*) と Drinus との合流点まで引かれた線、東は Timacus・Scodrus 山・Drilo 川(これによって Macedonia から分離される)、南は Adriaticus 湾である。その長さは Arsia から Drilonem まで90GMに及ぶ。最大幅は Narone 川にそって、その源流から河口まで20Mである。

かつて二つのすこぶる有力な部分すなわち地方に分けられていた。その一つは Arsia 川から Titius (いま *Cherca*) 川までで、Liburnia と呼ばれる。もう一つは Drilo 川すなわち Lissus (いま俗に *Aleßia* と呼ばれる) の町までで、Dalmatia である。

Liburnia の人民はすこぶる有名な Iapyges であった。境界沿いの町は Flanona (いま *Fianona*)・Tarsatica (*Tersatz*)・Senia (*Zegna*)・Lopsica (*Lopur*)・Ortopula (*Starigrad*)・Argyruntum (*Pescha*)・Aenona (*Nona*)・Iadera (*Zara Vecchia*)・Scardona (名前を保っている)。

Darmatia の人民は雑多であった。沿岸の町は Sicum (いま *Sebenico*)・Tragurium (いま *Travv*)・Salona (厳密には Spalatum)・Narona (*Narenta*)・Onaeum (*Sabioncello*)・Epidaureus (*Ragusi Vecchia*)・Rizinum (*Risine*)・Budua (*Budoa*)・Olchinium (もとは Colchinium と呼ばれた。いま *Dolcigno*)・Lissus (*Aleßia*)・Intus Scodra (*Scutari*)・Dalminium ないしは Delminium (*Delminio*)。Delmatia ないしは Dalmatia の名前の由来である)

第5章 Illyricum の住民およびその新誌について

Illyrii 族は未開で残虐、山賊・海賊のゆえに悪名高かった。Liburnia と呼ばれるこの部分は、AUC525年〔BC 229年〕(第二次ポエニ戦争の10年前)に Romani によって完全に制圧された。Dalmatia は Augustus 帝のもとで〔征服された〕。そして Gothi がそれを掠奪するまで、Roma の支配下にあった。その後 Sclavonii が、Maeoti 沼地から進発して、占居した。ついで Hungari がそこを支配した。最後に Turcae が Hungari を圧倒し、内陸部を我が物とした。沿岸部は、二つの都市国家 (Scardona (これは Turci が支配する)・*Ragusi* (主権国))を除いて、今日にいたるまで Veneti が保持しているからである。王国(かつて Liburnia・Dalmatia の二つの部分に分かれていた)自体、いまでは Dalmatia という一つの名前で呼ばれている。これは Sclavonia の一部である。かつての Liburnia はいま Iadera 伯領で、俗に *Contado di Zara* と呼ばれている。そこでいま有名な街は *Segna*・*Nona*・*Zara* である。これらは決して重要性に欠けるものではなく、華麗さが最も劣る都市でもない。*Sabenicum* は十分に快適な街である。Scardona を把持する、近隣の Turca に圧迫されているため、手入れは十分ではない。*Ragusa* は、城が付随する大きからぬ街である。主権国ではあるが Turca の貢納を務める。市場は、この Adriaticum 海からの、Turcici の商品ですこぶる繁華である。Turci の街である *Scutari* も、市場は侮りがたい。

第6章 Graecia およびその区分梗概について

Graecia は Illyricum に隣接する。世界が Roma 帝国に併呑される前は言説においても事績においても世界で最

も繁華であった。というのは、あらゆる文芸の輝きは最初にここから燃え出したからである。ここから、全世界を啓蒙するためにさまざまな地方に繰り返し植民者が出で立ったからである。いまや全てが *Turci* に蹂躪され、見捨てられた些少の瓦礫のなかに、まさに蛮地に、さらに野蛮な者が横たわっている。*Graecia* は *Graecus* 王に因むと言われる。同様に、*Hellene* という別の王にちなんで *Hellas*、住民は *Hellenes* [とも言われている]。*Graecia* という名前はさまざまに解釈される。ともかく初めは *Graecia* の名前で二つの地が呼ばれた。それらは後に分かれた。一つは *Thessalia*、もう一つは厳密に言う *Graecia* すなわち *Hellas*、である。ついで *Peloponnesus* が *Graecia* の称号に近づいた。まもなく *Epirus* が同様に、そして *Macedonia* 全体も。さらに *Creta* 島、そして *Graecia* の島に近接する者は誰でも。*Italia*・*Sicilia* さえへも、先に述べたように、*Graecia magna* に *Graeci* の名前が渡った。同様に *Asia* へも、*Graecia Asiatica* として。しかし *Asia* におけるこれについてはいまは *Europa* がまず説明されるべき地である。

したがって、一つの *Graecia* の名前のもとに初めに我々が算入した全ては、境界によって囲まれている。東は *Aegum* 海、南は *Cretico*、西は *Ionio*、北は *Scardici* 山脈によって *Illyrium*・*Moesis* から、*Stymone* 川によって *Thraci* から、切り離されている。その長さは *Peloponnesus* の *Tenarium* 岬から *Isthmus* を経て *Strymon* の源流まで、100GM である。最大幅は *Sunio* 岬から厳密に言う *Graecia* および *Epirus* を経て *Acroceraunium* 岬まで80 GM である。

Graecia 主要部全体を分割した諸部分すなわち地方は *Epirus*・*Peloponnesus*・厳密に言う *Graecia*・*Thessalia*・*Macedonia*。とは言え、*Arcanania* (*Eprus* のもとにある)・*Aetolia* (*Graecia* のもとにある) は古代の地理学者の誰も独立に扱っていない。

Romani は *Graecia* 全体を二つの属州に区分した：*Macedonia* (そのもとに、*Macedonia*・*Epirus*・*Thessalia*)・*Achaia* (そのもとに、厳密に言う *Graecia*、*Peloponnesus*、近くに位置する島嶼)。

第7章 *Epirus*・*Peloponnesus* について

Epirus

Epirus (いま *Canina* と呼ばれる) は *Celidnus* 川・*Pindus* 山によって *Macedonia* と切り離され、*Graecia* からは *Acheloum* 川で [分かれる]。有名な人民は *Molossi* (その町は *Dodone* (その近くに *Iovis Dodonae* の寺があり、予言でよく知られる))・*Dryopes*・*Chaones* (*Chaonia* 地方。町は *Oricum*・*Antigonia*・*Pnormus*・*Elaeus*)・*Thesprotii* (その *Buthrotum*、*Pyrri* 宮殿)・*Cassiopaei* (その *Cassiope*、*Almene* 地方。町は *Nicopolis*)・*Amphilochi* (町は *Argos* (*Amphilochicum* という添え名))・*Acarnanes* (*Acarnania* 地方、町は *Ambracia* (*Aeacida* 宮殿。[町]にちなんで *Ambracius* 湾。この町より有名なものは *Epirus* にはない)・*Actium*・*Leucas*・*Stratos*)。

Peloponnesus

Peloponnesus は *Pelops* 王にちなんで呼ばれる (いま *Morea*)。かつて名声において地上のいかなる人も軽視することがまづなかった。半島のように二つの海 (*Aegeum*・*Ionium*) の間に延びる。湾と岬 (それらは繊維のようにその岸に達する。また細流によって湖に注がれるのと同様) とのためにスズカケの葉にすこぶる似る。

諸部分すなわち地方：厳密に言う *Achaia*・*Elis*・*Messenia*・*Arcadia*・*Laconia*・*Argolis* ないしは *Argia*。

すこぶる有名な街：*Achaia* には *Corinthus* (それ自身が半島で、かつて有名な町であった。後に災厄によりさらに知られる。*Romani* はその力を恐れていたのを、徹底的に破壊した)。*Elis* では *Olympia* (体育競技ですこぶる名高い)・*Cylene* (*Mercurius* はそこで生まれたと信じられていたことで広く知られる。ここから *Mercurius Cyllenius* [が造られた])。*Messenia* では *Messene*・*Pylus* (ここから、かの *Pylus* の *Nestor*)・*Corone*。*Arcadia* では *Tegea*・*Stymphalus*・*Mantineia*・*Megalopolis* (*Plybius* の故郷である)。*Laconia* では *Lacedaemon* (かつて全 *Graecia* のうちで最も有力であった。*Sparta* と同)・*Leuctrum*・*Amyclae*。*Argia* では *Argos* (*Hippium* と添え名される。*Iuno* の寺々があり、ここから *Iuno Argiva*。古さと宗教とで遍く知られる)・*Nemea*・*Mycenae*・*Nauplia*・*Troezen* (*Attica* との同盟に対する信義で注目される)・*Epidauros* (*Aesculapius* の寺で名高い)。

第8章 Hellas すなわち厳密に言う Graecia, および Thessaria について

Peloponnesus に狭小な細道すなわち Isthmus によって結び付けられている地方が、厳密に言った、Graecia 語で Hellas, Latin 語で Graecia, である。その境界は、東は Acheloum 川（これは Epirus から移されている）、北は Othrym 山・Oeta 山（これによって Thessalia から分かれたる）、西は Aegaeum 海、南は Saronicum 湾・Corinthiacum 湾（両者の中央に Isthmus があって、Peloponnesus につながる）である。

Graecia の諸部分（地方）は Aetolia・Doris・Locris Ozolaea・Phocis・Megaris・Attis ないしは Attica・Boeotia・Locris Epicnemidia。

有名な街は Aetolia では Chalcis・Calydon・Olenus。Doris では Boium・Cytinium・Pindus。Locris Ozolaea では Naupactus（いま *Lepanto*）・Turcarum（災厄で知られる）。Phocis では Anticyra・Cyrrha・Pythia・Delphi（Parnassus 山の麓にあり、かつてこの地の Apollo の予言ですこぶる有名だった町）。Boeotia では Orchomenum・Thespieae・Lebadia・Chaeronea（Plutarchus で有名である）・Plataeae・Thebae（Boeotia の、と添え名される。Hercules・Liberus 両神が養育されたことで極めてよく知られる。かつて有力な都市国家であった）・Delium・Aulis（Troia にむけて同盟した Agamemnon の Graeci 艦隊が停泊したことで有名な港）・Leuctra（Thebae の Epaminondus の Lacedaemoni に対する戦いの勝利で有名）。Megaris では Megara（ここから地方名となった）・Eleusis。Attis では Marathon（武勇の巨大・大量な証人の [町]）・Athenae（証言が必要である以上に有名）。Locris Epicnemidia では Cnemides（ここから地方名となった）・Opus・Thronium・Elatia・Lilaea。

Thessalia

厳密に言う Graecia は、北は、何度も名前が変えられた Aemonia（かつては Macedonia の一部で、後に引き離され、まもなく再び結合された）につながる。同様に、Pelasgi Argos・Hellas・Thessalia・Dryopis は、つねに王名から添え名がつけられた。そこで生まれた王の名 Graecus, そこから Graecia, そこで Hellen[が生まれ], そこから Hellenes。この同じものを Homerus は三つの名前と呼んでいる：Myrmidona・Hellena・Achaei。結局、厳密に言う Thessali に対しては Thessalia の名前が有力になり、Estiota・Pelasgi・Magnesii・PhthioTa に人民が区分された。

町は、厳密に言う Theffalia では Hypata・Sostenes・Cypera。Estiotide では Gomphi・Phestus・Tricca・Aetinum・Philippici 広闊地(Pharsalici とも。Roma 市民の災厄によってよく知られる)。Pelasgia では Pythaeum・Atrax。Magnesia では Iolcus・Hermenium・Castanea・Meliboea・Methone（Alexander 大王の父 Macedonia の Philippus の攻囲（その際、矢に撃たれて一眼を失った）によって有名である。さらに Malliaum 湾には Laconia の Leonida 将軍のために死んだ者の記念碑たる Thermopylae もある）。Phthiotide には Phthia・Thebae（Thessalicae という添え名をもつ）・Echinus・Larissa・Demetrius・Pagasae・Tempe（神聖な森によって有名である。Peneum 川の近くに位置する）。

第9章 Macedonia

Thessalia・Epirus の北、北に面する地方は、以前はさまざまな人民の名称および王によって識別されていた。後に Macedonia という一つの名前に集められ、一体になされた[Solinus 9.1?]。二人の名高い王（父 Philippus・子 Alexander。彼らによって地の支配権が手に入れられた）によって、地は海（日が昇る方、Aegeum, 沈む方、Ionium）まで大きくかつ広げられた。その一部は、Aemathius 王にちなみ、以前 Aemathia と呼ばれていた。ここからその名は全土に流用された。Macedonia は、Deucalion の外孫 Macedon にちなんで呼ばれると Solinus は考える [9.11]。私は、その父 Mygdoni から Macedonia の名前が生じたと推測する。Μακεδονία と Μυγδονία とにおける発音の違いは僅かだからである。

境界は東は Aegeum, 南は Thessalia・Epirus, 西は Ionium 海すなわち Adriaticum 海、北は全 Graecia のものとして我々が設定するものに等しい。

かつてここに150の人民が存在していたことを Plinius [4.10.33] が記している。それらのうち現在まで知られている名前は Adriaticum 沿海の Taulantii では、Epidamnus ないしは Epidamnum の町（不吉な名前（たしかに滅亡 [damnum] することになる前兆であると見られた）のために、Romani によって Dyrrachium と呼ばれ、い

ま *Durazzo* である)・Apollonia・Aulon, Elymiotae では Elyma・Bullis の町, Epirus 地方に接する Orestis では Grytone の町, Dassaretae では Lychnidos・Evia の町, Aemathia 地方 (厳密に言う Aemathia) では Pella (2本の若木が、これを Macedonia の全ての街の中で最もよく知られるものとした。Graecia の征服者 Philippus と, Asia をも征服した Alexander とである)・Aegea (そこでは王を火葬することが慣わしであった)・Aedessa・Idomena・Scydra・Europus・Tyrissa の町, Pieria 地方 (Musa の起源であり住処である) では Pinda・Phylace・Dion の町, Mygdones (Mygdonia 地方) では Antigonía・Physcae・Carrhabia・Letae・Terpilus のまち, Paraxis では Antigone・Pallene・Cassandria・Torone の町, Chaldica 地方では Augaea・Singus・Acanthus の町, Amphaxitis 地方では Thessalonica (Cicero の流刑でよく知られる)・Stagira (哲学者中の第一人者 Aristoteles の出生地として有名である)の町, Bisaltiae では Euporia・Ossa・Calliterae の町, Edonii では Amphipolis・Scotusa・Berga の町, Orbeli では Heraclea・Praecopolis・Tristolus の町, Pelagones では Stobi・Lyncistarium・Heraclea の町, Iororum では Iorum・Alorus, Almopum・Europas・Albanopolis・Apsalus・Aestraeorum・Aestraeum・Eordeorum・Daulia・Dibolia・Scampis。

第10章 川・山さらに Graecia 付近の島について

川

Graecia 全体で比較的有名な川は Epirus では Acheron (Pandusia の町がその近くにある。これら二つの名前は, Alexander 王が曖昧な神託によって運命の予告を避けようとした時, Italia の Brutiis で人民のために同じ [名前の川の] なかに落ち込み死んだものである)。Acarnania では Achelous。Peloponnesus では Peneus・Alpheus・Panisus・Eurotas・Inachus。Graecia では Cephissus (二つの支流に分かれており, そのうち右を Asopus 川, 左を Ismenus 川と呼ぶ)。Thessalia では Sperchius・Peneus。Macedonia では, Aegaeum 海に注ぐ Aliacmon・Erigon・Axius・Chabris・Strymon, Adriaticum 湾に流れる Panyasus・Apsus・Laus・Celidnus。

山

山々のなかで最も有名なのは Epirus では Acrocerania・Pindus, Peloponnesus では Stymphalus・Pholoe・Chronicus・Taygetus, Graecia では Callidromus, Graecia と Thessalia の間には Othrys・Oeta, Phocis には Helicon・Parnassus, Boeotia には Cithaeron (物語・歌ですこぶるよく知られている), Attica では Hymettus (大公領はすこぶる当然にもこの山によって捧げられる。それは特に花盛りの, 格別な蜂蜜の味わいによって, また自身と全ての他人を圧倒する), Thessalia では Olympus・Pelius・Ossa (巨人の戦いの物語で語られている), Macedonia では Athos (Graecia 戦争を強行する Xerxes は, これに穴をうがって艦隊を通らせた)

Graecia 近傍の島々

Graecia の海岸に近接する島々は数え切れない。Creta を除いた (これについては別 [第4巻12章] に述べることにする) それらのうち, Ionium 海で最も有名なのは Corbyra である (同じ名前 (いま *Corfu*) の町がある。Cephalenia・Zacynthus (いま *Cefalonia・Zante*) とともに Venetiae の支配下にある)。Cephalenia の近く, 無名ならざるもののなかに Ithaca がある (Ulysses の名前できわめてよく知られる。いま *Isola del Compare*)。Aegeum 海では Euboea (いま俗に *Negroponte*。Boeotia から, 橋で繋がるほどに細い, 間を流れる水路によって引き裂かれたと信じられている。そこにある町はかつてすこぶる有力であった)・Calystus・Chalcis。そこから北に向けて Scyrus (いま *Sciro*), その先に Lemnos (いま *Stalimene*), それと Thracia 海岸との間に Samothrace (俗に *Samandracchi*)・Lesbus (いま *Metellino*)・Chius (Scio。Asia に配されている)。Lesbus にはかつてすこぶる名高かった町 Mitylene があり, いまの島の名前はそれに由来する。Saronicum 湾には Aegina (いま *Engia*)・Salamis (いま *Coluri*) があり, Persica の艦隊の破滅で知られる。ついで海の中にあたかも輪をなして Cyclades が横たわる。そのなかで比較的知られているのは Andrus (いま *Andri*)・Delus (*Sdille*)・Paros (*Pario*。大理石でよく知られる) である。Cyclades の周囲に散在しているのは Sporades であり, そのうち比較的有名なのは Icaria (いま *Nicaria*)・Pathmus (*Palmossa*。Ioannes Theologicus が流罪となったことで際立つ)。さらに Samus (俗に

Samo)・*Cos* (いま *Lango*)・*Carpathus* (*Scarpanto*。これは *Asia* に配せられる) も名高い。

第11章 Graecia の住民およびその新誌について

全ての *Europa* の地のなかで、他の多くの地があるにもかかわらず、*Graecia* が最初に居住されたことは、何よりも議論によって確実である。というのは、*Graecia* が、最初の人間が作り出された場所であると我々が考える *Asia* に、最も近接しているからである。したがって、そこから *Graecia* への渡航は短くかつ容易である。王・将軍・政務官らによって切り離された人民・市民は発散し、征服する *Macedonia* の *Philippus* によって *Graecia* 全体が *Macedonia* の支配に従属させられるまでそれは続いた。ついで *Romani* がその覇権を握り、その後 *Gothi* と *Hunni* とが住みつくとというよりもむしろ掠奪した。最後に *Saraceni* と *Turcae* とが日までも掴んだ。このため *Graecia* は、地方・人民の古代の呼称を消し去られ、新しい名前に割り当てられた。かつて *Peloponnesus* であったものはいま *Morea* と呼ばれる。厳密な *Graecia* だったものはいま *Livadia*, *Thessalia* はいま *Ianna*, *Epirus* は *Canina*, である。*Macedonia* は実に四つに分けられ、*Thracia* に隣接するところは *Iamboli* と呼ばれ、*Thessalia* に続くところは *Camenolitari*, *Illyricum* すなわち *Dalmatia* に隣するところは *Albania* (古代の、かつよく知られた大公領であり、彼らの騎兵の精鋭と武勇とでいまもきわめて有名である)、そして全体の中央に、*Macedonia* の古代の名前 [を保持する地区がある]。

Graecia 全体の街のなかでいま最も繁華なものは *Thessalonica* (俗に *Salonichi*) で、強力にして富裕である。市場は *Indica* の商人たちによって雑踏となっている。これに次ぐのが *Albania* の *Dyrrhachium* (俗に *Durazzo*) で、すこぶる繁栄した街である。気候が不快なために洗練さに欠ける。さらに、*Croia* (*Scanderbegus* の故郷) は *Albania* 内陸の要害堅固な街である。

第12章 Creta 島について

Creta は、*Graecia* の海岸近くに横たわる島すべてのなかで最大であり、*Graeci*・*Latini* の記録によってはなはだ喧伝されている。船と矢とを初めて使うことができた。*Minos* 将軍により初めて艦隊戦を行った。複雑な渦動を展開する騎兵戦を初めて教えた。文芸の最初の規則は [この島に] つながる。同様に音楽研究もここに淵源する。ある人々はその名前を *Hesperides* の娘のニュンベ *Cretis* から導出し、別の人々は *Creta* の *Curetum* 王 (初めは *Aeria* という人で、後に *Cretis* となった) からとする。また温和な気候のゆえに *Μακρόν νησόν* すなわち幸福の島と呼ばれたと考えた人々もいる [*Plinius* 4.12.58]。住民は *Graecia* 語で *Cretes*, *Latin* 語で *Cretenses* と呼ばれる。この島は東西間にすこぶる長く引き伸ばされており、一方は *Asia* に、他方は *Africa* に、近く横たわる。北は *Aegaeum* 海および自身すなわち *Cretiscum* 海に打たれ、南は *Libyca*・*Aegyptia* の波に洗われる。その長さが最大なのは *Samonium* 岬 (いま *C. Salamoni*) から *Corycum* (いま *Cornico*) 岬までで 70GM である。幅は中央部付近で最大に延び、15GM である。

有名 [な街] だったのは *Cortyna* (島の首邑)・*Cydon* (*Graeci* はこの街を母市と呼んだ)・*Cnossus* (*Minos* の王宮)・*Therapnae*・*Dium*・*Lyctus*・*Lycastus*・*Phaestus*・*Manethusa*・*Dictynna*。

同じく名高い山々は *Dictaeus*・*Idaeus*・*Corycus*・*Cadiscus*。迷宮はほぼ中央にあった。*Daedalus* の驚くべき仕事であり、迷わず経路、進むも退くも不可能にする仕掛けの連続、上品な大理石、アーチ式の屋根を以て [知られる]。

住民は常にすこぶる邪悪であり、海賊のゆえに悪名高い。初め王によって支配されていたが後に公に変わった。*Q. Metellus* は島を制圧し、属州の形式で統治した。初めは *Roma* の、のちに *Constantinopolis* の、支配下にあったが、遂には *Graecia* の残部ともども *Saraci* に占領された。その後、*Frandria* 伯 *Balduinus* と *Constantinopolitanus* 帝とは、回復した島を *Montisferratus* 侯 *Bonifacius* に譲渡し、最後は *Veneti* が大金をもって買い、いまなお保持する。いま自身の母市によって軽侮されている *Candia* には、*Turca* の攻撃に対してすこぶる要害堅固な、四つの有名な街がある：*Candia*・*Canea*・*Rethymum*・*Sittia*。大司教区は一つ、*Candia*。司教区は 8 ある。

第13章 Thracia について

Strymona 川のうしろで *Macedonia* に接するのは *Thracia* である。*Europa* のすこぶる頑健な種族のなかで最も

未開・野蛮である。この地方は快適な気候にも土壌にも恵まれておらず、海に近いのでなかったら、その不毛・寒さのゆえにひたすらみじめに忍えるしかない。

名前は、Mars の息子 Thrace にちなむか、別のものが示すように土壌・気候の酷薄さや種族の粗暴さ (τραχεία というように) にちなむ、と思われる。境界は、北は Aemum 山(これは Maesis によって区分される)、東は Pontum および Propontidem、南は Aegeum 海、西は Strymona 川である。長さは Strymones 源流から Panysus 河口・Mesembria の町まで530GM、幅は Nicopolis 近くの Aemus 山から Chersonesus 岬の Mastusia まで60GM である。

かつては50の地区 [strategia] に分けられていたことを Plinius [4.11.40] が記している。そこに住む人民を細見する：Strymon 川沿いに住んでいるのは、Denseleta・Moedi、Nestum 川沿いには Digei・Bessorum・Elei・Diobesi・Carbilesi・Brysa・Sapoei その他、Hebrum 沿いには Odrysarum の多数の種族、Odomantae・Carbiletæ・Pyrogeri・Drugeri・Caenici・Hypasalti・Beni・Carpilli・Botiaei・Edones・Cicones・Bistones・Selletæ・Priantæ・Doloncae・Thyni・Celetæ。しかし全てのなかで最も凶暴なものとして、Florus [1.39.4.3] は Scordisci を語っている。

第14章 古代 Thracia の都市・川・山について

かつて Thracia で有名であった町は Strymon 川の岸辺に Aegaeo・Oesyne・Neapolis・Abdera (Diomedes の妹によって建てられた町である。そこでその名前がついた。同 Clazomene ともいう)・Tinda (Diomedes の馬の不吉な厩舎による [Plinius 4.11.42])・Maronea。それと Hebrum 川との間に Doriscus (Persa 王 Xerxes が、自身の軍勢を数えることができず、面積で測った場所である [Plinius 4.11.43])・Aenus (放浪中の Aeneas によって建てられた)・Cypsella (海から少し離れ、かつて巨大であった)。Chersonesus (Thracia の添え名となっている) には Cardia・Eleus・Sestus (Abydus が、Asia から離れて、これに隣接する。ともに Leandrus の愛で知られる。近くには、Xerxes が、海によって隔てられた陸地を取って橋によって (驚くべき巨大な所行である) 繋ぎ、Asia から Graecia に軍勢を渡した土地がある)・Callipolis・Lampsacus (Callipolis に向かい合って Asia の岸にある)・Lysimachia (Chersonesus の麓に位置する)。Ploponitis には Pectya・Bisanthe・Perinthus (驚嘆すべき円形劇場の華麗さによって有名である)・Selymbria、そしてまさに Bosphorus には Byzantium (もと Lygus、のち Nova Roma、最後に Constantinopolis と言われる。全時代のうちで最も有名な街で、Constantinus 帝によって帝国の座に選ばれた。威信にかけて把持されたが、遂に1453年に Turcae の不信心な種族が占拠した。しかしその時でも自分の威信を失わなかった。いまなお Turci 帝国の首邑は *Stambol* という名前で維持されているからである)。Pontus のその他の町は Phinopolis・Salmydisus・Peronticum・Apollonia (海から少しばかり退いている。かつては巨大であった)・Toza・Anchialus・Mesembria (Thracia の末端である)。内陸では *Byzya* (Thracia 王の城。Tereus による禁じられた犯罪のゆえにツバメによって憎まれる [Plinius 4.11.47]、と古人に想像されていた)・Philopolis (以前は Poneropolis、ついで位置によって Trimontium、建設者によって Traianopolis・Adrianopolis と呼ばれる町である)・Olynthus (すこぶる有名である)・Heraclea・Topiris・Philippi。

川・山

有名な川は Nestus ないしは Nessus・Hebrus・Athyras・Bathynias。山のなかでは Aemus・Rhodope・Orbelus が主要なものである。

第15章 Thracia の住民および現在の有名な都市について さらに Graecia の宗教の総主教について

Thracia の住民には最古の起源がある。Thracēs は一つの種族として生きながら、名称においても習慣においてもそれぞれ別である [Mela 2.2.16] が、総じて未開・粗暴・酷薄・残虐であった。初めは自分たちの王に服していた。後に Macedonia の貢納民 [tributarii] となり、さらに自立に戻ったが、多くの戦いによって Romani に逐われ、遂には C. Scribonius Curionus Procos. によって制圧され、Roma の支配下に服した。その後、Turcae の勢力がいたるまで、Graecia と Macedonia とが同じように Thracia の富を利用した。Turcae の支配は、全ての武勲・威信を凌駕した。というのも、この Turcae の首邑・座は Constantinopolis であり、それは先に述べた、Europa 全ての街のなかで最大かつ人口最多で、Constantinus 帝が Nova Roma と呼んだものである (Thracia の新しい名

前はここに由来し、いま *Romania* とされる)。

Thracia の街のなかで Constantinopolis に次ぐ位置は Hadrianopolis (Turci 語で *Endrem* といわれる) がしめる。かつては巨大かつ有力であったが、城壁に囲まれておらず、建築物も見劣りする。第三の Philippopolis は実に多くの人が居住する。この点で Traianopolis にひけをとらない。Sestus・Abydus は互いに向き合って位置し、この地方における Turcici 帝国の要と見なされている。

さらに、この場所に達したのであるから、Graeciae の現在の状況を検討するために、次のことを認識するのは価値がある。すなわち、Graeci はすでに Romana 教会によって退けられ、Roma 大神祇官(すなわち教皇)も認めていない、ことである。というのも、彼らの間で、Roma 教会が公言するものとは対立する独特の宗教をもっているからである。Graeci のみがこれに追従するのみならず、他の幾つかの民 (Bulgari・Servi・Bosni・Sclavonii・Illyrii・Albani・Moldavi・Valachi・Russi・Moscovitae・Tattari・Circassi・Mengreli・Pntica 全民・内陸部の Tattari [も同様である])。そこから、離れた地方で監察・管理するために離れた場所に座をおき、4 人の首長を自分たちのために建て、総主教 [patriarcha] の称号で尊重している。Graecanicae 教会全体の元首・首長は Constantionopolitanus 総主教で、これに頼って、全 Europa に散らばっている全ての Graecanicae 教のキリスト教徒は生きる。Alexandrinus (その座は Aegyptus の *Cairo* にある) は Arabia 教会をも管理する。Hierosolymitanus 総主教は Sylia で最高位と見なされる。その他の Asia では Antiochenus 総主教である。

第16章 Moesia について

Macedonia・Thracia の北に Moesia がある。それを Romani は、土壌の肥沃さのゆえに Ceres の倉庫と呼んだ。Ister・Aenus 間の Aureus 山・Scodrus 山から Pontus まで広がり、上 (いま Servia)・下 (Bulgaria) に分かれる。両者の中間の境界は Ciabrus 川である。上の人民のうちかつて最も有名であったのは Dardani で (その地方自体も Dardania という)、Macedonia に隣接する。下では Triballi が全てのなかで最も著名であった。その先は Peucestae・Troglohytae で、すでに Scythicae 種族である。というのも、Scythae は、下 Moesia の最も劣悪な部分 (Pontus の近く) を占めているからである。その一部であるすこぶる頑健な Getae は Danubium の兩岸 (此岸は Moesia、彼岸は Dacia) まで移っている。

Moesia の Danuius の右岸にはかつて多くの町が密集していた (Ptolemaeus の *Geographia*[3.8.4?] が証言する)。同様に、内陸部でも数えきれないほどであった。Pontus 沿岸で極めて有名だったのは Sarpedonia・Dionysopolis・Timogetia・Tomi (詩人の Ovidius が流されたことで知られる)・Istropolis・Eleutheriae。

Ister 川について

Ister 川は全 Europa で最大の川で、Germania 山地の Abnoba 山に発し、Danubium という名前で多くの種族を通して流下する際に、莫大な水で増加され、そこからまず Illyricum (すなわち Savus の合流点付近) をひたす。かつて Ister と呼ばれ、約60の川 (その約半数は航行可能) が合流し、Pontus には広大な6本の川すなわち河口によって流れ落ちる。それぞれの河口は、40千歩すなわち10GMの長さになつて、汲んだ水が甘いと感ぜられるという意味で海に勝つほどのものである [Plinius 4.12.79]。Germania 語で俗に *die Donavv*、Sarmatia 語・Scythia 語で *Dunay* である。

Moesia の住民、およびそこにおける二つの著名な王国 Servia・Bulgaria について

Moesia の人民は、未開・残忍、蛮人中の蛮人、で Thracia から出た種族である、と権威者たちが述べている。Moesia 自体、以前は Thracia の一部であったからである。M. Licinius Crassus が、制圧された彼らを Roma の支配に従属させた。ついで上 Moesia に Servi が、下に Bulgari が、侵入し (彼らはともに Asia の Sarmatia からの外来種族である)、そこに自分たちの名前の王国を二つ (前者は Servia、後者は Bulgaria) を建てた。最後に Turcae が両者に流れ込み、いまなお把持している。

Servia 王国の首邑 (かつては王の座であった) は Senderovia (Vngari 語で *Zendrevv*、Turcia 語で *Semender*) で Ister 河岸に位置する。さらに *Vinda*・*Bodo*・*Novograd* は著名な町である。なかでも Novograd は要害堅固・難攻不落の城ゆえに [知られる]。Bulgaria 王国の首邑は *Sophia* で、大きくかつ人口夥多な街である。

第17章 全 Scythia 誌梗概 さらに古代の Europa の Scythia について

Ister 彼岸で Moesi に接するのは、世界中で最も粗野な Scythae 族である。というのも、Asia の下 Moesia から Tabin 岬・Anian 海峡まで、長さ1000GM 以上の地を占めるからである。幅は北洋から Indus 源流の Caucasus 山地まで約60GM である。しかし Scythia 全体は Europaea と Asiatica とに分けられる。後者については、後に Asia 誌のなかでとし、ここでは先ず Europaea を説明する。

Europa の Scythia

Europa の Scythia は、東は Patissus 川、北は Patissus 源流から Amadoca 沼沢地（これは Lituania にある）を経て Borysthen 源流まで引かれた線、そしてさらに別に Pontus Euxinus から Tanais 淵源まで引かれた線、南は Ister、そこから Nicopolis まで曲げ、Pontus まで東西方向に引いた直線を境とする。

この地の全体は、さまざまな種族・人民によって区別される。それらのうちで最も有名なのは、下 Moesia に隣接する Troglodyta を別にすれば、Daci である。彼らの地方は、いまは Moldavi・Valachi・Transsilvani が占めている（Daci の地は Hungari のうちの Patissum 川・Transilvania 川の間の一部も含む）。Getae（先に述べたように、Moesia の Ister 兩岸および Dacia に広がる。いま Bulgi・Moldavi の一部である）。Tyra 川・Ister 川間の Tyrageae・Arpii（いま下 Moldavia の一部）。Tyra 川・Hypanis 川間に Carpiani・Callipides・Istrici・Axiaces・Iazyges Eneocadlae（これらのうち一つのみがいま Pololia）。Bastarnae（Peucini とも。その一部は Germania に、他の一部が Scythia Europaea にいる。いま小 Russia ないし Nigra である）。Borysthenitae（下 Lituania の、Pontus に面する一部）。Neuri（Borysthenis 源流近く）。Geloni・Thussageae・Budini・Agathyrisi（Borysthenis 源流・小 Tattaria 間の Moscovia）。Alani・Roxalani（Donetz すなわち小 Tanais 左岸近くの Moscovia にいる）。Hamaxobii ないし Hamaxobitae（小 Tattaria の Gerrhus 川源流近く）。Georgi・Nomades・Basilides・Tauroscythaе ないし Scythotauri（同じく小 Tattaria）。Tauri ないし Taurici（Taurica ないし Scythica Chersonesum に住む）。Bosphoranus の兩岸近くには Bosphorum Cimerium が住む。Iazyges Moeotae（Moeotis 沼沢地近く Tanais まで広がる）。Arimaspi・Essedones・Tanaitae（まさに Tanais 川に取り囲まれている）。

第18章 Dacia

未開・残忍・野蛮な Scythica 族である Daci は、要するに Ister 彼岸で Moesi に境を接する。Dacia 地方の境界は、北は Carpathicum 山脈・Hierasus 川、東は同じ Hierasusu 川・Ister 川、南は同じく Ister 川、西は Patissus、である。今日、Hungaria の一部、前述の Transilvania・Valachia・Moldavia ほぼ全域を含む。

かつて、Ripensis・Alpestre・内陸部に分かれていた。沿岸部は今日 Hungaria と呼ばれる部分を Valachia の一部とともに含む。その人民は Prendavesii・Burrhi・Cingesi。山地にはいま、Valachi の大部分と Moldavi とが住む。かつてその人民は Piephigi・Siginni・Sinsii・Contensii・Taiphali・Cacoensii・Cistoboci。内陸部（Gepidia とも）はいま、すべて Transsilvania である。かつてその人民は Potulatensii・Buridiensii・Biephi・Ratacensii・Taurisci。

かつて有名であった町は Vlpia Traiana で、以前は Zarmisogethusa と呼ばれた。いまは Varheli で、Valachia の同じ位置にある。

すこぶる有名な川：Marifus（Germania 語で *Marisch*、Hungaria 語で *Maros*）・Aluta（Germania 語で *die Alt*、Hungaria 語で *Olt*）。

Dacia の住民について

住民はもと Geta であったと Plinius[4.12.80]は言う。後に Romani によって Daci と呼ばれた。Geta の名前は、かつて呼ばれていたように、Ister 川兩岸付近で維持された。Traianus 帝が制圧した Dacia を属州に編成するまでは、自分たち自身の王によって統治されていた。その後 Sarmatae が侵入し、ついで Gothi が、まもなく Hunni が、[侵入した]。それらの後に Germanica 族である Saxones が Carolus 大帝に征服され、勝者の法を移すことができなかった（むしろ欲しなかった）ので、Dacia 全体に移した。それ以来いままなお習慣的に、劣化してはい

るものの、この地方では Germanicus の言葉が維持された。その後この種族 (Pannonia の一部を占居した) は Hungari の Saxones に自分たちを融合させた。そのため、いまや両種族の言語が混淆している。実にそこで、Dacia 全体は新しい名称に分割された。Patissus 川に結びつけられた部分は *Hungaria* の呼称で扱われる。もと Dacia 内陸部であったところは Transsilvania と呼ばれる。そこと Ister との間は Valachia, そこと Hierasum との間は Moldavia, Hierasus・Tyra 両川の間にあるものはいずれも、いまなおこの呼称が付けられる。

第19章 Transsilvania・Valachia・Moldavia 誌

Transsilvania

Transsilvania 大公国 [principatus] は、いたるところ森林で、そこからその Latin 名がつけられた。そして山脈に取り巻かれているので Hungaria 語で *Erdeli*, Germania 語で *Siebenburgen*, という。Saxoni には疑いもなく七つの町の数にちなんで呼ばれる。そのために、いまでも Sarmati すなわち Sclavi には、*Siedm grodska ziemia* (七つの陣営の地方) として想起される。後に Saxones は入植者を受け入れ、より洗練された生活を始めた。まことに彼らがここに建てた町で、現在有名なのは

Cibinium ないし Hermanopolis (俗に *Hermanstadt*。当地方の首邑である)・Alba Iulia (Germania 語で *Werssenburg*。Hungaria 語で *Gulafeirvvar*。上代には大公座であった)・Claudiopolis (Germania 語で *Clausenburg*, Hungaria 語で *Colosvvar*)・Bristicia (Germania 語で *Bistriz*, Hungaria 語で *Besterze*)・Sciburgium (Germania 語で *Schiesburg*, Hungaria 語で *Segesvvar*)・Mediesus (Germania 語で *Medvvisch*, Hungaria 語で *Megies*)・Stephanopolis ないしは Corona (Germania 語で *Croonstadt*, Hungaria 語で *Breslavv*)。

Valachia・Moldavia

この、今日 Valachia・Moldavia の名前で区別される二つの地方は、上代は Valachia という一つの呼称で把握されていた。住民にとっては *Woloska Zemla* (Valachia の地) で、種族自体 *Wolochy* であった。しかし当地方全体は大・小二つに分けられていた。大の方には後に Moldavia の名前がつけられた。小 Valachia の名称は維持された。その元首すなわち公 (Sarmaticae 族の言葉で *Wayvvodam* と呼ぶ) がそれを認めたのである。Poloni はかつてどちらでも貢納民であった。いまは、一部は Hungaria 王が、一部は Turcae 皇帝が把持する。Valachia の首邑かつ Vaivoda の座は *Targovvisko* である。その他の地点は *Brailovv*・*Dombrovitzza* である。Moldavia の首邑で Vaivoda の座は *Czukavv* で、その他の町は *Margosist*・*Tarsiko*・*Moncastro* である。

第20章 小 Tattaria。Taurica Chersonesus のところ

Tattari の名前は Asia・Europa を通して永く・広く拡散している。その境界については後に Asia 誌において述べる。いまはその一部 (Europa の Tattaria ないしは小 Tattaria と呼ばれる) について論ずる。

小 Tattaria すなわち Tattaria 王国の Praecopensium は Europa の Scythia の一部で、Borysthenes 川、Psola 川・Desna 川 (この2本は Borysthenes に注ぐ)、小 Tanais (俗に *Donez*) 川、Tanais 川本体、Maeotis 沼沢地、Pontus によって囲まれている。古代にこの地方にいかなる人民が住んでいたかは先に説明した。さらに、この地方の全ての岸辺は、引き続く Graeci の入植者と記録とによってよく知られている。まことに Taurica Chersonesus は些少なものではなく、Graecia 自身によって喧伝された。ここで Graeci の街のうち有名なのは Panticapaeum (いま俗に *Pontico*)・Cimmerium, Chersonesi 中央部では Taphros (いま *Przekop*)・Theodosia (いま *Kaffa*)。

全体として Scythae が把持していた。後に Tattari が、Asia から進発して占居し、*Tattaria* と呼ばれた。まさに Asia にいる大 Tattari と区別するために小という添え名が添えられている。

Praecopensis と Creimea とに分けられる。Praecopensis (Sarmati は *Przecopska* と呼ぶ) は Chersonesus Taurica そのもので、*Przekop* (Isthmus に造られた運河)、これに隣接する同名の町、にちなみ添え名がつけられた。Creimea (住民には *Krymska*) は、Chersonesus 以外の残りの部分で、*Krym* の町 (かつては *Cremnus*) にちなんで呼ばれる。そして皇帝の座が Chersonesus にあることから、小 Tattaria 全体を Praecopensis の Tattaria 王国と呼ぶ。その種族は未開・残虐・性急で、都市的ではなく、野や森を徘徊する。一人の王の支配に服する。その王宮は

Przekop である。

第21章 Europa の Sarmatia

Europa 最遠の種族は Sarmatae (Graeci は Sauromatae と呼んだ) である。全 Europa で最も広闊な地方に住んでおり、Europa の Scythia にまで延びている。のみならず。Asia でも Hyrcanum 海にまでその名は達せられている。

しかし Europa の Sarmatia の境界はかつては、西は Vistula 川・Suevicum 海・Finnicus 湾、およびこの湾から Granvicum 湾 (すなわち Albus 湖) まで延ばされた線、北は Sarmaticus 洋 (すなわち氷結した海)、東は Europa の境界と同じ、南は Maeotis 沼沢地、Taurica Chersonesus の Isthmus, Pontus, Ister, Hierasus, さらに Carpatice 山地 (そこでは Patissus・Ister 間に楔状に延びる)、であった。

その長さは、Ister・Patissus 合流点から Obi 河口まで540GM である。幅は Rha 川からいわゆる Granvicus 湾まで360である。

今日、Moldavia の一部 (Tyra・Ister・Hierasus 川の間)、Hungaria の一部 (Patissus・Ister の間)、Vistula 彼岸の Polonia 王国、Borussia, Livonia, Lituania, Russia Alba (Moscovia 大公[magnus dux]の支配圏)、小 Tattaria の一部 (Crema と呼ばれる部分) を含む。

Sarmatia 全体における人民のうち、Ptolemaeus[3.5.7～11]は幾つかの名前を挙げている。この地方が Romani にも Graeci にも同じようにほとんど知られていなかったために、それは不確実であった。しかしすこぶる有名で名高かったものは (Europa の Scythia のところで説明したものを除く) : Germani に隣接する Venedi (いま Livones), Vistula・Lituania・Podolia 間の Borussi・Poloni, Ister・Patissus 間の Iazyges (Ptolemaeus[3.7.1]はこれに Metanasta という添え名を付ける。すなわち Vagi である。Plinius[4.12.80]は Sarmatae だと断言する。Tabula itineraria は Sarmatae を Vagi とする)

第22章 Sarmatia の住民・川・山について さらに Hyperborei について

Graeci によって広く Sarmatae と呼ばれた種族は、性質・武器・生活習慣・思慮において Scythiae・Parthicae と似ているので、これらとその起源をともしると考えてよい。実際、彼ら自身によって *Russacy* と呼ばれ、Riphaeum 山地までの間に住み、Noachi の曾孫の子 Riphatus⁶⁾の子孫であるゆえに Mela[1.2.13]が Riphaces と呼んだものと同じであると考えられる。さらに彼ら自身の事績は、Sclavi の名のもとに認識され始める前には、古人の記録の中にほとんど見つけられない。

Sarmatia の川

Sarmatia の川は、Pontus に流入すると述べたものを除いて、Suevicum 海すなわち Codanus 湾を志向する : Chronus (俗に Germania 語および住民の語では *Mämel*, Poloni 語では *Niemen*), Venedicum 湾の Rubo (いま近在の住民には *der Riegisch Bodem*。Riga の近くで注ぐ。いま Poloni 語で *Divina*, Germania 語で *die Dune*), Moscovia の Turuntus (いま *Velikarzeka*), Chesinu (Clylipenum ないし Granvicum 湾に流入する。いま Russi の住民には *Lovvat*。そして相当の区間を通過した後、*Volchovv*)。

山

山々は Carpatas (いま *Krapak*。Polonia を Hungaria から引き離す)・Riphaei (Obii とも。Albus 湾から Obii 河口まで延びる。Russi すなわち Moschi には、いま *Veliki kameny poyas*。巨大な石の帯のことで、それが環状の帯であることを示す)。

Hyperborei

しかしながらここで、物語で喧伝された奇妙な種族である [Plinius 4.12.89]Hyperborei について古人が語って

いることを知るのは価値がある。彼らを、Europaに割り当てる者もいればAsiaに割り当てる者もいる。ほとんどの者がいずれかを採る。彼らは（もし存在したことを信ずるならば）北洋の海岸60°以北、AquiloとRiphaeus山地との彼方（そこからGraeciは彼らにその名前を要求した）、天極の星座の下にいた[Mela 3.5.36]。この地方は日当たりが良く、気候は好適で全て有害な空気がないために[Plinius 4.12.89]、まさに豊かなところである。世話人は、いかなる人間よりも正しくかつ永く、そして幸福に暮らしていた。というのは、常に快活に隠遁しているがゆえに幸せな彼らは、いかなる諍い・争い・病も知らず[Mela 3.5.36]、あらゆる者が均しく無邪気であることを誓っていた。湖畔の森が彼らにとって棲処であり、神の世話人は一人ずつ群れをなして毎日生木を捧げる。十分に生きない限りは死なない[Plinius 4.12.89]。それを生きるべき者は退屈さを受け入れ、進んで死を呼び寄せ、自ら死によって死の遅延を防いだ。美食に浸りきった老人たちは、贅沢と花冠とに囲まれて確かな断崖から真つ逆さまに捧げた[Mela 3.5.37]。そのような様式の埋葬を最も幸福である[Plinius 4.12.89]と考えていた。

第23章 Polonia王国・州・その臣民について

Poloniの王国（いま、広大な範囲の地を占める）は、初めは北の領土に封じ込められていた。というのも、Schvvibussen（Crossenに接する、最近隣のSilesiaの町）からLeucznam（最近隣のRussiaの町）までの東西間の最大の長さは90GMを越えていなかったからである。幅は、Vistula源流とMoscoviaの町Wongrovvまで、たかだか60Mであった。しかしその後、その称号にLituania・Russia Nigra（ないしRussia Minor）・Podolia・Volinia・Podelassia・Masovia・Prussia・Samogitia、およびLivoniaの大半、が加わった。

先に述べたように、初めSarmataeがこれら全て、さらに、Poloniaの一部（Germaniaの古代にはVistula周辺にのみ位置した部分）、を把持した。しかしGermania誌[第3巻第1章]で述べた（Tacitus [Germania 46]によって証明した）ように、Germanica族は初めからPrussia・Livoniaに住んでいた。それを今日まで絶えず保持した。まことに、小麦については全体的にすこぶる肥沃である、より荒涼たる森林が介在しなければ。

Polonia王国全体の境界は北はSuevicum海・Venedicus湾およびLivoniaの町PernaviaからDuna源流まで引かれた線、東はBorysthenesすなわちDnieper、南はTyrasすなわちNyesterおよびCarpates山、西はSilesia・Brandenburgica辺境伯領・Pomeraniaに続く。

この領土の全長は、前述のSchvvibussenとBorysthenesの岸に位置するCcyrcassyとの2町の間で200GMである。幅はLivoniaの町PernaviaとTranssilvaniaの北にあるCarpates山との間で150Mである。

[王国は]先に述べた地方・州に分けられている。それらを一つずつ説明していく。

第24章 厳密に言うPolonia

厳密に言うPoloniaは、住民によればPolskaで、それはPoloという言葉（Slavoniciの言語では野原を意味する）に由来し、選ぴとられた。全体が平坦かつ滑らかだからである。

大・小Poloniaに分かれる。大PoloniaはGermaniaと隣接する。小PoloniaはHungaria・Russiaと隣接する。いまはCracoviaの街が王国の首邑であるため、小Poloniaが重要性において上位にある。大Poloniaはもう一つと言われる。王国を区分したとき、創建者であるLechus族がそこに座を据えたからである。

大Polonia

首邑はPsenania（住民によればPosnan、Germania語ではPosen）で、傑出した街である。Poloniの洗練さに加えて市場の華麗さのゆえにすこぶる繁華である。次いでGnaesna（住民にはGnieszno、Germania語ではGniesen）で、定期市でよく知られ、Poloniaのなかで最も古い。大公[princeps]たちの最初の座であった。その他の町はCalisia（Ptolemaeus[2.11.13]によって記録されている。Polonia語でいまはKalisz）・Lancicia（Plotsko）・Petricovia（俗にPiotrkovv。iuridicus conventus（住民はtribunalと呼ぶ）のために極めてよく知られる）。

小Polonia

小Poloniaの第一等はCracovia（俗にKrakovv）で、王国全体の威厳ある首邑にして王宮の座である。宏壮・

巨大で、粗野ななかにあるが、それ自体は実に華美・壮大である。Ptoremaeus のいう Corrodunum であることは博学の士たちが推測しないことではない。Cracovia に次ぐのは Lublinum (俗に *Lublin*) である。傑出した優雅な街で、商業で支えられている。というのも定期市は王国中で最もよく知られているからである。第三は Sendomiria (Polonia 語で *Sendomierz*) である。

種族の最初の創建者 Lechus から Boleslaus Chabrius まで、大公が人民を支配した。Boleslaus は1000年頃、Roma 皇帝 Otho III によって初代の Polonia 王に封ぜられた。

第25章 Lituania・Russia・Podolia

Lituania (Polonia 語で *Litva*, Germania 語で *Littavven*) は、以前は自身の大公がいた。

1386年に Polonia 王に選ばれた Jagello が Lituania 大公位 [magnus ducatus] と Polonia 王位とを結合した。この地方は全王国のなかで最も荒涼として、森林のゆえに恐ろしく、沼沢地のゆえに耐えがたい[*Germania*, 5]。その最大の長さは Polota 川源流 (これは Livonia・Moscovia の隣接地にある) と Dassovv (Pontus 近傍の町) との間で260GM である。幅は Chronum・Borysthenem 両川間で80M である。

都市・街区・建築物に関しては、この地方は全く洗練されていない。首邑は Vilna (Germania 語で *Wilde*) で、膨大・浩瀚である。Cracovia の大きさに匹敵し、大部分木造の建築物でできている。より多くがここよりも、そして Novogradia (俗に *Novvigrad*) よりもさらに洗練されていない。同様に、Borysthenes 近くに位置する Kiovia (俗に *Kiiovv*) は有名でかつ巨大である。Dassovv は Pontus にほど近く、古代の Ordessus である。Kovvno (Germania 語では *Kavven*) は、葡萄酒 (俗に *medum* という) によって名高い町である。

Russia Nigra

この地方 [provincia] は、小 Polonia・Volinia・Lituania・Podolia・Moldavia・Transsilvania・Hungaria の間に位置する。大 Russia すなわち Russia Alba (Moscoviticum 帝国である) と区別するために、小 Russia すなわち Russia Nigra (Polonia 語では *Czarna Rusz*) と呼ばれる。住民は Latin 語では Russi および Rutheni と呼ばれる。彼らは Roxolani に起源があり、この名前を持つと考えられる。その、Caarpaticus と繋っている部分 (住民には *Podogorze*) は、山麓のように、貧しい。

以前、Russia には自らの公がいた。後に Polonia 王国に加えられた。

公領の首邑は Leopoldis (Polonia 語では *Lvvovv*, Germania 語では *Levvenburg* で、これは縮約されて *Lembrug* となる) である。市場は Turci の商品で繁華である。その他の町は *Przemyst*・*Halycz*・*Chelm*。

Podolia

Podolia (Polonia 語で *Podole*) は Moldavia・Russia Nigra・Volima・Lituania の間に位置する。広漠たる平野のため、人ができるだけ飼うべき家畜にとって都合が良い。家畜にとって驚くほど、恐るべき野牛の角がかろうじて草から見えるほどに繁茂するので喜ぶ。

この地方の首邑は Kamienijecz で、驚嘆・自失すべき思慮によって急峻な岩山に造られている。Tattari・Turci・Valachi によって極めてしばしば攻撃されたにもかかわらず、難攻不落であった。その他の地点は *Chmielnik*・*Tzudnovv*・*Bratzlavv*・*Orczakovv* (これは Tattari が占居し続けている)。

第26章 Volinia・Podelassia・Masovia・Samogitia

Volinia

Volinia (Polonia 語で *Wolin*) は Polonia・Lituania・Russia Nigra の間に延びる。優れた町としては *Lutzko*・*Wlodimirz*・*Krezemieniec* がある。

Podelassia

Podelassia (Polonia 語で *Podlasze*) は Lituania・Mosovia・Borussia 間に位置する。かつては Lituania の一部であったが、後に単独の州にされ、Polonia の称号に対して加えられた。比較的知られている地点は、*Bielsko・Tykoxijn・Augustovv* である。

Masovia

Masovia (Polonia 語では *Mazovvsze*, Germania 語では *die Masavv*) は Borussia・Polonia・Podelassia 間に位置する。以前はそれ自身の公がいた。その家系が絶えたため、1526年に公領は Polonia の称号に介入された。州の首邑は Varsavia (Polonia 語で *Warszavva*, Germania 語で *Warsavv*) で、ここで開くのを常としていた王国の集会場がよく知られる。

Livonia

Livonia (Germani の住民には *Liesland*) は、すこぶるよく知られ、またすこぶる有力な地方である。北は Finnicus 湾、東は Narva 川・Peybas 湖および大 Russia・Lituania の西境、南は Lituania の *Dodina* (Duina 河岸に位置する) から Borussia の町 *Memmel* に引かれた線、西は Suevicus 海、に画される。全長は Narva・*Memmel* 間で90M、幅は海と *Dodina* 間で60M である。四つの部分に分かれる。その名前は住民の言葉では *Esten・Letten・Curland・Semigallen* である。これらのうち、Esten は Suedica が支配する。他は Polonia に服属する。Danus 近くには *Oosel* 島がある。

街のなかで第一等は *Riga* で、著名な市場である。商業に関しては、Esteria の首邑 *Rivalia* (俗に *Revel*) が劣るものではない。第三は Dorpatum (俗に *Derpt*)・Veneda (俗に *Wenden*。Venedicus 湾に向かう。Teutonicus 騎士団総長の座でよく知られる)・Curlandia (上代、ある公領で Semigallia とともに有名であった。*Goldingen* の首邑である。ただし公の座は *Mitovv* である)。

Samogitia

Samogitia 公領は Livonia・Borussia 間に位置する。町・城・格別の建築物のいずれにおいても何ら注目すべきものはない。森林・恐るべき疎林のため、わずかに蜜蜂にのみ親しい (ここではそれをすこぶる大量に集めている)。

第27章 Borussia・Cassiibia について さらに Polonicus 王国の司教領・学園について

Prussia (俗に *Preussen*) は有力で著名な地方であり、河川・湖沼・沼沢地によって繰り返し灌漑されており、穀類に関してははなはだ豊穰である。古代の Borusci 族にちなむかのように誤って Borussia と呼んだ人がいる。Ptolemaeus[3.5.10]は Borusci 族を Moscovia の区域に置いていた。それがここに移動したと推量したのである。北は Codanus 湾・Chronus 川に洗われる。東は Lititvania・Podelassia、南は Masovia・Polonia、西は Cassubia、が境界となる。長さは、Chroniostium から Vistula 河岸の街 Toruntum まで45GM である。幅は、Podelassia の町 *Raigrod* から Vistula 河口まで、同距離である。

今日、Regala (王に直属する)・Ducale (Brandenburgicus 辺境伯に委ねられた封土)に分かれる。

Borussia 王領 [regalis]

Borussia 王領で最も有名な街は Gedanum (Dantiscum と同。俗に *Danzighe*) である。極めてよく知られる、Suevicus 海の市場である。市民は富裕で有力である。城壁・堀・堡壘によってすこぶる要害堅固である。これに次ぐのは Torunium (俗に *Thoorn*。かつて、Gedanum がその高みに達するまでは、繁華な市場であった。いまでも市間日 [nundinum] で極めて有名である)、Elbingium (俗に *Elbing*。ここで衣料の卸商を行う Angli の

助けにより、拔群の名声に日々成長している）である。

その他の比較的よく知られた町は *Mariaeburgum*（すこぶる堅固な城）・*Grudontia*・*Bromberga*・*Culmia*（かつては、すこぶる古くかつ有力な街であった）・*Braunsberga*（*Iesuita* の公的な学問所で知られる町である）

Borussia 公領 [ducalis]

Borussia 公領の首邑にして公の座は *Reguis* 山（俗に *Germania* 語で *Koningsberg*, *Polonia* 語で *Krolewiec*）で、海産物によりよく知られ繁華な市場である。さらに北に向けて最果てには、堅固な城である *Memel* がある。

Cassubia

Cassubia 公国は *Borussia*・*Pomerania* の間に位置する。かつては現在よりも広がっていた。というのは、現在 *Vistula Pomerellia* と呼ばれる、*Borussia* の一部分は、以前は *Cassubia* 公に服していたからである。

いま *Cassubia* と公言されている地方の首邑は *Conicia*（*Polonia* 語すなわち住民である *Cassubi* の語で *Chonitza*, *Germania* 語で *Konitz*）である。その他の町は *Slochovv*・*Butovv*・*Lavenburg* である。

Polonia 王国の司教領・学園

大司教領は王国全体に 3 : *Gnaesnensis*・*Leopolitanus*・*Rigensis*。司教領は 16。学園は 2 : *Cracoviensis*・*Regiomontana*。

第28章 *Moscovia* すなわち *Russia Alba* 大公国

Europa の最後の地方は *Russia Alba* すなわち *Russia Major* である。全てのなかで最も広漠、手も入らず、沼沢・森林のために近寄りがたい。その首邑 *Moscovia* についても同様である。種族も粗野で不誠実、奴隷は度外れた借金奴隷、いま俗には *Moscoviatae* という名前で呼ばれている。

この地方の境界は、北は氷結海、東は *Europ* の境界と同じ（すなわち *Obius* 川・*Tanais* 川）、南は小 *Tanais*（俗に *Donez*）・*Desna*・*Psola*、西は *Borysthenes*・*Narva* の両源流の間に引かれた線、である。

全長は *Litamin* 岬（俗に *Capo Oby*）と *Psola* 合流点とから *Czerkassy* の町まで優に 380GM ある。幅は *Finlandia* 境にある *Corelenburg* の町と *Obius* 川近くの *Lepin* との間で 300GM である。

幾つかの公領・州に分かれ、その多くは首位の街にちなんで名づけられている。

公領のうち第一等は *Moscovia*（住民には *Moskavv*）である。その他：*Wolodimir*・*Mosaysko*・*Tvver*・*Ruszovva*・*Nissy Novvograd*（すなわち下 *Novogardia*）・*Zezen*・*Wortin*・*Smolensko*・*Biela*・*Pleskovv*・*Weliki Novvograd*（すなわち大 *Novogardia*）・*Bielejezero*・*Iaroslavv*・*Svviera*。

大公領 [principatus] : *Rostovv*・*Suldal*。

州 : *Wolska*・*Corella*・*Wologda*・*Vstiug*・*Dvvina*・*Wiatka*・*Iuhora*・*Petzora*・*Condora*・*Permen*・*Czeremyssi gorni*・*Czeremyssi lugovvi*・*Mordvva*・*Kargapole*・*Meschora*。

Moscovia の街々

この地方の街は、全て木造土塗りの建築物でできている。広大ではあるもののその広い街路には常に空き地が混じる。

帝国の首邑は *Moskvva* である。度外れた街で信用は大きい。40～50万の建物を含む。大公（住民は *Czar* すなわち皇帝と呼ぶ）の城がその中にある。2万人を容れうる邸宅である。衛兵が大公のためにそれを不断に守る。

その他の街はほぼ同様であり、それぞれの公領・州の名前についても同じである。そのうち、*Wolodimir* はかつて帝国の首邑であった。*Vstiug* は全 *Russia* の内陸市場で最も繁華である。海岸の市場としては *S. Nicolai*・*S. Michaelis*（*Archangelus* の町で、*Belgi*・*Angli*・*Germanici*・*Suevici* の諸海近くの人々によって雑踏する）。湖に建てられた *Bielejezero* には、差し迫る戦争のために大公が倉庫を隠した。

Moscovia 大公の支配にはさらに、Asia 系の部族である Tattari のあるものが従属している。彼らについては後に Asia 誌のなかで [述べる。第 5 巻第 4 章]。

第 5 巻

第 1 章 Asia 誌梗概

Europa の部分が全て完了したので、いまや、Tanais を越えて、Asia に取りかかる時である。というのも、Asia は Europa に結び合わされ基底において束ねられているからであり、Asia 系の Scythae 族が Europa において最も有力な地区にまで延びている一方、Europa の種族である Sarmatae が Asia のなかに最遠の領土（決して小さな区域）を広げているからである。

Asia の地自体、初めは全てのなかで最も優れていた。人類の最初の家系を自らの内に認め、そして世界の他の部分に行かせたからである。一族の最初の者は生活のための儀式・聖なるもの・規則・思慮を他者に教えた。要するに、人々にまさに神を心象としてもたらしめた。

Graeci のうちには、Nympha の Asia (Oceanus と Tethyos の娘で Iapetus と結ばれた) にちなむ、と考える者があり、また Lydi の Maneus の息子 Asius にちなむと考える者もいる [ともにヘロドトス 4.45]。

境域は、北は Scythicus 洋、東は Eoum 海、南は Indicum 洋(すなわち Rubrum 海)、西は Arabicus 湾・Isthmus (これは、Arabicum 湾と内海と、さらに Phoenicum・Aegaeum・Propontus・Pontus・Maeotis 湖・Tanais 川・Obius 川の間にある) である。

その全長は、Hellespontus・Malacca (India 最遠の市場) 間で 1300GM である。幅は、Arabia 湾口・Tabin 岬 (Anian 海峡近くにある) 間で 1220M である。

かつて全体は大・小に分かれていた。大 Asia に含まれる地方は Sarmatia Asiatica・Scythia Asiatica・Serica・Sinae・Indiae、Indiae 近傍の島々、一方大陸には Gedrosia・Carmania・Drangiana・Arachosia・Sogdiana・Paropamisiss・Bactriana・Hyrcania・Margiana・Parthia・Persis・Susiana・Media・Albania・Iberia・Colchis・Armenia・Mesopotamia・Assyria・Babylonia・Arabia・Syria・Plaestina・Phoenice・Cilicia・Pamphylia・Lycia・Cyprus 島。小 Asia には Phrygia・Mysia・Lydia・Caria・Aeolis・Ionia・Doris・Rhodus 島。

そして今日、全 Asia は五つの主要部分に分けられる。それらは I Tattaria, II China, III Indiae (そのもとに島嶼が付属する), IV Persa (すなわち Soporos) 帝国 (そのもとに特異な Armuzia 王国が含まれる), V Turci 帝国。

第 2 章 Asia の Scythia・Asia の Sarmatia さらに Serica・Sogdiana

かくして Tanais の先、Asia の初めは Scythia である。その種族は Scythae で、Persae は彼らを、近隣の種族にちなんで Saca と呼んだ。古人は Arimei と言った。Europa の Ister 河口まで広がることは、先に述べた (そこでは彼らの境界についてまで説明した)。

Scythia Asiatica の境界は、西は Asia・Europa の境界に同じ、北は Tabin にいたるまでの Scythicum 海 (すなわち氷結海)、東は Eoum・Auxatii Casii 山地 (それらによって Serica (今日の Cataja 王国) から分離される)・Ottorocora 山 (これによって Sinis すなわち Chinensis から区分される)、南は Emodi 山地 (これらによって India から)・Sagdia・Oxia 山脈 (これらによって Persa の支配から引き離される)・Caspium 海・Caucasus 山 (これによって Albania から)・Coracem (これによって Iberia・Colchide から分けられる)。

その長さ・幅が著しいことは Europa で述べた。今日では Cataia 王国 (これはかつて Seres 人民が把持した) を除いたとしても、Tattaria Asiaca の名前の全て、Zagaia の一部 (Sogdii という名前よりも Ocrage という名前において) を包含する。Sarmatia Asiatica、Imaus 山中の Scythia、Imaus 山外の Scythia、に分かれる。

Asia の Sarmatia

Sarmatia Asiatica の地方は、Tanais 川・Rha (すなわち Volga) 川・Hyrcanum 海・Ponticus 海・Corace 山・Caucasus 山に囲まれる。いまは Tattari Czerkassi がこの地を把持する。

その地の人民は古代の地理学者が無数に列挙している。Turcae（すなわち Turcicus 帝国を建てた Turci）は有名である。その他に、Amazonum 女族は全ての中で最も有名である。

Imaus 山中の Scythia および Imaus 山外の Scythia

その他の Scythia Asiatica は二つの部分に分かれる。そのうち、西に面するものは Imaus 山中の Scythia、東に面するものは Imaus 山外の Scythia、と呼ばれる。

Imaus 山中の Scythia では人民は、なによりも Sassones であった（Germania の Saxones はここから生じたとからかう者がいる）。そして Saca 族（いま *Turckestan*・*Tagalistan*）が India との境に多い。またここで、全ての Scythae のなかで最もよく知られているのは Massagetae である。

川

Scyutaia の全ての川のなかで有名なのは Obius・Paropamisus（その近傍にいま Camul がある）でともに北海に向かう、Hyrcanum 海に注ぐのは Iaxartes（いま Chesel）・Rha（いま *Volga* ないし *Volha*）・*Edel* である。

Imaus

山のなかで最も大きくかつ有名なのは Imaus である。その北部はいま *Alkai* と名づけられている。そこは、Tattariae の陵墓地である。そして India との境の Gangis 川源流まで450GM の長さで延びる。

Serica・Sogdiana

Tattaria の末端は Eoum 海の一部に近い。それは Citaiae 王国と呼ばれる。かつては Serica 地方で、すこぶる有名な Seres 族が住んでいた。その母市 Sera は今なお同じ名前で存在する、と主張する者もいる。

Sogdiana 地方も Oxus 右岸と Sogdius 山との間に位置する。これはかつての Persicus 帝国であり、いまは Ocrage の名のもとに Tattaria の一部である。

第3章 Tattaria 誌梗概

今日、Tattariae の名前は全 Asia で最も有力であり、かつての Scythici のように Europa にも広がっている（ここでは、上記〔第4巻第20章〕のように小 Tattaria）。その種族は未開・非道・残虐で風俗は粗野、あらゆる蛮族のなかで最も野蛮である。この地方は大部分、人手が入らず不快・不毛で荒れ果てている。名前は *Tattar* 川から承けている（この川は *Mongul* 地方を潤し北海に注ぐ）。

全体の長さは Borysthenes 河口から *Tabin* 岬まで約1000GM である。幅は、Obius 河口から India・Sina に隣接する *Bramas* 王国の境まで600M である。

先に説明したように、全体は Asiatica と Europaea とに分かれる。

Asiatica は五つの主要部に分かれる。その名前は荒蕪 [deserta] Tattaria・Tattaria *Zagataia*・*Turckestan* 王国・Catani 大帝 [magnus Imperiator] 支配地 [imperium]・古 Tattaria。

第4章 荒蕪 Tattaria・Zagataia・Turckestan

荒蕪 Tattaria は、Tanais 川・Volga 川・Iaxartem 川・Tapyrus 山・Sebyos 山・Imaum 山の間に位置し、Sarmatiae Asiaticae の一部、Imaum 山中の Scythiae の主要部分、を包含する。幾つかの horda に区分される。そのうちの傑出したものは Zavolhensis（これは Bulgari Tattari horda でもある）・Casanensis・Nohaigensis・Tumensis・Schibanskensis・Cosakensis・Astracanensis（これはかつて固有の王国であった）・Baskirdensis。これらの多くは街にちなんで名前がつけられている。

それらの住民は、他の全てとともにかつて自由であったが、いまは Moscovita の命に従っている（Tumensis

を除く。これは大 Chanus Catainus に服する)。

Zavolhensis horda はかつて大 [magna] と言われていた。他のものはここから先祖が出たからである。そこでいまなおその皇帝は *Vluchan* (すなわち大君主 [Magnus Dominus] ないし大元首 [Magunus Imperator]) と呼ばれる。

Astracanensis 王国の首邑は *Astracan* ないし *Citrachan* の街で、Volga 河口近くにある。塩壺および市場で有名である。それを目的として、Moscovia・Turcici 帝国・Armenii・Persis から無数の商人が雲集する。

さらに、荒蕪 Tattaria では Tanais・Volga 間に *Czyrkassi*, *Asiatica Sarmatia* において大洋に向かう Imaum 山中の Scythia では *Mecriti*・*Samoiedi* (Latin 語で言えば、自身を浪費する者、である) がいる。同じ地区には他に、*Molgomsai*・*Badai* はともに太陽を、すなわち高い位置にある赤い布ぎれを、崇拝している。さらに Obius 右岸のほぼ中流域に、広大な点でも住民の多さの点でも巨大な *Grusiina* がある。Tattari・Moscovitici の貿易商によって雑踏する市場である。

Tattari Zagatai

荒蕪 Tattari の南に Tattari *Zagatai* が接する。農地・町・風俗の点で、他よりも洗練されかつ優れている。その境域は、北は *Iaxartes* 川、東は *Turkestan* 王国、南は *Persicum* 帝国、西は *Hyrceanum* 海である。

この地方の首邑にして王の座は *Samarcanda* である。すこぶる好戦的な Tattari 皇帝 *Tamburlaine* によって極めて有名である。街は大きく、石で築かれている。人口は多くない。Oxis 河口に近い *Zabaspa* および内陸の *Bikent* は有名な市場である。India 王国・Cataia 王国の住民が取引のために集まる。

Turkestan 王国

東に隣接するのは *Turkestan* 王国 (古代の *Saca* 地方) である。その住民は十分に市民的でかつ洗練されている。街のなかで最もよく知られているのは *Taskent*・*Cotam*・*Cascar*・*Iarkem*。

第5章 Catai の大 Chanis の帝国 さらに古代の Tattaria

Tattari 帝国の間で最も有力なのは、*Cataja*・*Tangut*・*Tainfu* 諸王国、*Tenduc*・*Camul*・*Ciarcia*・*Carakitay* (すなわち *Nigra Cataja*)・*Teber* 諸州、にわたる大 Chanis の [帝国] である。その初めは荒蕪 Tattaria の境にある *Norussi* 山地からで、*Tabin* 岬・*Anian* 川まで約600GM に亘って延びている。古代の *Serica*、Imaum 山外 Scythia の大部分、Imaum 山中 Scythia の一部分、を占める。

Cataja 王国

Serica はまさに、いまの *Cataja* (俗に *Kitay*) 王国である。住民のかくも稠密なること、手入れされた農地はかくも肥沃、都市の壮麗なること、建築物の光彩陸離、要するにあらゆる種類の富にかくも満ちていること、古代の *Graecia*・*Italia* に譲るものではないほどである。

すこぶる有力な街は *Cambalu* で、王の座にして大 Chanis の帝国全体の首邑である。周囲は5 GM、多くの城門に続く12の郊外地区がそれを取り巻く [Polo 85⁷⁾]。Indi・Sinenses の商人で雑踏する市場である。

Caindu はすこぶる精巧な織物 (それは樹皮から女性の技術によって作り出される) によってはなはだ有名である。かつて *Serica* はこれによってよく知られていた。そこで *Plinius*[6.20.54]は、「水に浸してほぐした葉の白 [い葉脈?] をつぐむことでよく知られる」と述べる。

Tangut 王国では1000年より前に活版印刷の技術が発明されたということを少なからざる人々が断言している。

Tenduc 州は、宏大かつ有力で、かつて *Presbyter Ioannes* 王 (この名前はのちに誤解によって *Africa* の *Abbissii* 王に当てられた) の王国であった [Polo 74]。

Tainfu 王国は強力で洗練され、ブドウが多産で、職人・貿易商であふれ、*Tattaria* の工場では武具がすこぶるよく知られている [Polo 107]。実際 *Plinius*[34.41.145]は *Serica* の鉄に最高の榮譽を認めている。

古 Tattaria

Tattaria 全体の最後の部分は古代 Tattaria である。Paropamisus 川・Serica（すなわち Citajae 王国）の間に、北洋・Ania 川まで延びる。

古 Tattaria と呼ばれるのは、先に説明したように、ここから Tattari の名前が起ったからである。それが含む州・horda は、ほとんど知られていないか確かではない。Vng 地方・Mongul 地方、Gog・Magog を博学の士は挙げる [Polo 74]。

第6章 Sina の諸地方すなわち China について

Tattaria に東でつながるのは China 王国である。気候の温和さ、土壌の肥沃さ、資力の大きさ、勢力、の点でいかなる他者にも譲らない。種族自体（信じてよければ）、その資質において他の全てを凌駕する。Ptolemaeus [7.3.1]のいわゆる Sina であることは、位置からも語自体からも証明される。というのも、Hispania 語で *China*, Tusci の Italia 語で *Cina*, Germania 語で *Tschina* と書かれていることからして、*China* と *Sina* との間には発音上の違いはほとんど認められまい。そして Ch [という綴り] における Hispania 語の発音に無知な者は、Graecia 文字の χ の発音を別 [Hispania] の国民の語彙に適用するからである。その境界は、東は Damasii 山地（India と Tattaria とを分かつ）、北は Ottorocoras と 300GM の防壁（Tattari の侵入に対して石で築かれている）と、西は Sinensis（すなわち Eoum）洋、南は同じ大洋および Sian 王国、である。全長は、Tattari が Eoum 海に接するところから Sian 王国まで 600GM、幅は Damasias 山脈と大洋間とで 300M である。

王国全体は若干の州に分かれる（彼らはそれを *praefectura* [管区] と呼ぶ）。そのうち沿海のものは *Cantan*・*Foquiem*・*Chiqueam*・*Nanquij*・*Xantum*・*Paquin*, 内陸のものは *Xiamsii*・*Cansii*・*Sancii*・*Suchnam*・*Huanum*・*Iuana*・*Fuquam*・*Suinam*・*Quicheu*・*Quiancy*・*Cochinchina*・*Quancy*。

王国全体を通して繁華な街は 240 あり堀と城壁とによって完璧に要害堅固である、街のほかに無数の地区 [pagus] がある、と言われる。しかし規模に関しては、比較的小さな一つ *Cantan* が周囲 3 GM 以上であると言われることから推定される。

王宮に関してはさまざまな著述家の記録がある。それを *Paquin* と呼ぶ者もあり、*Xantum* と呼ぶ者もいる（彼らはそれを *Quinsai* と同じであると考えている）。Tattaria の境域では、北に向けて位置することに皆が同意している。以前は *Nanquin*（広大な街で、王国の中央に、大洋に面して位置する）が王宮であった。*Quinsai*（かの Tattari の大 Chanis すなわち Sina 王の王宮。どちらもそう言われている）の街について、当然にもすこぶる先を読んで、その信頼を捨て去ったのである。Venetus の M. Polus[®] がこう述べた。それは確かに周囲約 100 Italia M（すなわち 25GM）、その内部に石造の橋が 12000、そのうちのあるものは、巨船が帆柱を直立させたまま下を通過できるほどに高い、と。さらに、城壁内部には蛇行して約 7 GM になる湖がありそこには二つの島が一つの王宮をすこぶる傲然たる作事によって支えている、街全体にわたって兵 3 万の守備隊がいる、と。真実ではあるがこの街は、Marcus Polus の時代より後に戦争のために引き裂かれた、あるいは他の重大な災厄によって破壊された、と考える者がいる。

Iapan 島

Sina 王国の東に無数の島が横たわる。二つが比較的注目される。*Corea*（住民には *Caoli*）は、長さ 230GM、幅 50。さらによく知られている *Iapan* は長さ 150M、幅 70。いずれも、幾つかの権力 [ditiones]（国王よりも豪族 [reguli] がそれらを実際に把持する）に分かれている。しかし全島の都市のそれら元首のうちでより有力な王が *Meaci* である。

第7章 古代の India

Sina 王国に西・南で接するのが India である。全てのなかで最もよく知られた地である。金銀のいずれか一つが存在すると古人が信じたほどに金銀に富む。

その名前は、すこぶる有名な Indus 川から承けている。西は Indus、北は Emodi 山地、東は同様に Damasii・

Meandrus 山地、南は Indicum と名づけられている海（巨大な湾で、あたかも 2 本の角のようにすこぶる長く延びた [India を] 受ける）に囲まれている。

その全長は Indus 源流から最遠の黄金の Chersonesis 岬まで約 600GM、最大幅は Sinae・Tattari 境の Damasis 山脈から Simylla 岬（いま *C. Comori*）まで 450M である。

かつては Ganges 川によって二つに分かれていた。その一方は大洋に面して Ganzes 内 India、他方は東に面して Ganges 外 India、と呼ばれていた。

古代の地理学者の言では、India には 9000 の人民がおり、そのうち最も有名なのは Brachmanes（India の哲学者で、Graeci は Gymnosophitae と呼ぶ）・Gangaridae（そのすこぶる有力な王は Alexsander 大王があえて捕らええなかった）。

同じ著者たちは、街は主なものを挙げても 5000 ある、と伝える。その全てのなかで最も有名なのは Nysa で、そこでは種族のうち Liberi の一部を Indi と考えている。

川

川のうち最もよく知られているのは Indus・Ganges である。Indus は、かつて近在の者は Sandus と呼んでいたが、いまはさまざまな者がさまざまな名前（Hynd・Duil・Inder・Caerrcedde）で呼んでいる。Paropamisus 山中で湧出し、ついで 20 の川を受ける。しかし最も有名なのは Hydaspes と Hypasin とである（Alexander の進軍はそこで終わった）。50 スタディアをより広く 15 歩より深いところはない。七つの河口で海に注ぐ。Ganges は宝石・金に富み、Scythia の山から流れ出る。その幅は最も狭いところで 2 GM、最も広いところで 5、最も浅いところでも 100 歩を呑み込む。

住民について

India の種族は最も古く、誕生以来唯一滅んだことがない。それゆえ、人間であれ都市であれその多さには誰も驚くべきではない。Liber pater（彼らは彼を、自分たちのところで生まれたと考えている）は軍とともに初めに India に入った。全てのなかで初めに征服された Indi に対して凱旋式を行った。ここから、Indus・Ganges 間の、武力によって占領した Persa の最近隣部分を把持した。その後、Darius を打倒した Alexander が Indi の王 Porus を打ち負かした。それからは彼ら自身の王に従属して、平和にすぎた。その後、久しく知られずにいたものの、結局前世紀に Portugallensi に再び認知された。この地方が遠隔であることは、説話に対して好機を呈した。重要な著作家たちが昔話からさまざまに不思議な人間の心象を想像したように。

第 8 章 India 新誌梗概

先立つ諸世紀には、介在する人民の粗暴さのゆえに India の地に入りえなかったもので、海洋航行についてまだ確実ではなかったかくも長期間、古文書によって知られたのを別にして、久しく Europaei に知られずにいた。そして Portugallensis の Guasco Gama が 1497 年に Hispania の利益のために Bonae Spei 岬を克服し Africa 全体を周航することで India 海岸に達した。この後同人が他者のためにうまく試み、また直後に他者が派遣されて Portugallia 王のために、武力で占拠した海岸地帯に城・堡壘で防備を整えた。この時、さまざまな国の種族が India に居住していることが分かった：Hebraei・Persae・Scythae・Arabae・Indi。これらのうち、後には僅かな部分のみが、キリスト教に忠実に D. Thomas の指示に（かつてのように）留まった。Portugallenses・Hispani はこの航海を、先年来 Hollandi によっても繰り返されるようになるまで、久しく Portugallia・Hispania 王の副王のために Indi における協定として独り維持した。

India は昔と変わらぬ境界に今なお囲まれている。そして実際、Indus 川此岸の人民の一部が昔と同じく今なお Indi と呼ばれている。

昔と同じく今なお Ganges 川によって二つに分かれる。一つは Indostan（かつての Ganges 内 India）、もう一つは Mangi（Ganges 外 India）、である。王国全体は一体であると言われる。47 の城（そのうちの幾つかはあまりにも些少である）によって領土全体は固められている。

最近の地理学者たちは India 全体を九つの有力な部分すなわち地方に区分する。それらの名前は Cambaia・

Narsinga・*Malabar*・*Orixa*・*Bengala*・*Pegu*・*Sian*・*Camboia*, および北部地方（これは事実上、全体のうちの第三の部分である）。

第9章 *Cambaia*・*Narsinga*・*Malabar*・*Orixa*

Cambaia 王国は、*Indus* 河口に近い右の *India* 岬 [*cornu*] に位置する。長さは約160GM, 幅はほぼ同じ距離, を占める。

街のなかで第一等は *Cambaia*（王国に名前を与えている）で、全 *India* のなかで洗練されている点また富裕な点で最も卓越する。そのため *India* の *Cairum* と呼ばれる。王宮の座は *Campanel* で、七重の城壁で囲まれている。*Goa* は *Indus* の島に位置し、市場の繁華なこと、農地の肥沃なこと、住民の夥多なること、建築物の壮麗なこと、で際立つ街である。城の堅固さ、立地の状況のゆえに王国の鍵と呼ばれる。

同じ島の *Dio* 城、および本土にあるもう一つの *Damaom* 城は、*Hispania* の守備兵によって守られている。

Beder・*Decan* の街も繁華である。後者はかつて王国に名前を与えた。*Indus* 此岸の *Guzarate* 州（これは *Cambaia* 王国の一部である）で傑出した街は *Ardavat* で、*Indus* 河岸近くにある。

Narsinga

同じ右の岬に位置する *Narsinga* は、東西両側面を海に洗われる。その長さは、*Cambaia*・*Orixa* の境から *Comori* 岬まで約150GM に及ぶ。全幅は両海の間90M である。

王宮は二つ：*Narsinga*（王国の名前はここから採られた）・*Bisnagar*。

Onor・*Batecala*・*Mangalor* は *Lusitania* の支配するところである。*Colmandel*・*Maliapor* は *Indi* のキリスト教徒が居住する（後者は *D.Thomas* の墓所で有名である）。

Malabar

Malabar 地方は、前述岬の最末端に位置する。長さ80, 幅40GM である。それぞれに町にちなんで名づけられた王国を包含する：*Cananor*・*Calicut*・*Coulete*・*Cranganor*・*Cockin*・*Coulam*・*Tranvacor*。これらのうち *Calicut* は気候の点で他を凌ぐ。その王は住民によって *Samory* すなわち最上皇帝・地上の神と呼ばれる。*Calicut* の街も著名であるが、建築物は低い。

この地方に *Lusitani* は三つの城をもつ。

Orixa

Orixa 王国は *Gangeticus* 湾で *Narsinga*・*Bengala* 両王国の間に延びる。首邑は *Orixa* の街で、王宮は *Ramana* である。

第10章 *Bengala*・*Pegu*・*Sian*・*Camboia*・北 *India*

Bengala 王国は、*Bengala* の町（*Ganges* とは別の河口近くにある）にちなんで呼ばれる。長さは150, 幅は170 GM, である。

Bengala の街は宏大で、すこぶる繁華な市場でよく知られる。*Cosmin* 川の洲に位置する。

Pegu

この王国の王宮は *Pegu* の街（上記の洲にある）である。城壁の要害堅固なこと、すこぶる優美に装飾された建築物、のために全 *India* で最も有名でである。

Pegu 王その他の王権に従属するもののうち、北に面する *Ava* は、宝石・馬・象に富む。

Sian

Sian はすこぶる有力な王国である。その長さは300, 幅は160M である。すぐれた街としては *Sian* (まことに宏大な王宮がある)・*Malacca* (Chersonesus のハミに位置する。すこぶるよく知られた香料市場である。周囲 4 GM とされる)。

Camboia

この王国の首邑は *Camboia* である。王宮の座は *Diam* で, *Odia* という者もある。

北部 India

北部 India (その地全体について述べる) はかつてさまざまな王国に分かれていた。いまは Tattaria から出た Tattari がここまで来たって占居している。彼らは Mogores と呼ばれる。その王は大 Mogor, その王宮は *Delly*, *Cambaia*・*Narsnga* 王国と境を接する。この王の下で有名は街は *Mandao*・*Sanga*・*Moltan*・*Citor*・*Aracan*。それぞれ王国の首邑である。

第11章 Indicum 海の島

Indicum 海の島は容易に数えようとすることも, したがってより卓越した一つを挙げることも, できぬほどに多い。

第一等は, 東洋 [Oriens] 全てで最もよく知られている, *Sumatra* で, 幾つかの王国に分かれている。第二は *Borneo*, 第三は大 *Iava* で, その大きさはまだ明らかではない。それについて I. Caesar Scaliger は, あらゆる物が容易かつ潤沢に産み出されることから, 世界の儲けと呼んでいる。そこで最も繁華な市場は *Bantam* である。

続いて: *Celebes*・*Gilolo*・*Ceiram* (Ptolemaeus[7.2.27?]はこれを *Sinda* と考えている)。これらの間に *Moluccae* が散在する。些小な, しかし香料生産には恵まれていることでよく知られるものは *Bachian*・*Tidor*・*Ternate*・*Motir*・*Machian*。さらに *Sina* 王国に近い *Philippinae* がある。Ptolemaeus[7.2.28?]ではこれを *Barussa* と見ている。その最大ものは *Lutzon* で, *Hispani* はそこに *Manillia* の街を建設した。次は *Mindana*, 第三は *Calamianes*, その他のより小さなものは, これらの間に散らばっている。ここから東に向かって別の島が若干存在し, *Hispani* は一括して *Islas de las Velas* と呼ぶ。またここから南に向かい 40GM 離れて新 *Guinea* がある。これが, 島であるのか, 実は *Australis* の地に繋った部分であるのか, は十分に確かなものを我々はまだ有していない。*Gangeticum* 湾には *Narsingae* 王国に面して *Ceylon* がある。9 王国が分立する。古人は *Taprobana* と呼んだ。

第12章 Persa 帝国について

Persa 王国は昔, *Asia* における, 先に説明した地を除いた残りの全てと, いまでも *India* の一部,

Aegyptum (昔は *Asia* に数えられていた), を占めた。長さは *Hellepontus* からはるか *Indus* 河口まで 700GM, 幅は *Pontus* から *Arabicus* 湾口まで 500, その広がりには多くの地方・王国が含まれる。それらについて順に論じていかねばならない。最初に, いま *Persae* すなわち *Sophi* 帝国と呼ばれる部分について語る。それは, 北は *Hyrcanus* すなわち *Caspian* 海・*Oxus* 川・*Caucasus* 山, 東は *Indus*, 南は *Persicus* 湾・*Persicum* 海, 西は *Euphrates*・*Tigris* 川 (後者は前者に流入する)・*Niphatici* 山脈・*Araxes* 川 (これは *Hyrcanum* 海に注ぐ), に囲まれている。その長さは *Araxes* 河口から *Indus* 河口まで 460M, 幅は *Oxus* 河口から *Persicum* 海まで 270, である。

それのかつての地方は *Gedrosia*・*Carmania*・*Drangiana*・*Arachosia*・*Paropamisis*・*Bactriana*・*Margiana*・*Hyrcania*・*Aria*・*Parthia*・*Persis*・*Susiana*・*Assyria*・*Media*。

第13章 Gedrosia・Carmania・Drangiana・Arachosia・Paropamisis・Bactriana・Margiana・Hyrcania・Aria・Parthia

Gedrosia

Gedrosia（いま *Khesimur*・*Guzarate*）の人民は Orbitae・Parsiae・Musarnaei・Rhamnae であった。地方は Paradene・Parisene。よく知られた川は Arbis ないし Arabis。名高い街は Parsis（この地方の首邑）・Arbis・Cuni。

Carmania

古人のいう Carmania 地方はいまの *Kirman*・*Goadel*・*Ormuz* の諸王国である。その人民はかつて Isatichae・Zuthi・Gadanopydres・Camelobosci（Sozotae と呼ばれていた）・Agdenites・Rhudiana・Aes・Charadrae・Pasargadae・Armozaei。地方は Modomastice・Parepaphitis・Cabagina・Chantonice。川は Samydaces, 山は Semiramidis。街は Carmana・Samydace・Alexandria・Armusa。

Drangiana

Drangiana（いま *Sigestan*）の人民は Darandae・Batrii。地方は Tatacen。街は名高い Ariaspe・Prophthasia。

Arachosia

Arachosia（いま *Candahor*）の人民は Pargyetae（以前は Arimaspi, 後に Euergetae と呼ばれた）・Sydri・Roplutae・Eortae。街は Arachotus・Alexandria。

Paropamisis

Paropamisis（いま *Sablestan*）の人民は Bolitae・Aristophyli・Ambantae・Parietae・Parsii。有名な街は Carura（Ortospana と）・Naulibis。

Bactriana

Bactriana はいま *Corasan* という。人民はかつて Salatarae・Zariaspa・Chomari・Comi・Acinacae・Tambyzi・Thocari 大族・Maricai・Scordi・Varni・Savadii・Orsiti・Amarispi。二つの王宮の街は Bactra・Ebusmi, 有名な街は Maracanda・Charracharta。

Margiana

Margiana（いま *Elsabar*）の人民は Derbicae・Massagetae（Scythia からここに移った）・Parni・Daae・Tapuri。すこぶる有名な街は Antiochia・Margiana（初め Alexandria といった。後の Seleucia にはかならない）。

Hyrcania

Hyrcania（これによって近在の海が Hyrcanum と呼ばれる）の人民は Maxerae・Astabeni・Chrindi。地方は Arsitis。この地方の首邑は Hyrcana, ついで Amarus。

Aria

Aria（いま *Diargument*）の人民は Nisaei・Astaveni・Musdorani・Casirotae・Obares・Elymandri・Borgi。街

は Aria・Alexandria・Bitaxa。

Parthia

Parthia (いま *Arac*) の地方は Comisene・Parthiene・Paratauticene・Tabiene。その種族は Sobidae。この地方の首邑にして王宮は Hecatompylus (100の門にちなんで呼ばれる)。

第14章 Persis・Susiana・Assyria・Media

Persis

Persis (いま *Farsi*) の人民は Mesabatae・Rapsii・Hippophagi・Suzaei・Magores・Stabaei。地方は Paraetacene・Misidia・Mardiene・Toacen。すこぶる有名な街は Persepolis (かつての Persia 帝国の首邑。全てのなかで最も優美である)・Axima・Marasium・Toace。

Susian

Susiana (いま *Elaran*) の種族は Elymaei (その地方は Elymaea ないし Elymaei)・Cossaei。地方は Melitene・Cabamene・Characene・Cissia・Chaltapitis, および Dera ないし Derius 平野 (全てのなかで最も肥沃である)。よく知られた川は Mosaeus・Oroates・Eulaeus (水があまりに清澄なため、王以外の何人も飲むことは望めなかった)。有名な街は Susa・Tariana。

Assyria

Assyria (いま *Cusistan*) の比較的よく知られた地方は Arrapachitis・Sitacene・Adiabene・Apolloniates・Calacene・Arbelitis であった。人民は Garamaei・Sambatae。川は Tigris に流れ込む、Lycus・Caprus・Gorgus。比較的著名な街は Ninus (これは Nineve として、聖書中 [Genesis 10.11 など] ではかつて最も有名であった。Ninus によって建設された)・Ctesiphon (Parthi の王宮)・Arbela (かつては村であり、Alexander 大王が Darius に勝ったところである)。

Media

Media (いま Sarch という) のよく知られた人民は Caspii (彼らにちなんで近在の海は Caspium と呼ばれる。この海は Hyrcani にちなんで Hyrcanum と呼ばれる。Caspia 門も彼らにちなむ)・Cadusii・Geli・Dribyces・Avarici・Mardi・Carduchi (のちに Gordieni と呼ばれる)・Marundae・Margasi・Sagartii・Tapuri・Sidices・Vadassi であった。地方は Atropatia・Choromiterne・Sagrianica・Ragiana・Daritis・Zapavortene・Syromedia。すこぶるよく知られる街は Ecbatana・Arsacia・Cyropolis・Europus。よく知られた川は Cambyses・Cyrus・Mardus (Amardus と同)・Strato・Corindas。山は Coronus・Iasonius・Orontes・Zagrus・Choatras。

第15章 さまざまな Asia の帝国の変遷, Sophos 王国新誌について さらに Ormuz 王国について

初め、事物すなわち地のうち Asia の Assyrii に服した部分は、いま Turci・Sophi の帝国のものにある。Medi の下に落とされた後、そこから Cyrus によって Persa に移された。ついで、Alexander が Darius を打倒したため、Macedones が占領した。さらに一部が Romani の支配に譲られたが、Parthi (以前は卑賤で懦弱な種族) が Asia で最も有力な王国を建て、続いて大敗で Romani を弱体化した。その後自分たちが Turci や Saraceni によって圧迫され、彼らの王国も劫掠された。結局、Ismaele 王が彼ら自身の帝国の勢力を最大限に安定化したことで、Persa の名前と武徳とは Sophi のなかで再び発現した。

いま Persa ないし Sophi 帝国全体は次のような地方に区分されている。その名前は Sarc・Cusistan・Elaran・

Farsi・*Arac*・*Elsabar*・*Diargument*・*Corasan*・*Sablestan*・*Candahor*・*Sigestan*・*Chesimur*・*Kirman*・*Goadel*。これらに、別格の王国である *Ormuz* と、*Guzarate* 州（これについては *Indi* の *Cambaja* 王国の箇所ですべた）とが加わる。街のうちすこぶる有名なのは *Sarc* 州では *Tauris*（王宮。周囲 4 GM）・*Casmin*（もう一つの王宮）である。その他には *Tamai*・*Turcoman*・*Derbent*・*Erex*・*Zeken*・*Meren*・*Servan*・*Ardovil*（*Sophi* の起源であることで名高い）。*Farsi* 州では *Siras*（王宮。美しく華麗な街で、東洋の大都のうちに数えられる。周囲 5 GM）。*Arac* では *Cassaim*（富裕な街）・*Hagistan* ないし *Hispaham*（世界の半分の大きさゆえに、*Persi* によって名づけられる）。*Corasan* では *Istigias*（王宮。宏大で快適な街）。*Candahor* では街自体も *Candahor*（*Indus*・*Ciatin* の商人によって繁華な市場である）。*Kirman* では街自体も *Kirman*（当地方の首邑）。

Armusia 王国（俗に Ormuz）

古人によって *Carmaia* と呼ばれた部分はいま *Ormuz* 王国である。はなはだ有力で、*Plinius*⁹⁾ のいわゆる *Armuzia* 地方・*Armozei* 人である。*Ptolemaeus*[6.8.5]¹⁰⁾ はこの場所に *Armuzia* 市民を記載する。*Strabo* は *Armozum* とする。今日その名前では同じ名前の島にいる *Ormuz* のことが考えられる。

Saracensus 王は、ここにすこぶる要害堅固な城を守って、かつて *Persa* 王に対して、いまは *Hispania* 王に対して、有給軍役を果たす [*stipendiarius*]。しかしその王国の他の一部は *Arabia* 海岸の最近隣にある。

王国の首邑は *Armuzia*（俗に *Ormuz*）で、十分に優美な街であり、*India*・*Persia*・*Arabia* が産出した宝石・真珠・香料の、すこぶる繁華な市場である。

第16章 現在 *Turca* 帝国が支配する、その他の、古代 *Asia* の諸地方について および特に *Albania*・*Iberia*・*Colchis*・*Armenia* について

Asia の残余は全て *Turcicum* 帝国が支配する。この地方はかつて *Albania*・*Iberia*・*Colchis*・*Armenia*・*Cappadocia*・*Galatia*・*Pontus*・*Bithynia*・小 *Asia*（すなわち厳密に言う *Asia*）・*Lycia*・*Pamphylia*・*Cilicia*・*Syria*・*Mesopotamia*・*Babylonia*・*Arabia* であった。よく知られた島には *Cyprus*・*Rhodus*・*Lesbos*・*Cos*。

Albania

Albania はいま東 *Georgia* の一部で、*Iberia* と *Caspium* 海との間に位置する。名前は *Albanus* 川にちなんだものと思われる。川のなかで最もよく知られているのは *Cyprus* で、*Caspium* 海に注ぐ。際だった街は *Chabala* ないし *Cabalaca*・*Albana*・*Getara* である。

Iberia

Iberia はいま西 *Georgia* の一部で、*Albania* と *Colchis* との間に位置する。*Iberi* 族のなかでは唯一すこぶる有名である。繁華な街としては *Artanissa*・*Armactica* ないし *Harmastim* がある。

Colchis

Colchis（いま *Mengrelia* という）は *Iberia* と *Pontus Euxinus* との間に位置する。その人民は *Ealeae*・*Mantali*（いまの地方名はここに由来する）である。よく知られた川は *Phasis*・*Cyaneus*。山は *Caucasus*・*Corax*。最も有名な街は *Phasis*・*Dioscurias*（のちに *Sebastopolis*）。

大 Armenia

Armenia 全体は *Euphrates* 川によって大・小二つに分かれる。大 *Armenia* はいま三つの部分に区分され、*Turcomannia*・*Popul*・*Curdi* と呼ばれる。北は *Moschici* 山地によって *Colchis*・*Iberia* から、*Cyrus* 川によって *Albania* から、離される。東には *Caspium* 海がある。南は *Taurum* 山によって *Mesopotamia* から、*Nyphates* 山

によって Assyria から分かれた。西は Euphrates 川によって小 Armenia と画される。中央を Antitaurus 山が分ける。Euphraets・Tigris 川の源流である Gorgyaeus・Pariedrus 山は東洋全体でよく知られる。地方は Cotacene・Bocche・Tosarene・Colthene・Soducene・Syracene・Sacasene・Basilissene・Hobordene・Arsea・Acilisene・Astaunites・Sophene・Anzitene・Thospites・Corinea・Gordiene・Cortaea。人民は Mardi・Gordiaei。よく知られた街は Armauria・Artaxata・Thospia・Artemita・Tigranocerta。

小 Armenia

小 Armenia (いま *Pegian・Bozoch*) は、東は Euphrates 川、南は Amanus 山、西・北は Scordiscus 山に囲まれる。その中央を Antitaurus が通り抜ける。その地方は Orbalissine・Aetulane・Aerethica・Horsene・Orbisene。管区 [praefectura] : Cataonia・Morimene・Laviana・Aravene。名高い川は Melas (Euphrates に合流する)。

街のなかで第一等は Satala・Nicopolis・Melitene・Comana。

第17章 Cappadocia・Galatia・Pontus・Bithynia

Ponticum 海と Cyprium 海との間にある、地のかの突出部はいま、州の一つ *Anadole* にちなんで *Natolia* と呼ばれる。その、かつての地方は Cappadocia・Galatia・Paphlagonia・Pontus・Bithynia・小 Asia・Lycia・Pamphylia・Cilicia。

Cappadocia

Cappadocia はいまは四つの地方を包含する：*Genech・Suas・Anadole・Amasia*。東は小 Armenia、南は Cilicia、西は Pamphylia・Galatia、北は Pontus Euxinus を境とする。著名な川は Iris・Thermodon。地方：Lycaonia・Themiscyrene・Zelitica・Carmanene・Gargarausene・Gargauritis・Antiochene・Tyranis。Heniochi 族、多くの名前によって区別される。有名な街：Comana (Pontica によって名が付けられている)・Neocaesarea・Sebastia・Diocaesarea・Maza (Caesarea とも)・Iconium・Laranda・Tyana・Trapezus・Amasia (地理学者 Strabo の生地のため栄誉を得ている)

Galatia

Galatia (その一部はいま *Roni・Chiancare*) は、Roma の人口調査の後にここに Italia から移ってきた Galli にちなむと言われる。同じところに Gallograecia・Graecogallia (Galli と Graeca とが) が住んでいる。後に Phruges・Paphlagonες が把持した。Paphlagonia の名前は Galatia の一部で維持された。Galatia は、北は Pontus 海、東は Cappadocia、南は Pamphylia、西は小 Asia・Bithynia 海 [Pontus] に囲まれている。北に面した地方では Paphlagonia (そこには Heneti 人、ついで Italia の Veneti)、南に面しては Isauria (そこでは Isaura の街。Pisidia の一部である。それとは別の部分は Pamphylia にある)、については後に語る [第5巻第19章]。人民：Chalybes・Troemi・Proserliminitae・Byceni・Orondici、Galli 系 [nationes] の Tectosagae (その首邑は Ancyra の街)・Tolistobogii・Voturi・Ambiani。名高い街：Teuthrania・Sinope (Mithridates の聖地・墓所としてよく知られる)・Amisus・Therma・Pessinus (かつて Dindymente とも Cybele とも呼ばれていた)。山：Olgasis・Didymus (Caeleni の墓所でもある)。

Pontus・Bithynia

かつては二つの地方 (Pontus は東部のみ、Bithynia は西部) であったが、後には一つの属州と見なされた。この州は、北は Ponticum 海、東は Galatia、南は小 Asia、西は Propontis、に囲まれている。有名な山は Orminius である。川は Parthenius・Hippias・Sangarius・Ascanius。地方は Bogdomanis・Timonitis。人民は Chalcedonii・Mariandini・Caucones・Zygiani。傑出した街は Chalcedon (いま *Scutari*。Constantinopolis に対面する)・

Nicomedia・Apamea・Heraclea・Nicaea・Prusias(いま *Bursia*)・Libyssa(Annibalの横死と墓所とで知られる)。

第18章 小 Asia すなわち厳密に言う Asia

厳密に言う Asia(小 Asia とも。いま三つの部分からなる：*Chiutalem*・*Sarcum*・*Germian*)は、北は Bitynia・Pontus に、東は Galatia・Pamphylia・Lycia に、南は同じ Lycia と Rhodiensis 海とに、西は Aegaeum 海[pelagus]・Hellespontus に、囲まれている。以下の地方に区分されている：*Phrygia*・*Mysia*・*Lydia*・*Caria*、*Graeci* 族が Aegaeum 海岸に居住する、*Aeolis*・*Ionia*・*Doris*。

大 Phrygia

Phrygia は大・小二つに分かれている。後者は *Troas* ともいう。

小 *Phrygia* の人民は *Olympeni*・*Moccadellii*・*Cydisses*・*Gipetini*・*Moxiani*。すこぶるよく知られた山は *Cadmus* で、これによって *Lycia* と分離される。著名な川は *Meander*・*Marsyas*。卓越した街は *Synnada*・*Apamia*(*Cibotus* という添え名がある。以前は *Celaenae* と言った)。

小 Phrygia すなわち Troas

かつて *Troas* であったところは *Phryges* によって占居されたため小 *Phrygia* と呼ばれた。そのすこぶるよく知られた川は *Scamandrus* である。すこぶる優れた街は、*Graji* の物語ですこぶるよく知られる *Troja* で、*Graeci* に10年間攻囲され破滅したことで周く知られる。その後、旧市から30スタディア離れたところに新しい *Ilium* が[造られた]。さらに *Alexandri Troas*(*Alexandria* とも)も。

大 Mysia

Mysia も同様に、大・小に分かれる。小 *Mysia* と大 *Phrygia* との間に位置する大 *Mysia* には、人民は *Olympeni*・*Trimenothuridae*・*Mysomacedones*、著名な山は *Olympus*・*Cimon*、川は *Rhyndacus*、すこぶるよく知られた街は *Antandros*・*Adramitium*・*Pergamus*・*Trajanopolis*・*Alyda*、がある。

小 Mysia

Hellespontus と *Propontus* とに洗われる小 *Mysia* では、よく知られた川は *Aesepus*・*Granicus*・*Simois*。山は *Ida*(*Paris* と *Oenone* との愛で知られる)。著名な街は *Cyzicus*・*Parium*・*Lampsacus*・*Abydus*・*Dardanum*。

Lydia

Lydia の別の一部は *Moeonia* と呼ばれる。双方における川は *Caicus*・*Thermus*(これには砂金を産することで評判(そこで *Χρυσόροα* [黄金が流れる]と言われる)の *Pactolus* が合流する)・*Caistrus*(*Lydia* を *Caria* から分離する)。有名な山は *Sipylus*・*Tmolus*・*Mesogys*・*Mimas*。すこぶるよく知られた街は *Thyatira*・*Sardes*・*Philadelpheia*。

Caria

Caria の *Maeander* 川は大 *Phrygia* 東部で *Lycus* と合流する。山は *Phoenix*・*Mycale*・*Latmus*。有名な街は *Tripolis*・*Laodicea*・*Antiochia*・*Magnesia*・*Priene*・*Alabanda*・*Stratonice*、海岸地帯に *Miletus*(かつては富裕で有力な、*Graeci* の海洋都市国家であった)・*Myndus*。

Aeolis・Ionia・Doris

Aeolis でよく知られた街は Cuma・Phocaea・Elea。Ionia では Smyrna・Clazomenae・Teos・Lebedus Colophon (Apollo の予言よりも Homerus の生地として知られる)・Ephesus (全てのなかで最も有名である。その Diana 寺の装飾は Amazones の仕事であり、その壮観たるや、Xerxes が Asia の全寺を灰燼に帰したにもかかわらずこの一寺のみそれを控えたほどである。のちに Herostratus が悪名の記憶を広めるためにこれに火をかけて破壊した。その後まもなく Ephesii が、より荘厳に飾るために再建した)。Doris の街は Halicarnassus・Cnidus である。

第19章 Lycia・Pamphylia・Cilicia

Lycia (いま *Aldinelli*) は、西・北は小 Asia に、東は Panphylia に、南はそれの (すなわち Lycium) 海に、囲まれている。山のなかで最も有名なのは Chimaera である。夜間の熱気により煙を吐く。そのため妄譚によって、体の三つある怪物として巷間伝えられ、Chimaera が動物だと思われた。それについて Ovidius[9.647~648]¹¹⁾ は

尾根の中央部に Chimaera が、牡ヤギの部分

獅子の胸と顔と、蛇の尾とをもっていた

というのも頂上に獅子が牧場が多い中腹にはヤギが、麓には蛇が、棲んでいたからである。よく知れた川は Xanthus・Limyrus。街は Patara・Andriace・Telmessus。

Pamphylia・Taurus 山

Pamphylia (いま *Menteseli*) は、北は Galatia、東は Cilicia・Cappadocia、南はそれ自身の海 (すなわち Pamphylium 海)、西は Lycia・大 Phrygia に囲まれる。そこの地方は、Carbalia、Pisidia の一部 (別の一部が Galatia に含まれることはすでに述べた [第5巻第17章])、Pisidae (以前は Solymi と呼ばれた)、である。山のうち最もよく知られたものは Taurus である。世界全体で最も高く、Pamphylium 海に続く Chelidonia 諸島から始まり、さまざまな無数の種族を経由しそれぞれに違った名前をつけられながら、西から Scythia の東、India の疆域の末端まで、横たわる。Asia 自体とほぼ等しい長さで、Asia 全体を二つに区分する。そのうち北の半分は Taurus 内 Asia、南の半分は Taurus 外 Asia と呼ばれる。さらに、Pamphylia における著名な街は Side・Seleucia・Pisidiae・Antiochia・Termessus・Perga である。

Cilicia

Cilicia (いま *Carmania*) は Taurus と Cilicium 海との間にすこぶる長く帯状に延びている。よく知られた川に Calycadnum・Lamum・Cydnum・Sarum・Pyramum がある。有名な街は、海岸地帯に Selenus・Pompeipolis (以前は Solae Cilici と呼ばれた)・Mallus・Issus (近接する湾に Issus の名前を与えている)、内陸では Tarsus (D. Paulus Apostolus の生地として有名である)。

第20章 Syria 誌梗概 同じく Palastina (そのもとの Idumaea・Iudaea)

Cilicia に東で繋るのは Syria である。かつて地で最大であり、多くの名前で区分されている [Plinius 5.13.66]。まことに、Assyria・Mesopotamia・Babylonia・Phoenice・Palaestina は、いずれもこれの一部分であった。かつて久しく有力であったが、Semiramis が王として支配した時にすぐれて最強であった。しかしまもなく Assyria・Mesopotamia・Babylonia が引き剥がされ、Syria の疆域は、北は Amanus 山 (これによって Cappadocia・Armenia から離される)、東は Euphrates 川 (これによって Mesopotamia から分かれたる) から Thapsacum の町まで、そして Arabia 荒地、南は Arabia Petraea、西は同じ Arabia Petraea の一部と Syriacum (すなわち Phoenicium) 海・Amano 山 (これによって Cilicia と隔てられる)、となった。長さは Sirbonis 沼沢地と Taurus 山 (Euphrates はこれによって分断される) との間で 140M である。幅は海と Arabia 荒地との間で 50M である。

Palaestina・Phoenicia・Antiochia・Comagene・Coele に分かれる。

Palaestina

Palaestina は、北は Phoenicia、東は Coelesyria、南は Arabia Petraea、西は同じ Arabia の一部と Syriacum 海と、に囲まれる。かつて、Cham の息子でこれを把持した Chanaan にちなんで、Chanaan の地と呼ばれた。その後、Israelitae は古くからの耕作者を追い出し、神の命に従ってこれを占拠し、Iudaea と宣告し始めた。Romani・Graeci の作家たちには、旧時の大族 Palaestini（聖書〔Genesis 10.14 ほか〕ではこれを Philistim と呼ぶ）にちなんで Palaestina と呼ばれる。彼らの著書ではこの地方は Idumaea・Iudaea・Samaria・Galilaea に分けられている。

Idumaea

Idumaea（聖書〔Genesis 32.3 ほか〕では Edom）は Arabia Petraea・Iudaea・内陸の海の間に広がる。Gaza は巨大で、かつてはなほ要害堅固な街である（Persa の公文書館はこう呼ぶ）。Cambyses が武力で Aegyptus を目指した時に、ここに戦いを仕掛け、資力・財力を投入したことから、このように名づけられた。Alexander が攻略し焼尽した。

Iudaea

Iudaea が Idumaea に続く。その首邑は Hierosolyma で、Iudaea にとどまらず東洋の街のなかで久しく最も有名であった〔Plinius 5.15.70〕。Titus Vespasianus は占領した町を破壊し尽くした。後に、Aelia Capitolina と呼ばれた。Aelius Adrianus によって、この地方での位置を少なからず変えられた上で再建されたからである。いまは Turci の住民には Chutz である。Iudaea のその他の有名な街は、海岸には Ascalon（大きな街で、Azotus よりも小さくはない）・Iamnia・Ioppe（すこぶる古い Phoenice の街である。Mela と Plinius〔5.14.69〕とが、洪水よりも地が古いことを示したほどである。Andromeda はここから海戦を見させられた、と語られている）、内陸では Emmaus（以前は街区であった）・Lidda・Hiericus（聖書¹²⁾では Iericho）、Hierosolyma 近くに Bethlehem（すなわち、Iesu Christus の人間の女婿 Servator が生まれたことで全世界で最も著名である）。

Iudaea の一部は Peraea すなわち彼方〔Vltior〕と言われる。πέραν τοῦ Ἰορδάνου すなわち Iordanes 彼方に位置するからである。そこには、かつて Hierosolyma に次ぐ Iudaea の城 Machrus があつた。

Iordanis 川および Asphaltites 湖

それにしてもここで Iordanis について検討することが相応しい。Iordanis（Hebrae 語では Iarden）川は、D. Hieronymus が記すように、二つの、相去ることほど遠からぬ水源から流れ出る。水源の一方は Ior、他方は Dan、という名前であり、それらを結び付けて川の名前 Iordan すなわち Iordanis となった。川自体は快適であり、その場の位置の状況が許す限り、近隣の人々に自身を提供して歓心を求め、あたかも己が意に反するごとく、恐るべき性質である Asphaltites 湖に向かう。最後はそれに呑み込まれ、賞賛された水は有害なものと混ぜられて失われる。水源から約384スタディオン流れて、最初の滝を好機として〔Plinius 5.15.71〕Samochoniten 湖に、ついではるかに大きな湖（Latini には Genesara、Graecia 語では Genasaritin および Tiberiadem。近くに置かれた町にちなんで呼ばれる。聖書作家〔Lucas 5.1, Ioannem 21.1, Matthaeum 15.29 など〕は同じ理由で、Genezareth 湖〔stagnum〕・Tiberiados 海ないし Galilaeae 海と呼ぶ）に、注ぐ。ついで Samaria・Iudaea を流れ、最後は Asphaltites 湖にとらえられる。

Asphaltites は瀝青以外何も産しない。そこ（ἀπὸ τοῦ ἀσφάλτου〔瀝青製の〕）から名がついた〔Plinius 5.15.72〕。魚も水棲の鳥も耐えられない。味は悪く悪臭のために有害である。この湖は、広大であること、および水が鈍重であることのゆえに、Mortuum mare〔死の海〕と呼ばれる。瀝青（これは水全体によって滞る）によって嵐に抵抗するので風に強制されることもなく、航行にも耐えず、全ての生命に欠けたまま深淵のうちにのみぐるので、明礬が塗ってないものは、いかなるものも養うことがない。いかなる動物の体も受け付けない。牛もラクダも漂う〔Plinius 5.15.72〕。泳ぎに熟達した者も未熟な者も等しく浮き上がる。

第21章 Samaria・Galilaea・Phoenice・Libanus

Iudaeae は Samaria に続く。Samaria ではある程度広い海岸が一続きに延びる。Ioppe・Azotus・Ascalon が Samaria の町であり、権威者によって名づけられた。当地方の首邑は Samaria (Sebaste とも) である。Neapolis・Gamala、沿岸部の Apollonia。

Galilaea

Palaestina の彼方に Galilaea がある。その首邑は、海岸の Turris Stratonis である。これは、のちに Caesarea Stratonis すなわち Caesarea Palaestinae として、Herodes 王により新たに建設された。内陸では Genesara すなわち Galilaeae 海のとりに、Capernaum・Iulias・Bethsaida・Tiberias・Tarichea、湖と Phoenicium 海との間には Nazareth (Christi が我々の徴税請負人の屋敷を買い戻した)・Cana Galilaeae (すなわち小 Cana)。ここで銘記されるべきは Graeci・Romani の著述家たちによれば Galilaea は一つであるが、聖書では二つと数えられていることである。その一つはすでに説明した。inferior と添え名されている¹³⁾。もう一つは Phoenicia の一部であり、Superior と言われる。すなわち Galilaea Gentium[Matthaeum 4.15]である。

Phoenice

Phoenice はかつて、Eleutherum 川と、Aegyptus 海内側の Pelusium の町と、の間に広がっていた。後に、Phoenice の疆域は二つの川に画された。南は Cherseus、北は Eleutheru である。そこで聖書では Phoenice は二つの部分に分けられている。上 Galilaea すなわち Galilaea Gentium (Cherseus 河口と Antilibanum 山との間にある) と、Syrophoecice (Antilibanum と Libanum との間にある) とである。Phoenice 全体で有名な街は海岸地帯では Ptolemais (以前は Ace と言われた。聖書¹⁴⁾では Acon)・Tyrus である。Tyrus はかつては島であり、実に Alexander の攻城工事のために地続きにされた。聖書では Zor と呼ばれる。いま住民からは *Sur*。かつては港で、また Africa に生み出された街 (Lept・Vtica そしてかの Romani の支配の敵手 Carthagine) で、有名であった。後には貝殻および紫染料によって、その全ての知名度を固めた[Plinius 5.17.76]。これに次ぐのは Sarepta で、預言者 Elia をもてなしたことで知られる。さらに、久しく富裕であった Sidon (Persi によって占領される以前は港町のなかで最大であった。ガラス工芸で [知られる])・Thebarum (Boeotia の母市)・Berytus (Felix Iulia とも。いまなお有名である)・Baruto・Byblus・Botrys・Aradus・Tripolis (Aradus と Botrys との間。Tyrii・Sidonii・Aradii の創建者たちが保持した。互いに 1 スタディア隔てて並ぶ三つの街の数にちなんで呼ばれる[Mela 1.11.67])。内陸では Antaradus・Paelabyblus・Mrathus。著名な山は Libanus で、Sidon 背後に始まってから Coele-Syria まで 1500 スタディオンにわたって延びる。それと対になる、相対する Antilibanus 山は、介在する谷をはさんで広がる。かつて城壁で結ばれていた[Plinius 5.17.77]。Galilaea Gentium と呼ばれる Phoenice の一部分では、よく知られた山は Carmelus、そこの [有名な] 町は [地方名と] 同一の名前をもつ (かつて Ecatana と呼ばれた)。

Phoenicum 族は、聡明な質の人間で、和・戦の職務について卓越していた。文字と文芸作品と、さらにその他の技芸、航海に従事すること、艦隊戦を行うこと、諸部族を支配すること、支配権の争い、を創始した[Mela 1.11.65]。

第22章 Antiochene・Comagene・Coelesyria

Antiochene

Phoenice に続く Antiochene の首邑はまさに Antiochia (Epidaphnes の添え名による) である。すこぶる繁華な街で、Syria を支配する者の座であった。そして名声それに劣らぬものとして、Apamia・Laodicea・Seleucia Pieria。これらからこの地方自体が Tetrapolis と呼ばれた(上記および Seleucia の、四つという街の数にちなむ)。山は Casius (そこから Casiotis という地方名)・Pieria (同じ名前の地方名による)。よく知られた川は Belus・Lycus・Adonis。

Comagene

Syria の末端は Comagene である。かつて王国の、後に Roma 属州の、首邑であったのは Samosata で、Lucianus の生地として知られる。

Coele-Syria

既述の Syria 地方の背後に、Iudaea Peraea から Euphrates まで、もう一つ別の Syria の部分 (Graecia 語で κοίλη Συρία すなわち窪んだ Syria と呼ばれる) が延びる。その著名な部分は Decapolis・Tetrarchiae・Palmyrene である。

Decapolis 地方は10個の町の数にちなんで呼ばれる。ここにあったのは、Damascus (首邑)・Otopon・Philadelphia・Raphana・Scythopolis (Scythi に由来する。Liber によってここに乳母 [nutrix] が葬られたことにちなみ、かつては Nysa と呼ばれた [Plinius 5.16.74])・Gadara・Hippos・Dios¹⁵⁾・Pella・Gerasa・Canatha。

Decapolis 地方の北にあるのが17の四分領 [Tetrarchia] である (外見は一つであるが諸王権からなる地方と説明される¹⁶⁾)。著名なのは Trachonitis・Paneas (Iordanes の源流はここにある。また Caesarea の街。Paneae すなわち Philippi によって名づけられた)。

Palmyrene

Libanum 山は東で Palyrene に接する。その首邑 Palmyra は、四辺すべて荒涼として砂漠に囲まれた領土という状況ゆえに名高い街である。二つの絶大な帝国 (Romani・Parthi) の間の個別の取り分として、そして紛争の際にはどちらの側でも第一の関心事である、というそして事物の性質によって地上から抹消されたかのようにある [Plinius 5.21.88]。

Coelesyria のその他の著名な街は Euphrates 近くの Zeugma, Bambyce (Hierapolis とも。Syri にとっては実に Magog である。いま *Alepo*)、Chalcia (Belum のゆえに添え名がつけられた。Syria で最も肥沃な Chalcides 地方はこれに由来する)、Cyrrestica Cyrrhus, Beroe, Chalybon (Chalybonitis 地方はこれに由来する)、Laodicea (Libanum ゆえに添え名がつけられた)、Euphrates 河岸の Thapsacus。

第23章 Mesopotamia・Babylonia

Euphrates・Tigris の間の地方は、その位置にちなんで Mesopotamia と呼ばれる。μέση τοῦ ποταμῶν, すなわち川の間の、という具合である。かつては Assyrii 王国の一部であった。いまその部分は Aliduli・Diarboch である。西・南は Euphrates, 東は Tigris, 北は同じ Tigris および Niphates 山脈、に囲まれている。長さは、Niphates 山 (これは Bomagena に続く)・Seleucia (Tigris 近くにあるため Parthorum と添え名されている) 間で165M である。最大幅は上記両川間で70M である。そこにある地方は Anthemusia・Chalcitis・Cauzanitis・Acabene・Ingene・Ancobarites である。傑出した街は、Edessa (かつては Antiochia であった)、Nisibis (これも以前は Antiochia と呼ばれた)、Nicephorium, Labana, Tigris・Euphrates 合流点の Seleucia (かつての呼称)、Carrae (Crassus の敗戦で知られる)、である。山は Masius・Singaras。Euphrates に流れ込む川は Chaboras・Saocoras。

Tigris・Euphrates

Tigris・Euphrates は東洋において最もよく知られた川ではあるが、ここで論ずることが最適であろう [Plinius 5.20.83, 6.31.127]。

Tigris (いま近在の者からは *Tigil*) は大 Armenia の Diglitus 平原中の水源から流出し、そこでは緩流であるが、やがて急流のゆえに Tigris と呼ばれるようになる (まことに Medi は矢と呼ぶ)。Arethusa 湖をこえて、Taurus 山にぶつかり、暗渠に流れ込む。下流はそれの反対側から奔出する。ついで別の湖 (Thospites と呼ばれる) に入る。再び地下水路に潜り、25千歩ののちに戻る。そして Armenia・Assyria から出た他の川に合流し、Assyria と Mesopotamia とを分かち。さらに Seleucia 此岸を二つの水路 (一つは Seleucia, もう一つは Ctesiphon, を

ざす)に分け、尋常ではない島を生み出す。水流(Pasitigrisと呼ばれる)はそこで戻り、まもなく Chaldaici 湖に注ぐ。そして広大な河床に溢れて二つの河口から Persicum 海に流れ出る [Plinius 6.31.127~130]。

Euphrates (いま近在の者からは *Frat*) は同じように大 Armenia に始まり、初め Pyxiaretas と名づけられている。そこから Taurum にぶつかるまで進む。まもなく Omira で曲げられ、Euphrates と呼ばれる [Plinius 5.20.83]。ついで、左岸は Mesopotamia、右岸は Syria・Arabia・Babylonia、を洗いながらさらに多くの河道に分かれていく。そのうちの一つは Seleucia と Tigris とに向かう。別のもの(Regius と呼ばれる)は Babylon を横断し Chaldaica 沼沢地で分流となる。かつては自身の河口で海に流れ込んでいた。後には農地を灌漑するために住民によって堰き止められ、もっぱら Tigris を通るようにされた。Nilus と同じように、一定の時期に増水し Mesopotamia を浸水させる。

Babylonia (いま *Caldar*)

Assyria・Mesopotamia の一部が Babylonia であった。後に一つの属州と規定された。北は Euphrates、東は Tigris、南は Persicum 海・Arabia 荒地の山地、西は同じ山脈および Euphrates 川、に囲まれる。すこぶる名高い地方は、Chaldae・Mardocaea・Auchanitis (Tigris・Euphrates にあたかも島のように囲まれ、Mesene と呼ばれる)である。すこぶる有名な街は Babylon で、Chaldae のかつての首邑であった。Semiramis によって Assyria 王国の座として造られた。いまは僅かな廃墟にまで滅ぼされてある。これに次ぐのは Vrchoa である。聖書¹⁷⁾における Vr Chaldaeorum である。さらに、沼沢地の Borsippa、Tredon (Tigris 河口の街のなかで最もよく知られる)がある。

第24章 Arabia

Asia の末端、Africa に近接するのが広闊な Arabia である。その広大さにおいて地上の何にもひけをとらない [Plinius 6.31.142]。というのも、Tigranes 大王は、固有の疆域を越えて、Euphrates、Amanum までの Mesopotamia、Niphaten 山地において多くの Arabum 族を統率したからである。ここから、Plinius は Arabia は大 Mesopotamia の一部だと述べた¹⁸⁾。しかし Arabs の小さからぬ別の部分が Aegyptus のもとの Africa に存在した(概して Arabicus 湾の面を取り囲むもの)。それについては、後に Africa 誌において[説明する。第6巻第12章]。

厳密な Arabia の疆域は、東は Babylonia と画する山脈および Persicum 海、南は赤い海、西は Arabicus 湾および Isthmus (この湾と Aegyptiacum 海との間にある)、北は Palaestina・Coele-Syria・Euphrates、に囲まれている。全長は Aegyptium 海から Persicus 湾口および Corodamum 岬まで450GM である。最大幅は双子の(此方の Persicus、彼方の Arabicus) 湾口間で340、最小幅は半島のおよそ中央部で180M である。Petraea・Deserta・Felix に分かれる。

Petraea

Petraea は、西は赤い海の湾最奥と Aegyptus、北は Palaestina と Coelesyria、東は荒蕪 Arabia、南は引き続く山脈(Felix との境をなす)、に囲まれる。Petraea と呼ばれるのはその首邑 Petra にちなむ。Petra はすこぶる繁華な街である。Nabataei 族が居住する。その他の際だった街は Medava・Bostra である。よく知られた山は Casius で、Iuppiter Casii の聖域があり、Pompeius Magnus の騒乱はほど遠くない。

Deserta

Deserta (いま Arden) は、西は Petraea・CoeleSyria、北は Euphrates、東は山地(Babylonia との境をなす)、南は同じ山地(Felix との境をなす)、に囲まれる。部分的にははなはだ平坦である。瘠土で、それゆえ荒蕪である。よく知られた人民は Nomades・Scenitae である(後者は Euphrates の彼方 Mesopotamia にまで広がり、同様に Felix にも広がっている)。

Felix (いま Ayman)

Rubrum 海・Pesicum 海の二つの間に突出した、まさに Arabia 半島である[Plinius 6.32.143]。残りの部分について多くは快適・富裕で、肉桂・柑橘その他の香料にはなほだ富み[Mela 3.8.79]、そこから有名な Beatae [幸福の] という添え名がつけられた。比較的著名な川は二つ (Betius Arabicum) で、Lar Persicum 湾に向かう。ここには人民は名を枚挙するにいとまがない。なかで最も有名なのは Saraceni (Africa のみならず Europa も荒略した)・Minaei・Sabaei (太陽に乳香を献ずる)の一部である。比較的良好に知られている街は、Arabicum 湾近くでは Badeo(王宮)・Pudnopolis・Muza・Ocelis, Rubrum 海近くでは Arabia・Cana, Persicum 海近くでは Gerra, 内陸では Ostama・Maraba・Sabe・Manambis (王宮)・Sapphar・Sabatha・Omanum である。

第25章 Turcicum 帝国ならびにその支配下の有名な都市について

かつて Assyrii・Persae・Macedo・Romani・自分自身の王の支配のもとでは全てのうち最も高貴なものと見られていた、Asia のこの地方は、Turcae の進撃によって完全に破壊され、最悪の蛮人に冒涇された。というのも Turcae に占領された街では、全ての卓越した技芸は廃棄され城壁は破壊されるのが常だからである。その支配は、AD1300年に始祖 Osman (Otomannus と呼ぶ人もいる) 一世が協定下の Tattari 人 (Magnus Chanus の軍隊) 掌握したことに始まり、それ以来 Osman 家の子孫が309年間一系で続いて君臨し、いま Murath 四世が権力を握るに至っている。皇帝の座は初め Asia (Bithynia の街 Prusa) にあった。そこから Europa (Thracia の Adrianopolis) に移され、ついで Constantinopolis となり、いまなおそこに定置されている。

かくも広大な帝国におけるその他の街は、語るに値するものは Asia にはほとんどない。しかし全てのなかで第一等は、Syria の Damascus である。宏大で富裕、壮麗で快適、あらゆる種類の物産にあふれ、市場は最も繁華である。著しく卓越した工芸品に満ちている。武具の工房は帝国全土で最もよく知られる。それに続く Syria の有名かつ繁華な市場は Alepum (俗に Alepo)、それに劣らぬ Damasco の街、は大きくかつ雑踏している。海岸部では Alexandriola (俗に Alexandretta)・Berytus (俗に Baruto)・Syria の Tripolis (俗に Tripoli di Soria)・Ioppe (俗に Iaffa)。Cappadocia の Pontus 近くには Trapezus (俗に Trabezonda。かつて Trapezuntini 帝国の首邑であった)。Arabia の Felix には、Medina Talnabi (予言者の街ということである。偽預言者 Mahumetes の聖域および墓所がここに見られる)・Mecca (同じ Mahometes の誕生によって極めてよく知られる)・Zidem・Zibet・Aden (全てのなかでも最も美しくかつ要害堅固である。Arabicum 湾奥に位置する)。

第26章 Cyprus・Rhodus

Cyprus

Asia の Aegaeum 海には幾つかの島が横たわる。そのうち比較的良好に知られている、Europa の Lesbum・Chius・Samus・Cos についてはすでに述べた。Asiaticum 海には Cyprus・Rhodus がある。Cyprus は、Cilicia と Syria との間の Issicus 湾 (四つの大きな入り海 [Internum mare] が数えられている) にあって、古代の作家たちが認めているように、かつて九つの王国の座であった。気候の温和なこと、土壌の肥沃なこと、ですこぶる恵まれている。そこから以前は Macaria と呼ばれた。Cyprus は、青銅の武器にちなんで呼ばれる (青銅の武器はここで初めて発明されたと信じられている)。住民は男女ともに全生涯にわたって極度に淫蕩放埒にふけりがちである。このためかつて Veniti によって島を犠牲にされた。その長さは、Dinaretum (俗に Capo S. Andrea)・Acamanta (俗に Capo S. Epifanio) の二つの岬間で40Mである。最大幅は15である。

四分割されている：Salamina・Paphia・Amathusia・Lapithia。そこでよく知られた山は Olynpus。川は Lycus・Pediaeus。すこぶる有名な街は Paphos・Salamis。

島は Romani が占拠するまでは王が支配していた。そのうち最後の Ptolemaeus は Romani が島に遠征するという報を受け、毒によって運命を甘受した。さらに Porc. Cato は Cyprus の財を Roma に持ち込んだ。それは、Romani 人民の latius 国庫を、いかなる凱旋よりも、満たすものであった。Roma 帝国の分割後は Graeci の支配下にあった。1181年に Anglia の Richardus 王が Saraceni に対抗する Hierosolyma の軍を率いてきた時、嵐のために島に退避した。住民が認めなかったため、武力をもってこれを占領した。そしてある Galli の Guido に王権

を譲った。この王は一系相承けて、遂に Genua に支配権が移った。そして1473年から1570年まで Veneti がこれを支配し、その年、Turca の Selymus がキリスト教徒から奪取した。

王国の首邑は Nicosia、それに次ぐのは Famagusta（俗に *Famagosta*）、三番目は Ceraunia（俗に *Cerines*）である。

Rhodus

Rhodus 島は、大きさでは劣るが有名さでは匹敵する。かつてはより多くの名前と呼ばれていた。海事関係で極めてよく知られる。周囲30GMである。その有名な街は Lindus・Camirus・Ialysus（のちに Rhodus）。

高さ70クビトゥムの Rhodus の太陽の巨像はかつて全ての驚嘆すべきものの一つであった。この彫像は56年後に地震で倒れたが、横たわっていても驚嘆事であった。その足の親指を抱きかかえる者はわずかであった。その指は大多数の彫像よりも大きい。手足がちぎれて巨大な穴が空いていた。完成には、12年間と、Demetrius 王が延滞を嫌って残置した武器によって集めた300タラントんと、を要したと言われる。この街には、これよりも小さな他の巨像が100体もあった。しかし小さいとはいえ単独ならばどこであれその場所を名高くすることになるものであった[Plinius 34.18.41~42]。後に Aegyptus 王の Sultanus は Rhodus を占領してから、900頭のラクダに像を載せることによって、その多くを Alexandria に輸送するよう命じた。

島自体は、初め王によって統治されていた。のちに、Roma の支配下に、Asia の一部として、陥った。帝国分割では Graeci の下に置かれた。ついで1115年に Saraceni が占領し、巨像を持ち去った。1308年から1522年まで Ioannis 騎士団が把持して再興したが、その年 Turca 帝国の Solimannus 二世が占領した。その際の打撃により、Melita が譲歩された。

第6巻

第1章 Africa 誌梗概

地球で最大の Africa 半島は小さな地峡によって Asia に繋っている。周囲は約3030GMである。地峡の中断は25Mである。Africa の大部分は未開で、不毛の荒れ地に覆われているのでなければ、天地の乾燥のために荒れ果てているか、多くかつ有害な種類の獣に悩まされている。総じて、人口稠密というよりも人気がない。にもかかわらず、ある地方は格別に肥沃である。Iuppiter の息子 Epaphus の娘の Libya にちなんで、Graeci は Libya と呼んだ。また Hercules の息子 Afro Libys にちなんで Africa と呼ぶとも考えられる。海がこれを取り巻く。日が昇るのは Rubrum 海、真昼にあるのが Aethiopicum 海、日が沈むのが Atlanticum 海、北は地中の、Africum（すなわち Libycum）と呼ばれる海がこれを洗う。全長は Hercules 海峡から Bonae Spei 岬まで700Mと見積もられる。幅は、Hesperium（俗に *C. Verde*）・Aromata（Arabicus 湾奥に接する。いま俗に *Coarda fui*）の両岬間で550Mである。地自体も、内海に接するところを除けば、古人には曖昧に知られていた。Nilus 源流および Luna 山の彼方は、要するにまだ知られていない。

かつて分けられていた地方・種族は、Aegyptus・Cyrenaica・小 Africa（すなわち厳密に言う Africa）・Troglodytae・Garamantes・Numidia・Mauritania・Gaetulia・内陸 Libya・Arabia Troglodytica・Aethiopia。

第2章 Aegyptus

Africa の初め、Asia に近接するのは Aegyptus で、古代の地理学者はこれを Asia に数えていた。後代の人々は、Arabia が、先に述べたように、Asia・Africa 間の境界をなしている状況から、Aegyptus を Africa に加えた。

名前は Danai の兄弟 Aegyptus から得た。かつては Aeria と呼ばれた [Isidorus, 9.2.60 か?]。北は自身の（すなわち Aegyptium）海、東は Arabia Petraea および上記の湾、南は Aethiopia、西は Cyrenaica、に囲まれる。長さは Nilus 河口の Pelusiacus から Catabathmum の町まで150Mである。幅は Nilus 河口から Nilus 対岸の Metacompsum の町（いま *Conza*）まで100Mである。

全体は上（南に向かう）・下（内海に洗われる）に分かれる。上 Aegyptus はさらに Nilus によって Libyca（西側）・Arabica（東側）に分けられ、前者の人民は Libyaegyptii、後者の人民は Arabaegyptii、と呼ばれる。下 Aegyptus

の一部は Marcotis ないし Marmarica で、Cyrenaica と接する西端である。特に全 Aegyptus は若干の管区に区画され、それは Graicia の語で Nomos と呼ばれる。

Aegyptus の街々について

Aegyptus は、他の古代の栄光の以外に、かつて、2万の居住された街（それに Amasis が君臨する）を誇示した[Mela 1.9.60]。後年、Romani の支配下でも多くの者（たとえ卑賤にせよ）が密集していた。

全てのなかで最も有名なのは Alexandria であった。Aegyptus の首邑であり、さらに Chartago 破滅後は Africa 全体で第一等であった。Alexander 大王によって建設され、後にはその人口の夥多・稠密なること、わずかに Roma にのみ一籌を輸するほどであった。これに次ぐのは Diospolis (Aegyptus の Thebae という添え名がある) で、100の門があると言われた。100の宮殿それと同数の元首の屋形がある、業務が終わる際にはそれぞれに200の武装兵が投入される、と言った人々もいる[Mela 1.9.60⁹⁾]。ついで Memphis はかつての王宮で、ピュラミッドというよりも王陵に接する。館は高層にして、その高いことは人手で造り出すことのできる全てのものを凌駕する。それゆえ度を過ぎた外観は、王の財力の無益で愚劣な誇示を隠しようがない。それ以外の街は Syene・Sais・Bubastis・Elephantis・Tentyris・Arsinoe・Abydos・Memnonis（かつての王宮。後に Osiris の神殿によって知られる）。Arabia との境には、宏大なことで有名な Heiopolis（すなわち太陽の街）がある。Marmarica の街区には Apis があり、Aegyptus 地方においてよく知られた場所である。何ら木材を用いることなく完成された迷宮もある。1000の建物と12の王宮とを、大理石で造られ隠された、途切れることのない壁がつくる回りが取り巻く。内部へ下る道は一本であるが、その内側では多くの迂路によってここそこへ戻されてしまう、数え切れないほどの道がある[Mela 1.9.56]。

第3章 Aegyptus の住民および Nilus 川について さらに外縁 Lybia について

Aegyptii は、かつて Scythi に対して種族の古さを争った時、自分たちを人類のなかで最も古いと宣言した。Syros の後に最も古いことは聖書によって確かに確認される。何人かの学問の創始者は神的な事象と気候とにすこぶる精通していたと言われる。Daedalus・Melampus・Phytagoras・Homerus その他若干人々は学識の向上のためにそれを目指した。国は初めから王たちの支配下にあった。ある時は自分たちの、ある時は Aethiopes の、ついで Persae・Macedones の、再び彼ら自身の。Augustus が征服して Romani が Aegyptus を属州に追いやるまでそれが続いた。その後、Saraceni がこれを占領した。それに、Tartari の Circassi 族から出た Sultani という粗野な名前が続いた。最後の Turcae は1516年に侵入し、今なお把持している。

Nilus

Nilus についてこの場所でいささか語ることは道理からほとんどはずれまい。Aegyptus の地は雨に乏しい。にもかかわらず非常に肥沃で、人間もその他ものものも多産で子が多い。海のなかにまで最大限に浸透する Nilus がそれを引き起こす[Mela 1.9.49]。Nilus は、ここ Africa の荒地において、Luna 山に始まり、ほとんど停留することなく、巨大な Nilides 湖（いま Zaire。Zembre ともいう。差し渡し120GM）に初めて、昼夜を分かつたすら激しく大量の水を右岸から流し込む。Astapus と添え名がつけられる（これは Aethiopes の言葉で冥界から奔出する水を意味する）。Meroe（それは広々と現れ撒き散らされている無数の島のなかで最も有名である）を巡って、左の水道は Astabores（冥界から現れる水の枝、である）と呼ばれ、右は Astusapes（隠れていることを意味する）。そこからもう一度合流して初めて Nilus と呼ばれる[Plinius 5.10.53]。次いで一部は危険ながら、一部は小舟は受けつける[Mela 1.9.51]、まもなく断崖の航路を進む。向かい来る断崖の間は無数の喧噪のために流れるというよりも突進するように思われる。それから静かになり、暴力に疲れた水は馴らされて、広がりには消耗し[Plinius 5.10.54]、遂に Δέλτα の町に向かって全 Aegyptus を経巡り分散し、七つの[Mela 1.9.51]巨大な河口で Aegyptium 海に自身を吐き出す。年に2度、一定の日に、Aegyptus 全空間にわたるおびただしい増水によって、肥沃さが土地に注がれる。この増水の原因としてさまざまなことが言われた。しかし最大限ありうるのは二つである：この時期から真向かいに吹く、はるか海上における季節風[Etesiae]の反響、あるいは Aethiopia の夏の雨（同じ湿った季節風によって世界の残りの所からそこへもたらされる）[Plinius 5.10.54～55]。全ての川のな

かで同様に息を吹き出すものはない。

外縁 Libya

Aegyptus の背後から南に向かい、Nilus の左岸に外縁 Libya が Aethiopia まで延びる。いま *Elfocat* 荒野。 *Gaoga* とも。

第4章 Cyrenaica・小 Africa・荒蕪 Lybia・Troglodyta・Garamantes

Aegyptus に続くのは Cyrenaica 地方で、Ammon 託宣で有名である。いま Barchana 州の東半分で、Pentapolitana と呼ばれる。五つの著名な街（Berenice・Arsinoe・Ptolemais・Apollonia・Cyrene）の数にちなんで、地方名がつけられた。Aegeum 海の Thera 島からやってきた Graeci がこれを建設した。Cyrenenses 自身も運命により個人として Aegyptii・Poeni の間に久しく散らばった。ついで Carthaginenses と耕地の境界を巡って烈しくかつ長期間の戦争を行った。やがて Carthago が消されてから、Africa の残余とともに Romani の支配に服した。その後、この地方は Sultani に、最後は Turci に〔従属した〕。

小 Africa

小 Africa（厳密に言う Africa）が続く。北は Africa 海、東は大 Syrtus 湾、南は引き続く山脈（これによって荒蕪 Lybia・Gaetulul と分かたれる）、西は Tusca 川、に囲まれる。

現在は Tunetanum 王国を含む。

ここで有名な川は、Cinyphus・Triton (Tritonidem 沼沢地から流れる)・Catada (Carthago に流下する)、Bagrada 川の大部分 (Vitica に向かう)、Tusca (小 Africa との境)。

さまざまな名称の人民がいる。最も有名なのは Nasamones である。厳密に言う Africa の外で Cyrenaica・Marmarica と境を接する。昔 Graeci は彼らを Mesammones と呼んだ。彼らの所在を論じて、荒野の中央にいると考えたことにちなむ [Plinius 5.5.33]。そのうちの、高慢な Psyli は、その体質は蛇にとって致命的な毒であった (その匂いによってあるいは追い払い、あるいは眠らせる) [Plinius 7.2.14]。

Carthago の北には Libyphoenices がいた。彼らも Poeni であり、Elisa (ないし Didone) に率いられては Phoenice の Tyro から出たものである。Carthago は彼が建設した。

すこぶる繁華な街は、大 Leptis (Neapolis と同)・Abrotonum・Taphrae・Capsa・Thysdrus・Thapsus・Leptis parva・Phuspina・Adrumetum・Clupea・Turres・Vitina・Carthago (Roma の敵手。この地の首邑。かつて全 Africa で最も富裕であった。Romani との3度の戦いに完敗した後、抹消された)・Vitica (この街によって Vitensis とされた Cato の死でよく知られる [Plinius 5.3.24])

荒蕪 Lybia・Troglodyta・Garamantes

小 Africa の背後、南にむけて荒蕪 Lybia があった。その先が Troglodytae (いま Berdoa と呼ばれる) である。それを南側からかくまうのが Ater 山である。それを越えると有名な Garamantes 人 (いま Borno) の王国がある。この種族の首邑は Garama で、今日でも同じ名前が存在しているという。Debris は あふれ出る泉 で有名である。その水は確かに天からのもので季節に応じて質を変える。しかも季節の順序に逆らう。というのは、酷暑には凍り寒天には熱い、真昼から真夜中にかけて水は沸騰し真昼にかけての同時間には凍っている、からである [Plinius 5.5.36]。

Troglodyta・Garamantes はかつて Roma の武力で征服した。

第5章 Numidia・Mauritania

Tusca 川から Ampsaga 川まで Africa の海岸に、Masinissa 王の名前で極めて有名な Numidia が延びる。いまは同じ場所に Tremisenum 王国が広がる。種族は Numidiae で、かつて Graeci は Nomades と呼んだ。いまの

Tattari の風習のように、変わる牧草のために、自身の天幕を荷車にもて周回していたからである[Plinius 5.2.22]。

川のなかで最もよく知られているのは Rubricatus である。街は名が知られているほどには美しくない。しかし Cirtha は傑出し、Romani が把持して後は Sittani 植民地と呼ばれる。かつて Iuba と Syphacis との屋敷であり、富裕であった。それに次ぐのは Cullu・Ruscicade・Bulla（王宮）・Tacatua・Hippo（王家）・Sicca・Tabrachae。この地方も、Romani は征服後に属州の形に変えた。

Mauritania

西に向かって最奥は Mauritania である。そこの主要な種族は Mauri で、そこから地方名がつけられた。これを Graeci は Maurusius と呼んだ。南は小 Atlas（これによって Gaetuli と分けられる。彼らは Maurusii が征服され根絶された後に Mauritania の主要部分を占居した）、西は Atlanticus 洋、北は Hercules 海峡および内海、東は初めは Mulucha 川であった（これによって Mauro が Numidia から区分される）が、Numidia のうち Ampsaga・Mulucha 間の部分が Mauritania に加えられた時、この領域に Ampsaga が設置された。今日三つの王国を含む：Darese・Fezense・Maurocitanum。

かつては Malva 川によって、Caesariensis（Numidia と接する）と Tingitana（大洋に洗われる）とに分けられていた。王国は C. Caesar から帝政期までつづいた（帝政期に二つの属州に区分された）。

Caesariensis

Caesariensis 属州は、いまとは違い、全 Dara 王国を包含していた。かつては Bocchi 王国と呼ばれていた。Malva・Mulcha 間の部分は Massaesyli 族が把持していた。属州の首邑は Iulia Caesaria である。Iolessset の時代には無名であったが、後には Iuba の王宮のゆえによく知られるようになった。その他の町は Cartenna・Saldae（新しい町）・Rusazus・Ruscirium・Rusconia・Tipasa・Tubusuptus・Tucca（海および Ampsaga 川に置かれている）

Tingitana

Tingitana 属州は、いまとは違い、二つの王国（Fez・Marocfco）が占めていた。Tingi の街（いま俗に Tanger）にちなんで添え名を承けた。以前は Bogud 王にちなんで Bogudiana と呼ばれた。そこの町は、Tingi（とのみ言われる。属州の首邑である。Antaeus が建設した）・Iulia Constantia・Zilis・Volubilis・Lixus（古人によって、およそ信じがたく語られた。ここに Antaeus の王宮があり Hercules と闘った、Hesperides の園があった、という類いである）。

第6章 Gaetuli・Atlas 山・内陸 Lybia・Aethiopia

Gaetuli

Mauritaniae・小 Africa の背後に Gaetuli 族がおり（彼らも Romani の武力で征服された）、長く・広く居住していた。というのも、彼らは今日、Lempta の町から大洋までのいずれの地も占居し、350GM にわたって広がっているからである。この空間はいま Biledulgerit 州の主要部分となっている。そこに Targa 王国と、四つの荒地（Lempta・Zuenziga・Zanhaga・Hair）とがある。

Atlas 山

Gaetuli を南で閉じているのが Atlas 山で、Africa の全てのなかで最も伝説に満ちている。優れた作家たちは以下のように伝える：それは荒野の中央から天まで突き上げる。危うく突兀たる状態で大洋（この山によって添え名が負わされた）の岸まで下る。暗い深林と噴出する泉の水路とをもって Africa に臨む。あらゆる種類の産物が、かつて飽食の快楽に欠けたことがないかのように、まことに自生する。住民のうち日中に見かけられる者

はなく、全てはまさに恐ろしい無人境然と静まりかえる。夜には頻繁に火を發し、*Aegipan・Satyrus* たちの存分な馬鹿騒ぎ、角笛・葦笛の音や太鼓・シンバルの響き、で騒音に満ち満ちる[Plinius 5.1.6~7]。

内陸 Libya

Atlas の彼方に内陸 Libya がある。Nigrum 川まで広漠たる無人境で、いま Sarra 荒地と呼ばれる。

Aethiopia・Troglodytica

Nigrum 川の彼方は、*Aegyptus* も含め、*Atlanticum* 海・*Rubrum* 海の双方に面して、*Aethiopes* が把持する。*Africa* の地（地理学者のうち最古の者が想定した *Africa* を除く）の全種族のなかで最も優勢である。*Vulcanus* の息子 *Aethiopus* にちなんで名づけられた。また他の者によれば、顔・体の色の黒さにちなむ (*αἰθωψ* は黒を意味するからである)。

Aethiopia はかつてさまざまな *Aethiopes* の種族に分かれていた。*Ptolemaeus* はその名前を枚挙するに遑がないと言っている²⁰⁾。全てのなかで最も有名なのは *Nigritae* (*Niger* 川にちなんで呼ぶ) である。*Nubures* 族も有力であり、今日すこぶる広大な地方が彼らにちなんで *Nubia* と呼ばれる。*Aethiopia* のうち、*Nilus* 兩岸に接する部分は *Aegyptus* 下の *Aethiopia* と呼ばれる。そしてそのなかで *Nilus* 沼沢地（ないし湖）に近いところが *Cinnamomifera* 地方である。*Arabicus* 湾の左側全体は *Arabes* の *Troglodytae* が把持し、そこからその地方も *Troglodytica* という。

第7章 全 *Africa* の住民とその新誌 および特に *Aegyptus* について

昔 *Aegyptus* にいかなる人間が住んでいたのか、はすでに述べた [第6巻第3章]。西の海に続く残余の *Africa* は、想起された人民が把持していた。

最初にやってきたのは別の *Poenices* の植民者で、*Asia・Afria* から出立してきた者であった。その後 *Romani* に従属し、さらに *Graeci* 皇帝にこの地の全空間を [委ねた]。ついで *Vandali・Saraceni・Arabes* [が支配した]。いま一部は *Turca* が、一部は *Serifus* (そう呼ばれている) が、一部を別の王が、さらに一部を *Hispania* 王が、把持する。

Aethiopes は自身が立ち去って無人にもしなかったし、そこに他の植民者を受け入れることもなかった。長い間この地方を、広大無辺にして荒れ地が介在する見捨てられた状態にしてきた。

しかし *Africa* の古代について詳細に述べたので、その新しい記述を追加したい。

いま全体は七つの主要な部分すなわち地方に分かれている。その名称は以下の通り：*Aegyptus・Barbaria・Biledulgerid・Sarra* 荒地・*Nigritae*・内陸 *Aethiopia* (すなわち上 *Aethiopia*・*Abissini* 帝国)・外縁 *Aethiopi* (すなわち低 *Aethiopia*)

Aegyptus

Aegyptus (*Turca* が支配する) の首邑はいま *Cairum* (俗に *Alcair*) である。*Chaldaeis Alchabyr* は驚嘆すべき大きさである。市場はすこぶる繁華である。*Circassiorum Aegypti Sultanorum* はかつて王宮であった。そばに *Materea* 庭園はバルサムの茂みと組み合わせられている。それはかつて *Iudaeae* の地が許されたものであった。今日ではこの地を除けばどこでも栽培されていない。*Nilus* の彼方にピラミッドが見られる。先 [第6巻第2章] に述べたように、驚嘆すべき高さである。

光彩陸離たることで *Cairo* に次ぐのは *Alexandria* である。かつて華麗で富裕な市民であったが、いまは度重なる戦争で破壊され、混乱のために、繁華な市場はキリスト教徒の商人に任されている。それに続いてよく知られているのは、城をともなった町 *Raschit* (*Europaei* は *Rosetta* と呼ぶ)・*Damiata* (かつての *Pelusium*・*Ptolemaeus* の地理学の始まったことで知られる) である。

第8章 Barbaria

Aegyptus には全 Africa で最もよく知られた Barbaria 地方が続く。六つの部分に分けられる。その一つは Barcana 属州であり、残りの五つは Tunetanum・Tremisenum・Fessanum・Maurocanum・Darense である。

Barcana 地方

Barcana 地方は、Aegyptus と Tunetanum 王国との間の海岸沿いに延びる。古代の街 Barce にちなんで名づけられた。土壌の粗末さと乾燥のために不毛であることは均しい。

Tunetanum 王国

Tunetanum 王国は古代の小 Africa のほぼ全域を占める。首邑はよく知られた Tunetum (俗に *Tunisi*) である。古くかつ相当に有力な街である。Carthago の故地に生まれた。市場は、Veneti・Genuenses その他の商人によって繁華である。次は新 Tripolis (Tripolis Barbariae と呼ばれる。Syria の Tripolis と区別するためである) で、Europaei の商人によってすこぶる繁華である。*Bona* (かつては Hippo) はいまなお D. Augustinus 司教職で有名である。市場は現在それほど劣ったものではない。内陸では、Constantina Romana が古代の遺物によってよく知られる。

Tremisenum 王国

王国の首邑は *Tremisen* で、かつてすこぶる有力であったが、苛烈な戦争のために衰退した。海岸には *Algier* がある。市場はかなりよく知られ、海賊行為のために悪名高い。キリスト教徒の奴隷ですこぶる満ちている。街は城壁・城・弩砲によって戦争となっても難攻不落であると思われるほどに要害堅固である。

Fessanum 王国

Hispania の Hercules 海峡近くに Fessanum 王国がある。その首邑は *Fez* で、全 Barbaria で第一等の街である。巨大で富裕、人口稠密、華麗で、壮麗・尊大な建築物のゆえに驚嘆に値する。

Tanger・Spta・Arcilla は有力な海峡近くの街である。Hispania の支配下にある。

Maurocanum 王国

首邑は Mauroum (俗に Maroc) で、かつてすこぶる有力で繁華であり、世界中最も忘れがたいものの一つであった。後に Arabes によって劫掠され、いまはほとんど維持されていない。これに次ぐのは *Taradante* である。

Darense 王国

Maurocanum・Fessanum・Tremisenum 王国の内陸側に接するのが、すこぶる有力な Darense 王国で、かつて Caesariensis Mauritania と呼ばれた。首邑は *Dara* で、それによって地方名がつけられた。王国全体と同じく、貧しい細民が居住する。内海に近い Melila は注目すべき街である。Hispania に従属する。

第9章 Biledulgerit・Srra 荒地・Nigritae・Abissini

上記の王国の背後に Biledulgerit 王国がある。Aegyptus の境から Atlanticum 洋まですこぶる細長く広がる。その名は、長短短格[dactylus]発生にちなんで付けられた。ここにある荒地は *Lempta・Hair・Zuenziga・Zanbaga* である (それぞれ町の名前によって地方名が呼ばれた)。王宮は *Targa・Berdoa・Gaoga* である (地方名同様、町にちなんで呼ばれる)。

Sarra 荒野

この地方に南へ続くのが *Sarra* である。*Gaoga* 王国から *Gualata* 王国まで長く延びる。

Nigritae

つづいて、有力な *Nigritate* の地方がある。*Nigrum* 川の両岸で、*Nilus* 川・*Meroe* 島から *Nigrum* 河口・大洋まで長く延びる。そこの王宮は以下の通り（街によって名づけられている）：*Gualata*・*Hoden*・*Genocha*・*Senega*・*Tombuti*・*Melli*・*Bitonin*・*Guinea*・*Temian*・*Dauma*・*Cano*・*Cassena*・*Benin*・*Zanfara*・*Guangara*・*Borno*・*Nubia*・*Biafia*・*Medra*。

内陸 Aethiopia（Abissini の一部）

内陸の *Aethiopia* は *Abissini* 王が支配している。多くの人が誤って、彼を *Presbyter* すなわち *Pretiosus Ioannes*（俗に *Prete Gianni*）と呼ぶ。彼がかつて *Asia* で *Tenduc* 王国に君臨していた（これは事実である）からである。*Stephanus* は *Abaseni* 人を *Arabia* にいるものとした。そこから、彼らが *Arabicus* 湾を渡って *Africa* に移住したということが、もっともらしくなった。あるいは、実は彼らは *Africa* の、*Araicus* 湾左側（そこは上記のように、*Arabia* の *Troglodytida* のところである）にいた。というのもそこはいま *Abissini* の支配下にあるからである。また一説では、*Arabia* 語の *Elhabaschi* という語（ともかく *Mauri* は *Abissini* の首長をこう呼んだ）から俗に *Abassi* という語が作られ、さらに *Abaseni* に、そして遂に母音の変化によって *Abissini* の名前に至った、とされる。

この王国は、東は *Arabicus* 湾および *Ajana*・*Zangebara* 地方、南は *Monomotapa*、西は *Congi*・*Medar* 地方、北は *Nubia*・*Aegyptus*、に囲まれる。長さは *Aegyptus* から *Monomotapa* まで 580M である。幅は、*Arabicus* 湾奥と *Nigrum* 川との間で 450M である。

幾つかの王国（すなわち地方）に分かれる。その名称は以下の通り：*Dafila*・*Barnagasso*・*Dangali*・*Dobas*・*Trigemahon*・*Ambiancantiva*・*Vangue*・*Bagamidri*・*Beleguanze*・*Angote*・*Balli*・*Fatigar*・*Olabi*・*Baru*・*Gemen*・*Fungi*・*Tirut*・*Esabela*・*Malemba*。帝国全体に街はほとんどない。大抵は村[vicis]に住み、家々は粘土と藁とで建てられる。王は（色白であることを誇示する）は天幕の下で過ごす。彼らのうち 6000 人が服属する。*Amara* 山に造られた *Amara* 城はすこぶる要害堅固である。そこでは王の息子たちが、父王が死んで後継者が生み出されるまで、すこぶる頑健な守備軍のもとで育てられる。

第10章 外縁 Aethiopia（すなわち低 Aethiopia） さらに Africa 付近の島々

Africa の残余を外縁 *Aethiopia* ないし低 *Aethiopia* と名づける。東・南・西を大洋に洗われ、北はあたかも *Abissi* 帝国の 2 本の腕に包まれるかのようである。

以下の諸地方に分かれる：*Congi*・*Monomotapa*・*Zangibar*・*Ajan*。海岸地帯の大部分は *Portugalenses* がすこぶる堅固な城と守備隊とによって把持している。

Cogni 王国

Cogni 王国（別説では *Manicongo*）は *Aethiopicum* 洋によって洗われ、名称はその首邑たる *Congi* の街から得ている。住民はキリスト教徒である。地は、河水によってはなはだよく灌漑されている。六つの州（彼らはこれを *Mani* すなわち管区と呼ぶ）に分かれる：*Bamba*・*Songo*・*Sundi*・*Pango*・*Batta*・*Pemba*。王宮は *S. Salvatoris* 市[civitas]（以前は *Banza*）である。

Monomotapa 王国

Monomotapa という語は皇帝を意味する。そこから、彼が君臨するこの地の名前に付けたのである。土地は肥沃にして快適である。川が金を、森が象の大群を産出する。

この王国は、東・南・西を大洋、北を *Congi* 王国・*Abissini* 帝国・*Zangibar* 王国、に囲まれる。その長さは *Rubrum* 海・*Aethiopicum* 海（これは *Luna* 山に接する）の間で400GMである。幅は *Nilus* 川源流・*Bonae Spei* 岬間で300Mである。

王国の首邑にして王の座は、*S. Spiritus* 川近くの *Monomotapa* である。ここから北に向かって約50M離れて、よく知られた建築物がある。巨石を用いて構築した、大きくかつ古代の、四体の像である。

Zangibar・Aian

Monomotapa（*Rubrum* 海に洗われる）は *Zangibar* 地方につづく。その諸部分：*Cafares*（人民は *Monomotapa* に近い）、*Mozanbike*・*Kilola*・*Mombaza*・*Melinde* 諸王国。それぞれ町にちなんで名づけられている。このうち *Mozambique* は島に建設されており、*Europaei* の商人によってすこぶる繁華な市場である。*Rubrum* 海岸において北に向かって続くのが *Ajan* 地方である。その部分は二つの王国（*Del*・*Adea Magaduzzo*）である。

Africa 付近の島々

Africa の地に近い島々のうち最大のものは *Rubrum* 海の *Menuthia*（*Plinius* によれば *Cerne*²¹⁾）である。いま俗に *Divi Laurenrius* の島、住民によれば *Madagascar* すなわち月の島、である。豊富な香料生産のゆえに富裕である。長さは250GM、幅は80、にわたる。

Atlanticum 洋には *Hesperium* 岬（いまの *Cabo Verde*）に対して、*Hesperides* の二つの島がある。さらにその先に *Gorgades* がある。かつて *Gorgon* の住処であった[*Plinius* 6.36.20]。いまは全体として *Islas de C. Verde* と *Hispani* が呼ぶ。*Viridi* 岬の島である。*Mauritania* に対しては *Fortunae* がある。7 島からなり、そのうちの一つは *Canaria* と呼ばれる。大量の巨大な犬にちなむ（*Plinius*[6.37.205]の言うように）。そして全体は *Fortunae* で、いまは *Canariae* と呼ぶ。*Hispania* 王に服する。それを越えて北に *Cerne* がある。いま *Madera* と呼ぶ。

以上が簡潔な *Africa* 誌の全てである。

【補説】本書の諸版について

本書の諸版については小野（1932, pp.86～87）に挙げられている。しかし版間の異同までは記されておらず、また全ての版が記載されてはいない。以下に記載するものは *Internet Archive* で公開されているもの、および *Google* で検索した結果得られたものにすぎない。番号・刊年・書名・発行者（*Internet Archive* その他インターネットで公開されているファイル名）を記す。ただし番号は、本補説のために便宜上付したものに過ぎない。また主たる書名は基本的に同一であるから、①でのみ記載し、以降は①のイタリック部分を[主題名]と略記した。版間の異同は、原則として形式を比較するに留まり、本文の比較まではしていない。

- ①1629 *Philippi Cluverii Introductionis in Universam geographiam : tam veterem quam novam, libri vi.* Lvgd. Bat. : officina Elzeviriana (philippicluverii00clve_4.pdf) (ned-kbn-all-00003540-001.pdf)
 巻頭に *Josephus Vorstius* による序文（6 ページ）がある。本文344ページ。巻末に目次（9 ページ）。
 小野（1932, pp.86・88）が注意するように *Elzevir* からの刊行である。本訳稿の底本である。
 philippicluverii00clve_4.pdf と ned-kbn-all-00003540-001.pdf とは同一版であろう。
- ②1629 [主題名] *editio yktuna priorib. emendatior. ad illustris et amplis Dominicum Molinum patritium et Senatorem Venetum.* Amstelod. : I. Hondium (<https://www.e-rara.ch/zuz/content/structure/14567325>)
 巻頭に *Josephus Vorstius* の序文（8 ページ）、本文318ページ、巻末に目次（8 ページ）。
- ③1641 [主題名] *Accessit P. Bertij Breviarium orbis terrarum.* Lvgd. Bat. : officina Elzeviriana (bub_gb_GoCvZhLXEN0C.pdf)
 巻頭に *Josephus Vorstius* による序文（6 ページ）、図数葉（折り込みで、スキヤニングからは漏れているため詳細は不明。立岡(2021a)の図2～6と同じであろう。ただしその図6が最初に置かれている）、本文344ページ。その後に *Bertius* の *Breviarium Totius Orbis Terrarum* [全世界概要]（65ページ）とい

う文書と Series Romanorum Imperatorum [Roma 皇帝一覧] という資料 (Bertio に追込みで足かけ 6 ページ) とが合冊され、巻末に本書の目次 (9 ページ) がある。

- ④1641 [主題名] *Tabulis aeneis illustrati, & gemino indice aucti, cui adjuncta est D'Anielis Heinsii Oratio in obitum ejusdem Philippi Cluueri*. Brunsvigæ: typis Balthasari Gruberi, sumptibus Gothofredi Mulleri. (philippicluverii00clve_2.pdf)

巻頭に Cluverius の肖像画, Lector S.宛の無署名の文 (2 ページ), Josephus Vorstius による序文 (6 ページ), Lector S.宛の無署名の文 (1 ページ), ついで目次 (7 ページ), さらに Cluverius 自身による四つの図 (A~D として区別される。立岡 (2021a) の図 2~5) を 1 ページに掲げ、本文 214 ページ。Everardus Vorstius 宛の無署名の献辞 (2 ページ), Heinsius による説明 (20 ページ), 地名索引 (53 ページ), という構成になっている。さらに地図 33 葉 (一部彩色) を含む (これらの地図を参照させるため, たとえば「Hispania 図参照」(p.17) といった指示が随所で本文中に埋め込まれている)。

本文はほとんど①と同一であるが、第 3 巻第 20 章の Norvagia の節の末尾に相違する箇所があった (本版では「Bergi (俗に Bergen。この地方で最も繁華な市場である。前述の Timaeus は島として報告している)・Staffanger (すこぶる大きくかつ安全な港湾である)。さらに ^{ママ}Anslo は、Codanus 湾口に近い、無名ではない市場である」となっており、下線部が相違する)。他方、① (philippicluverii00clve_4.pdf) と比べて綴りの誤りが散見され、テキストとしてはむしろ劣化している。

- ⑤1652 [主題名] *Tabulis aeneis illustrati, & gemino indice aucti, cui adjuncta est Danielis Heinsii Oratio in obitum ejusdem Philippi Cluueri*. Brunsvigae: typis Andreae Dunckeri, sumptibus Gothofredi Mulleri. (Internet Archive 所収データではなく <https://digitale.bibliothek.uni-halle.de/vd17/content/structure/9825124>) V.B. による序 (3 ページ), Johannes Bunones 宛の Iustus Georgius Schottelius D. および Herm. Corningius の書簡 (15 ページ), 本文 214 ページ, Everardus Vorstius 宛無署名の献辞 (2 ページ), Heinsius の説明 (20 ページ), 地名索引 (53 ページ)。地図は単色 35 葉。

- ⑥1657 [主題名] *Accessit P. Bertij Breviarium orbis terrarum*. Oxoniae: impensis Roberti Blagrave bibliopolae (philippicluverii00clve.pdf)

巻頭に Josephus Vorstius の序文 (6 ページ), 本文 341 ページ, その後に Bertio の *Breviarium Totius Orbis Terrarum* (56 ページ), Series Romanorum Imperatorum (5 ページ), 巻末に本書の目次 (8 ページ)

- ⑦1661 [主題名] *Tabulis aeneis illustrati Accessit. P. Bertij Breviarium orbis terrarum*. Amstelodami: officina Elzeviriana (ned-kbn-all-00003542-001.pdf)

巻頭に目次 (10 ページ), 本文 (328 ページ), Bertius の *Breviarium Totius Orbis Terrarum* (60 ページ), Series Romanorum Imperatorum (6 ページ), 索引 (67 ページ), 地図目次 (2 ページ)。地図は単色 38 葉。

- ⑧1661 [主題名] *multis locis emendata, memorabilibus locorum illustrata et novis tabulis aeneis aucta studio et opera Iohannis Bunonis*. Guelpherbyti: impensi Conradi Bunonis, typis Iohannis Bismarci. (Internet Archive 所収データではなく <http://diglib.hab.de/drucke/7-5-geogr/start.htm>)

Joh. Buno による献辞 (5 ページ), V.B. の序文 (3 ページ), 地図目次 (2 ページ), 本文 (632 ページ), 地名索引 (68 ページ)。地図は単色 39 葉。

本文は、段落ごとに見出しと番号とが付けられ、段落によっては長短各種の補足説明が細字で加えられている。

- ⑨1670 [主題名] *Accessit P. Bertij Breviarium orbis terrarum*. Amstelodami: Elzeuirios (philippicluverii00clve_3.pdf)

巻頭に Josephus Vorstius の序文 (6 ページ), 本文 344 ページ, Bertius の *Breviarium Totius Orbis Terrarum* (65 ページ), Series Romanorum Imperatorum (Bertio に追込みで足かけ 6 ページ), 巻末に本書の目次 (9 ページ)

- ⑩1672 [主題名] *Tabulis aeneis illustrati. Accessit P. Bertii Breviarium orbis terrarum*. Amstelodami: officina Elzeviriana. (philippicluverii00clve_0)

巻頭に目次 (10 ページ), 本文 (328 ページ), Bertius の *Breviarium Totius Orbis Terrarum* (58 ページ), Series Romanorum Imperatorum (6 ページ), 索引 (65 ページ), 地図目次 (2 ページ)。地図は単色 38 葉。

- ⑪1672 [主題名] *multis locis emendata, memorabilibus locorum illustrata et xlii. tabulis geographicis aucta studio et opera Johannis Bunonis*. Brunsvigae: impensis heredum Conradi Bunonis, typis Johannis Henrici Dunckeri (bub_gb_7idJZEEgnF8C. PDF ファイルなし)
 Leopoldus Guilielmus の序文 (2 ページ), Johannes Bunones の献辞 (5 ページ), V.B. の序文 (3 ページ), Johannes Bunones 宛の Iustus Georgius Schottelius D. および Herm. Corningius の書簡 (16 ページ), 地図目次 (3 ページ), 本文 (680 ページ), 地名索引 (122 ページ)。
 本文は、段落ごとに見出しと番号とが付けられ、段落によっては長短各種の補足説明が細字で加えられている。表題にもかかわらず、スキャンデータ内には地図は含まれていない。
- ⑫1677 [主題名] *Tabulis æneis illustrati. Accessit P. Bertii Breviarium orbis terrarum*. Amstelodami: Elzeviros (philippicluerii00clve_1.pdf)
 巻頭に Josephus Vorstius の序文 (6 ページ), 本文 344 ページ, Bertius の Breviarium Totius Orbis Terrarum (65 ページ), Series Romanorum Imperatorum (Bertio に追込みで足かけ 6 ページ), 巻末に本書の目次 (9 ページ)。
 表題にもかかわらず、スキャンデータ内には地図は含まれていない (たとえば本文 p.45 の画像などには折り込みページらしきものが写っているので本来は地図が含まれていた可能性はある)。
- ⑬1678 [主題名] *multis locis emendata, memorabilibus locorum illustrata et XLII. tabulis geographicis melioribus aucta studio & orera Iohannis Buonis, [...] editio quarta prioribus locupletior & correctior*. Guelpherbyti: impensis heredum Conradi Nunonis. Brunsvigae: Typis Johannis Henrici Dunckeri (Internet Archive 所収データではなく https://books.google.co.jp/books?id=y6iLiO1WurAC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbgs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false)
 Leopoldus Guilielmus の序文 (2 ページ), V.B. の序文 (2 ページ), Johannes Bunones 宛の Iustus Georgius Schottelius D. および Herm. Corningius の書簡 (14 ページ), 地図目次 (2 ページ), 本文 (504 ページ), 地名索引 (99 ページ)
 本文は、段落ごとに見出しと番号とが付けられ、段落によっては長短各種の補足説明が細字で加えられている。表題にもかかわらず、スキャンデータ内には地図は 1 葉しか含まれていない。
- ⑭1686 [主題名] *olim studio & opera Johannis Bunonis, illustris Gymnasii, multis locis emendata, memorabilibus illustrata, xlii. tabulis geographicis melioribus aucta, non solum notis interspersis, sed & sub calcem in specie adjectis auctior atque emendatior edita a Jo. Friderico Hekelio*. Guelpherbyti: impensis Viduae Conradi Bunonis. typis Caspari Johannis Bismarci. (PHILIPPI_CLUVERII_INTRODUCTIO_In_Univers. pdf. Internet Archive 所収データではなく https://www.google.co.jp/books/edition/PHILIPPI_CLUVERII_INTRODUCTIO_In_Univers/VqueWEONIGMC?hl=ja&gbpv=0)
 Fridericus Hekelius の序文 (2 ページ), 著名人 11 人の賛辞 (6 ページ), Johannes Bunones 宛の Iustus Georgius Schottelius D. および Herm. Corningius の書簡 (14 ページ), 地図目次 (2 ページ), 本文 (607 ページ), 地名索引 (139 ページ)。本文は、段落ごとに見出しと番号とが付けられ、段落によっては長短各種の補足説明が細字で加えられている。地図を含む。
- ⑮1694 *Philippi Cluverii Introductio in omnem geographiam veterem aequae ac novam. olim studio et opera Johannis Bunonis [...] multis locis emendata, memorabilibusque aucta jam vero tabulis geographicis xlii. amplius aeri denuo incisus auctior nec non additamentis & annotationibus locupletata, locisque in multis passim correctior curante Johanne Reiskio*. Wolffebüttelae, : sumptibus haeredum Bunonianorum. typis Caspari Johannis Bismarci. (philippicluerii00clve_5.pdf)
 本版は表題が *universam* ではなく *omnem* となっている。
 Reiskius の献辞 (4 ページ), 無署名の序文 (4 ページ), Leopoldus Guilielmus の序文 (2 ページ), Johannes Bunones 宛の Iustus Georgius Schottelius D. および Herm. Corningius の書簡 (16 ページ), 地図目次 (2 ページ), 本文 (608 ページ), 地名索引 (265 ページ)。
 本文は、段落ごとに見出しと番号とが付けられ、段落によっては長短各種の補足説明が細字で加えられている。単色地図 46 葉。
- ⑯1695 [主題名] *Illustrati, & aucti. et P. Bertii Breviarium*. Patavii: typographia Seminarii (bub_gb_A3T18qWNk88C.pdf)

Josephus Vorstius の序文（6 ページ）、本文348ページ、目次（8 ページ）、Bertius の *Breviarium Totius Orbis Terrarum*（50ページ）、Series Romanorum Imperatorum（5 ページ）。

本文の後に折り込みの表があるがデータがないため詳細は不明。

- ⑰1697 [主題名] *tabulis geographicis xlv. ac notis olim ornata a Johannis Bunone, jam vero locupletata additamentis & annotationibus Joh. Frid. Hekelii & Joh. Reiskii*. Amstelaedami, : typis Joannis Wolters. : Londini, postant apud Sam. Smith & Benj. Walford, in coemetario D. Pauli (philippicluverii00clve_7.pdf) Joannes Wolters の献辞(4 ページ)、無署名の序文(2 ページ)、Johannes Bunones 宛の Iustus Georgius Schottelius D.および Herm. Corningius の書簡(10ページ)、地図目次(2 ページ)、Joannes Wolters の序文(1 ページ。蘭文か?), 本文(565ページ)、地名索引(185ページ)。
本文は、段落ごとに見出しと番号とが付けられ、段落によっては長短各種の補足説明が細字で加えられている。単色地図46葉。
- ⑱1697 [主題名] *tabulis geographicis xlv. ac notis olim ornata a Johannis Bunone, jam vero locupletata additamentis & annotationibus Joh. Frid. Hekelii & Joh. Reiskii*. Amstelaedami, : Joannem Wolters, bibliopolam op 't water.(philippicluverii00clve_8.pdf)
書肆は異なるが内部の構成は⑰と同一である。
- ⑲1711 [主題名] *tabulis geographicis xlv. ac notis olim ornata a Johannis Bunone, jam vero locupletata additamentis & annotationibus Joh. Frid. Hekelii & Joh. Reiskii*. Londini : Typis M. Jenour, impensis Joannis Nicholsoni (b30414593.pdf)
Joannes Wolters の献辞(3 ページ)、無署名の序文(2 ページ)、Johannes Bunones 宛の Iustus Georgius Schottelius D.および Herm. Corningius の書簡(7 ページ)、地図目次(1 ページ)、本文(429ページ)、地名索引(45ページ)。
本文は、段落ごとに見出しと番号とが付けられ、段落によっては長短各種の補足説明が細字で加えられている。単色地図46葉。
- ⑳1729 [主題名] *cum integris Johannis Bunonis, Joh. Frid. Hekelii & Joh. Reiskii, & selectis Londinensibus notis. [...] praefixit Augustinus Bruzen La Martiniere*. Amstelaedami, : Petrum De Coup (philippicluverii00clve_6.pdf) (bub_gb_IWzsIZzx4KkC.pdf)
Augustini Bruzen の序文(21ページ)、Johannes Bunones の序文(3 ページ)、無署名の序文(2 ページ)、Johannes Bunones 宛の Iustus Georgius Schottelius D.および Herm. Corningius の書簡(11ページ)、地図目次(2 ページ)、本文(688ページ)、地名索引(52ページ)。単色地図46葉。
philippicluverii00clve_6.pdfとbub_gb_IWzsIZzx4KkC.pdfとは同一版のデータと思われるが、後者には原本もしくはスキャンデータに乱丁・落丁がある。

以上について下記の点が指摘できる。

- ・本書は複数の出版社から同一著者・主題名で少なくとも100年間刊行されている（とは言え、⑧でも少なからぬ補訂がなされており、⑪以降ではそれは Cluverius の文章よりもはるかに長い。これを Cluverius の著作と呼ぶべき(呼びうる)か否かは検討の余地がある。しかし少なくとも彼の名前に利用価値が認められていたということであろう)。
- ・1641年には地図付きのものが現れている(④) 一方、1695年になっても地図のつかない版があった(⑱)。
- ・地名索引も1641年(④)に付けられ、それ以降⑨⑫⑯以外の版には付いている。ほとんどが本文ページ数の2割以上のページ数を占める長大なものである(⑱以降の索引はページ数は少ないが各ページ4段組となっており、項目数が著しく減少したわけではないと思われる)。

文献

小野鉄二(1932)『岩波講座 地理学〔総論〕 西洋地理学史』岩波書店

立岡裕士(2021a) Cluverius の Introductionis in universam geographiam, tam veterem quam novam : 第1巻および第2巻1～7章の翻訳。鳴門教育大学研究紀要36, 209～231

立岡裕士(2021b) Cluverius の Introductionis in universam geographiam, tam veterem quam novam : 第6巻第

11章～第16章の翻訳。徳島地理学会論文集16, 155～160

立岡裕士 (2022) Cluverius の *Introductionis in universam geographiam, tam veterem quam novam* : 第2巻第8章～第3巻第8章の翻訳。鳴門教育大学研究紀要37, 243～267

Kish, (1978) *A source book in geography*. Harvard Univ. Pr.

Martin, G. (2005) *All possible worlds*. Oxford Univ. Pr.

注

- 1) Leob 版[4.12.81]では Maros となっている。
- 2) 該当箇所不明。
- 3) 該当箇所不明。
- 4) キケロ (1.10, 4.1)・Plinius(3.5.38, 3.10.95)・プトレマイオス (3.1.10) などに Magna Graecia に関する言及・記述はあるが、Cluverius のここの記述の根拠となりうるかは疑わしい。
- 5) Strabon・Trogus とともに該当箇所不明である。Trogus には Magna Graecia という語は使用されていない。
- 6) Ulgata の Genesis10.3に Rifath と記載されるものであろうか。
- 7) Polo には異本が多いと言われる。Cluverius は版本としては F 本には接しえたはずであるが、彼がいかなる系列の本に依拠したか（あるいは数種の異本を比較して記事を採取したか）は明らかではない。カンバリクに関する記事では、12の門外に郊外地区が広がることは F 本にはなく R 本にある（諸本の異同は高橋訳書による）。
- 8) Quinsai に関する記事 (Polo152) では、(1) F 本では湖は市の南にあるとされる、(2) 12000の橋が石造であることは R 本にはない、(3) 逆に橋の高さを帆柱との関係で明記することおよび Quinsai 駐屯兵が3万であることを記すのは R 本のみである。
- 9) Plinius[6.28.110]には地方名に関する記述はない。また Leob 版では民族名は Harmozaei となっている。
- 10) そこではハルムザとなっている。
- 11) Cluverius の引用では、原文 (Leob 版) の ignem (火) を hircum (雄山羊), leae (雌獅子) を leo (雄獅子) としている。したがってこの引用に関しては和訳書によらなかった。
- 12) Numeri26.63他に見られるが、Urgata では Hiericho と表記されている。
- 13) Ulgata には Galilaea inferior という表記は見当たらない。
- 14) Ulgata では次の Zor とともに、Achcho・Tyrys であり、Acon・Zor の綴りは使用されていない。
- 15) Cluverius は (他の都市名が並ぶときは違って) Hippos と Dios との間にカンマを入れていないが、Plinius にあわせて二つの都市とした。
- 16) Plinius[5.16.74]の文章であるが、Plinius では地方 regionum ではなく王権 regnorum という単語が用いられている。
- 17) Genesis11.28などにおける表記は Chaldeorum である。
- 18) 該当箇所不明。
- 19) 「200の武装兵」と訳した箇所は原文は ducenos armatos milites である。しかし Mela の文章では dena armatorum milia [2万の兵] となっている。Bude および飯尾は緊急時に2万の兵が投入されると訳しているが、Cluverius は高官の衛兵と解しているのではないかと考えて本文のように訳した。
- 20) プトレマイオス[4.7.10, 4.8.2]に多くの民族名が列挙されているが、枚挙に暇がないといった記述は見当たらない。
- 21) Cerne 島については Plinius[6.36.198～199]に記述があるが、最大の島とは記載されていない。

**Cluverius's *Introductionis in universam geographiam,*
tam veterem quam novam :
an translation of volume 3 ch.9 to vomule 6 ch.10**

TATUOKA Yuuzi

Cluverius was a german geographer in the early 17th Century. His book was written in Latin. This writer translated a part of it into Japanese. The titles of each chapter are follows :

Vol. 3

- ch. 9 On the provinces of Germania Empire situated only in Gallia on this side of Rhenus
- ch. 10 Svevia, Franconia, Platinatus Rheni
- ch. 11 Upper Platinatus, Bavaria, Salisburgiensis Archiepiscopatus, Tirolis Comitatus
- ch. 12 Croatia, Vinidi Marchia, Carniola, Carinthia, Stiria, Austria
- ch. 13 Bojohaemia, Moravia, Silesia, Lusatia
- ch. 14 Marchia Brandeburgiensis, Pomerania, Meckeloburgium, Holsatia
- ch. 15 Luneburgensis Ducatus, Bremensis Archbishopric, East Frisia, Westfalia, Clivia, Montanus Ducatus
- ch. 16 Haßia, VVetteravia, Buchovia Thuringia
- ch. 17 Misnia, Saxonia, Brunsvicensis Ducatus
- ch. 18 On Archbishopati and academia in Germania
- ch. 19 Dania Kingdom
- ch. 20 Norvagia, Finnomarchia, Islandia, Gronlandia, Frieslandia
- ch. 21 Suedia, Botnia, Scrickfinnia, Lappia, Finnia
- ch. 22 On Italia and its various names
- ch. 23 On the ancient division of Italia
- ch. 24 Ligures, Taurini, Cottii, Ideonni Kingdom, Salaßi, Lepontii, Euganei, Rhaeti, Veneti, Carni, Histri
- ch. 25 On Gallia Cisalpina
- ch. 26 Etruria and Vmbria
- ch. 27 On Sabini and Latii
- ch. 28 Picentes, Vestini, Marrucini, Peligni, Marsi, Frentani, Samnites, Hirpini
- ch. 29 On Campania, Picentini, Apulia, Calabria
- ch. 30 On Lucani, Brutii and Magna Graecia
- ch. 31 On the rivers in Italia
- ch. 32 On the mountains in Italia
- ch. 33 On the various inhabitants in Italia
- ch. 34 On the newest division of Italia
- ch. 35 Histria, Forum Iulium, Marchia Tarvisiana, Grisones, Helvetiorum Stipendiarii, and Pedemontium
- ch. 36 Lombardia, Genuensis ager
- ch. 37 Tuscia, Romaniola, Marchia Anconitana, Romanus ager and Ducatus Spoletanus
- ch. 38 On Neapolitanum Kingdom
- ch. 39 On the cities in Neapolitanum Kingdom
- ch. 40 On the Episcopatus, academies, nicknames for famous cities in Italia

- ch. 41 On Sicilia
- ch. 42 On the inhabitants in Sicilia and the modern description on them
- ch. 43 On Sardinia and Corsica

Vol. 4

- ch. 1 On Pannonia
- ch. 2 On the inhabitants in Pannonia, and on Hungaria Kingdom
- ch. 3 On Sclavonia and Bosnia
- ch. 4 On Illyricum
- ch. 5 On the inhabitants in Illyricum and the modern description on them
- ch. 6 On Graecia and the summary of its division
- ch. 7 On Epirus and Peloponnesus
- ch. 8 On Hellas, that is Graecia properly called, and Thessaria
- ch. 9 On Macedonia
- ch. 10 On the rivers, mountains, and the islands near Graecia
- ch. 11 On the inhabitants in Graecia and modern description on them
- ch. 12 On the Creta Island
- ch. 13 On Thracia
- ch. 14 On the ancient cities, rivers and mountains in Thracia
- ch. 15 On the inhabitants and present famous cities in Thracia, and besides on the patriarch of the religion in Graecia
- ch. 16 On Moesia
- ch. 17 Summary of all Scythia description, and besides on the ancient Scythia Europa
- ch. 18 On Dacia
- ch. 19 Transsilvania, Valachia and Moldavia
- ch. 20 Minor Tattaria, Taurica Chersonesus
- ch. 21 Sarmatia Europa
- ch. 22 On the inhabitants, rivers, and mountains in Sarmatia, and besides on Hyperborei
- ch. 23 On Polonia Kingdom, its provinces and dependencies
- ch. 24 Polonia properly called
- ch. 25 Lituania, Russia and Podolia
- ch. 26 Volinia, Podelassia, Masovia, Samogitia
- ch. 27 On Borussia and Cassiibia, and besides Episcopatus and academics in Polonicus Kingdom
- ch. 28 Moscovia, or Russia Alba Grand Ducatus

Vol. 5

- ch. 1 Summary of Asia description
- ch. 2 Scythia Asiatica, Sarmatia Asiatica, and besides Serica, Sogdiana
- ch. 3 Summary of Tattaria description
- ch. 4 Deserted Tattaria, Zagataia and Turckestan
- ch. 5 Cataija Empire of Great Chanus, and besides ancient Tattaria
- ch. 6 On Sina region, or China
- ch. 7 On the ancient India
- ch. 8 Summary of India description
- ch. 9 Cambaia, Narsinga, Malabar, Orixia
- ch. 10 Bengala, Pegu, Sian, Camboia, Upper India
- ch. 11 Islands in Indicum Sea
- ch. 12 On Persa Empire

- ch. 13 Gedrosia, Carmania, Drangiana, Arachosia, Paropamisis, Bactriana, Margiana, Hyrcania, Aria, Parthia
- ch. 14 Persis, Susiana, Assyria, Media
- ch. 15 On the mutations of various empires in Asia, description of Sophos Kingdom, and besides on Ormuz Kingdom
- ch. 16 On the remnants of ancient Asia regions, now subject to Turca Empire, and especially on Albania, Iberia, Colchide and Armenia
- ch. 17 Cappadocia, Galatia, Pontus, Bithynia
- ch. 18 Minor Asia, or Asia properly called
- ch. 19 Lycia, Pamphylia and Cilicia
- ch. 20 Summary of Syria description, and besides Palastina, and Idumaea, Iudea subject to it
- ch. 21 Samaria, Galilaea, Phoenice and Libanus
- ch. 22 Antiochene, Comagene and Coelesyria
- ch. 23 Mesopotamia and Babylonia
- ch. 24 Arabia
- ch. 25 On the Turca Empire and the famous cities subject to it
- ch. 26 Cyprus and Rhodus

Vol. 6

- ch. 1 Summary of Africa description
- ch. 2 Aegyptus
- ch. 3 On the inhabitants in Aegyptus and the Nilus river, and besides on the exterior Lybia
- ch. 4 Cyrenaica, Minor Africa, desert Lybia, Troglodyta, Garamantes
- ch. 5 Numidia, Mauritania
- ch. 6 Gaetuli, Mt. Atlas, interior Lybia, Aethiopia
- ch. 7 On the inhabitants in Africa in general, its modern description, and especially on Aegyptus
- ch. 8 Barbaria
- ch. 9 Biledulgerit, Srra desert, Nigritae, Abissini
- ch. 10 Exterior Aethiopia, and the islands near Africa